

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 563 集

こまいた

駒板 3 遺跡発掘調査報告書

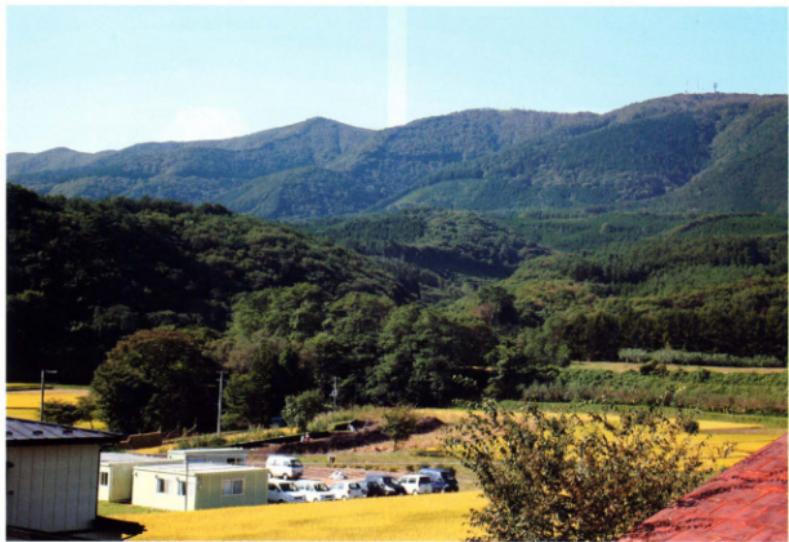
中山間地域総合整備事業(大清水地区)関連遺跡発掘調査

2009

岩手県二戸地方振興局農政部農村整備室
(財) 岩手県文化振興事業団

駒板3遺跡発掘調査報告書

中山間地域総合整備事業(大清水地区)関連遺跡発掘調査



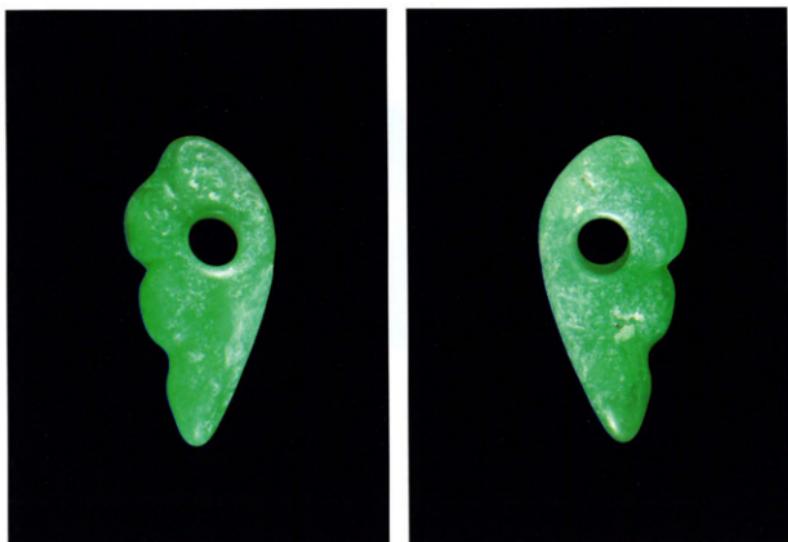
調査区と折爪岳



住居跡から出土した土器



人面付香炉形土器



ヒスイ石製品

序

岩手県には旧石器時代から連綿と続く数多くの遺跡が残されております。先人達が創造してきたこれらの貴重な文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは、私達県民に譲せられた責務であるといえましょう。一方、広大な面積を有し、その大部分が山地である本県にあっては地域開発による社会資本の充実も県民の切実な願いであります。

このような埋蔵文化財の保護、保存と開発との調和は今日的な課題であり、当(財)岩手県文化振興事業団は埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもと、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、中山間地域総合整備事業(大清水地区)関連遺跡発掘調査に関連して平成20年度に発掘調査を行った九戸郡軽米町大字山内に所在する駒板3遺跡の調査結果をまとめたものであります。

発掘調査によって、この地域に縄文時代後期後葉の集落跡が存在していたことが明らかになりました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず、埋蔵文化財行政に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成に御協力を賜りました岩手県二戸地方振興局農政部農村整備室をはじめとする関係各位に衷心より感謝申し上げます。

平成21年12月

財團法人 岩手県文化振興事業団
理事長 武田牧雄

例　　言

- 1 本報告書は、岩手県九戸郡軽米町大字山内第1地割 64-1 ほかに所在する駒板3遺跡の発掘調査の結果を収録したものである。
- 2 本遺跡の調査は、中山間地域総合整備事業大清水地区に関わる事前の緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課と岩手県二戸地方振興局農政部農村整備室との協議を経て、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが委託を受け、受託事業として実施した。
- 3 本遺跡の調査成果は、すでに『平成20年度発掘調査報告書』(岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第546集)において発表しているが、内容については本書が優先する。
- 4 岩手県遺跡登録台帳に登録されている本遺跡の遺跡番号と遺跡略号は次の通りである。

　　遺跡番号 I F 92 - 1057 / 遺跡略号 K I 3 - 08

- 5 野外調査の面積・期間・担当者は、次の通り。

　　調査面積 1,587 m²

　　調査期間 平成20年9月1日～11月18日

　　調査担当者 滝 浩二郎・菅野紀子

- 6 室内整理の期間・担当者は、次の通り。

　　整理期間 平成20年11月4日～平成21年3月31日

　　整理担当者 滝 浩二郎・菅野紀子

- 7 遺物の鑑定は、次の機関に依頼した。

　　石材鑑定：花崗岩協会

　　炭化種子同定・・・(株)古環境研究所

　　ヒスイ原石産地同定・・・(株)第四紀地質研究所

- 8 基準点測量は、有限会社ド斗米測量設計に委託した。

- 9 野外調査にあたっては、岩手県二戸地方振興局をはじめ地元の方々の御協力をいただいた。

- 10 本報告書の編集については、滝浩二郎が行った。各章の執筆については第Ⅰ章「調査に至る経過」が岩手県二戸地方振興局農政部農村整備室、それ以外の章は滝浩二郎が執筆した。

- 11 本遺跡の調査で得られた一切の資料、出土遺物・撮影写真(データ含む)・遺構実測図・遺物実測図などは岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

目 次

I 調査に至る経過	1
II 遺跡の地理的環境	
1 遺跡の位置	1
2 遺跡周辺の地理的環境	2
3 基本土層	2
4 遺跡周辺の歴史的環境	7
III 調査の経過と方法	
1 野外調査の経緯	11
2 野外調査の方法	11
3 室内整理の手順と方法	13
IV 検出遺構と出土遺物	
1 遺構	17
2 遺物	36
V まとめ	
1 調査区	74
2 遺構	74
3 遺物	75
4 総括	76
VI 分析・鑑定	
1 炭化種実同定	77
2 ヒスイ石製品产地同定	79
報告書抄録	124

表 目 次

第1表 周辺の遺跡一覧表	5	第4表 石器観察表	71
第2表 土器観察表	65	第5表 石製品観察表	73
第3表 土製品観察表	70		

図版目次

第 1 図	遺跡の位置	2	第 27 図	1 号溝	35
第 2 図	周辺の地形と調査範囲	3	第 28 図	遺構内出土土器(1)	41
第 3 図	地形分類図	4	第 29 図	遺構内出土土器(2)	42
第 4 図	基本土層	7	第 30 図	遺構内出土土器(3)	43
第 5 図	周辺の遺跡分布図	10	第 31 図	遺構内出土土器(4)	44
第 6 図	グリッド配図	12	第 32 図	遺構内出土土器(5)	45
第 7 図	凡例図	14	第 33 図	遺構内出土土器(6)	46
第 8 図	遺構配図	15	第 34 図	遺構内出土土器(7)	47
第 9 図	1 号住居跡	17	第 35 図	遺構内出土土器(8)	48
第 10 図	2 号住居跡	18	第 36 図	遺構内出土土器(9)	49
第 11 図	3 号住居跡(1)	19	第 37 図	遺構内出土土器(10)	50
第 12 図	3 号住居跡(2)	20	第 38 図	遺構内出土土器(11)	51
第 13 図	4 号住居跡	21	第 39 図	遺構外出土土器(1)	52
第 14 図	5 号住居跡(1)	22	第 40 図	遺構外出土土器(2)	53
第 15 図	5 号住居跡(2)	23	第 41 図	遺構外出土土器(3)	54
第 16 図	6 号住居跡(1)	24	第 42 図	土製品	55
第 17 図	6 号住居跡(2)	25	第 43 図	石器(1)	56
第 18 図	7 号住居跡(1)	26	第 44 図	石器(2)	57
第 19 図	7 号住居跡(2)	27	第 45 図	石器(3)	58
第 20 図	8 号住居跡(1)	28	第 46 図	石器(4)	59
第 21 図	8 号住居跡(2)	29	第 47 図	石器(5)	60
第 22 図	9 号住居跡	30	第 48 図	石器(6)	61
第 23 図	10 号住居跡(1)	31	第 49 図	石器(7)	62
第 24 図	10 号住居跡(2)	32	第 50 図	石器(8)	63
第 25 図	1 号炉	33	第 51 図	石器(9)、石製品	64
第 26 図	1・2 号土坑	34			

写真図版目次

写真図版 1	航空写真	87	写真図版 20	遺構内出土土器(2)	106
写真図版 2	調査区	88	写真図版 21	遺構内出土土器(3)	107
写真図版 3	基本土層	89	写真図版 22	遺構内出土土器(4)	108
写真図版 4	1・2 号住居跡	90	写真図版 23	遺構内出土土器(5)	109
写真図版 5	2 号住居跡	91	写真図版 24	遺構内出土土器(6)	110
写真図版 6	3 号住居跡	92	写真図版 25	遺構内出土土器(7)	111
写真図版 7	4 号住居跡	93	写真図版 26	遺構内出土土器(8)	112
写真図版 8	5 号住居跡	94	写真図版 27	遺構内出土土器(9)	113
写真図版 9	5 号住居跡	95	写真図版 28	遺構外出土土器(1)	114
写真図版 10	6 号住居跡	96	写真図版 29	遺構外出土土器(2)	115
写真図版 11	6 号住居跡	97	写真図版 30	遺構外出土土器(3)、土製品	116
写真図版 12	7 号住居跡	98	写真図版 31	石器(1)	117
写真図版 13	8 号住居跡	99	写真図版 32	石器(2)	118
写真図版 14	8 号住居跡	100	写真図版 33	石器(3)	119
写真図版 15	9 号住居跡	101	写真図版 34	石器(4)	120
写真図版 16	9・10 号住居跡	102	写真図版 35	石器(5)	121
写真図版 17	1 号炉	103	写真図版 36	石器(6)	122
写真図版 18	1 号溝、1・2 号土坑	104	写真図版 37	石器(7)、石製品	123
写真図版 19	遺構内出土土器(1)	105			

I 調査に至る経過

駒板3遺跡は、中山間地域総合整備事業大清水地区（以下、大清水地区）の施行に伴い、その事業区域内に位置することから、工事施行前に発掘調査を実施することとなったものである。

大清水地区は九戸郡軽米町南西部に位置し、南北に走る国道340号線を中心に瀬内川やその支流に沿って分散した集落によって形成されている。農地の現況は、未整備の水田（5～10a/枚）で、なおかつ幅員狭小な農道であることから作業効率が悪く、また用排水兼用の土側溝のため、排水不良等の原因により湿田となっている。このため、大清水地区は、ほ場整備の実施により、水田の汎用化と農作業の効率化等を図り、農業経営の安定化及び集落営農の促進に資することを目的として、平成19年度に事業着手したものである。

大清水地区的施行に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、二戸地方振興局農政部農村整備室から平成19年10月22日付二地農（整）第104-1号「中山間地域総合整備事業計画における埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」により岩手県教育委員会に対して試掘調査の依頼を行い、依頼を受けた岩手県教育委員会は、平成19年10月30日に試掘調査を実施し、工事に着手するには駒板3遺跡の発掘調査が必要となる旨を平成19年11月30日付教生第1018号「中山間地域総合整備事業計画における埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」により回答してきた。この回答を受け、平成20年2月14日付二地農（整）第104-7号「埋蔵文化財試掘調査に係る工法協議について」により、盛土工法による保存箇所と発掘調査による記録保存箇所について岩手県教育委員会と協議を行った。

その結果を踏まえ、岩手県教育委員会の調整を受けて平成20年7月25日付けで財团法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施したものである。

（岩手県二戸地方振興局農政部農村整備室）

II 遺跡の地理的環境

1 遺跡の位置

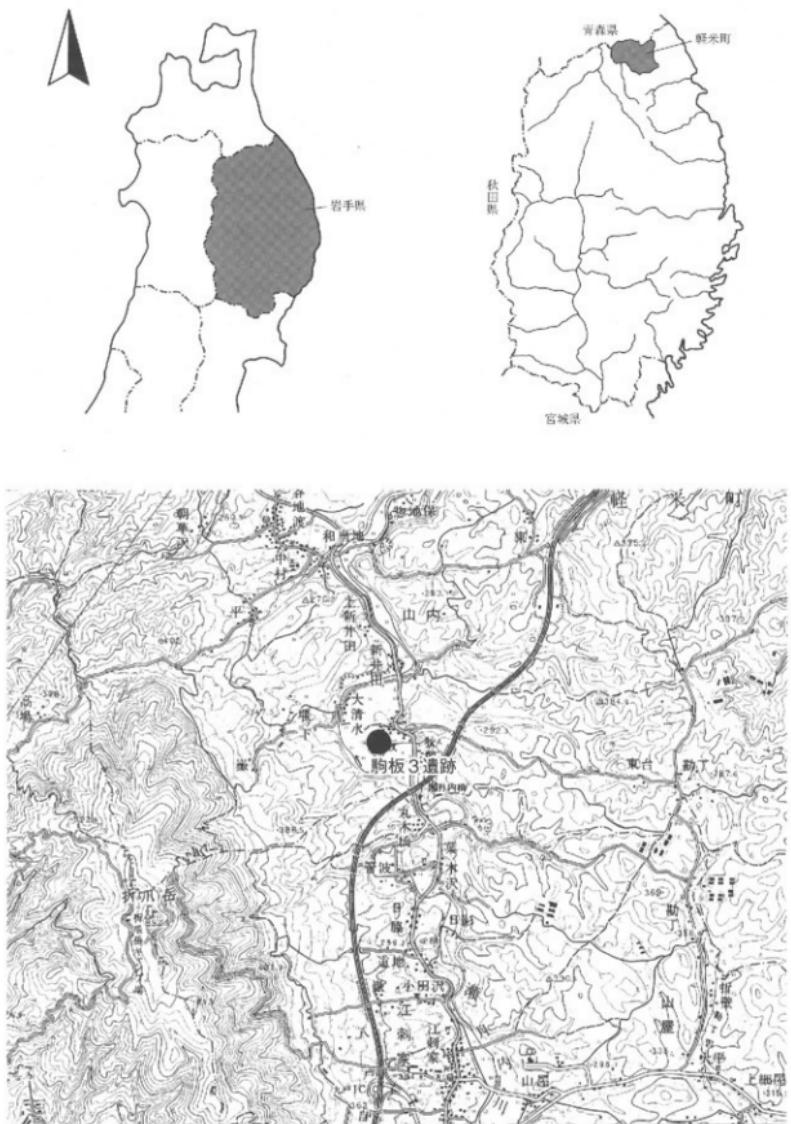
駒板3遺跡が所在する軽米町は岩手県の北端部に位置し、県都盛岡市から北東約73kmの距離にあり、総面積は約246km²で、北は青森県南部町・八戸市南郷区・階上町、南は九戸村、久慈市、西は二戸市、東は洋野町に接する。

遺跡は九戸郡軽米町大字山内第1地割64-1ほかに所在し、軽米町南西部の軽米町と九戸村の町村境のおよそ北緯40度17分10秒、東經141度24分16秒の地点に位置し、地形図上では国土地理院発行の5万分の1地形図「一戸」NJ-54-18-11（九戸11号）の図幅に含まれる。

2 遺跡周辺の地理的環境

軽米町は北上山地の北端部に位置し、地勢の多くは山地・丘陵地である。遺跡の西側には折爪岳（852m）を頂点とし、小倉岳（652m）、名久井岳（615m）が南北に連なる山地で占められる。これに対して、北から北東側には標高200m～400m前後のなだらかな丘陵や小起伏山地が広がり、周辺の高い所としては、東に久慈平岳（760m）、階上丘（740m）、蛇石山（525m）、姫ヶ森（498m）などが見ら

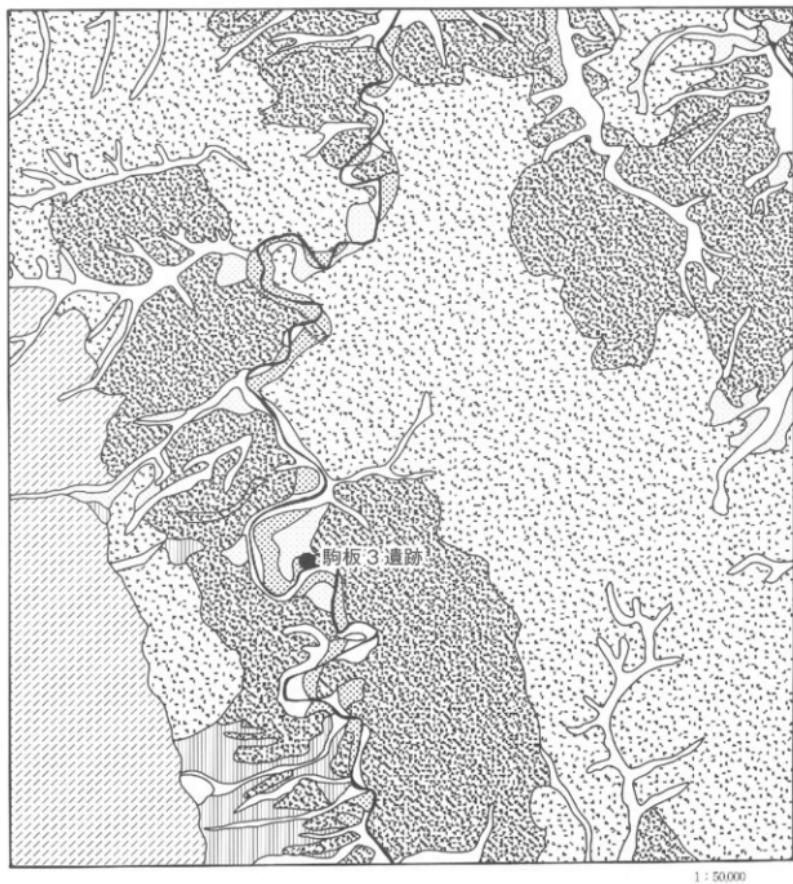
1 遺跡の位置



第1図 遺跡の位置



第2図 周辺の地形と調査範囲



1 : 50,000



山地



丘陵地 A



丘陵地 B



plateau



砂礫段丘 A



砂礫段丘 B

第3図 地形分類図

れるだけである。これらの丘陵・山地は、久慈市山形村明神岳を源泉として折爪岳の東山麓を蛇行して北流する瀬月内川や九戸村雪谷地区周辺を源流とする雪谷川、およびこれらの支流によって開析されている。また、瀬月内川と雪谷川は軽米町大鳥付近で合流し、水吉をすぎて青森県に入り、その名を新井田川と変え、八戸市で太平洋に注ぐ。瀬月内川と雪谷川およびこれらの支流は流域周辺の丘陵・山地を開析しながら、所々に小規模な沖積地や段丘を形成しているが、谷底平野や段丘の発達も悪く、小規模で地形区分に不明な点が多いのが現状である。本遺跡周辺を見ると、瀬月内川の西方は折爪岳山麓の崖錐崩壊地が開析を受けて丘陵地状を呈する地形となっており、これは瀬月内川の開析による平地（瀬月内川地溝帯）とは明瞭に異なる段丘で中位段丘に相当する。一方で瀬月内川東方には北上山地の古い隆起準平原を起源とする起伏の小さな山地が広がっている。これらに挟まれた瀬月内川流域にはこれに注ぐ大小の沢によって開析された沖積地が形成され、今回調査を行った駒板3遺跡も瀬月内川の流れによって形成された低位の段丘面上にある。

中～古生代の軽米町付近の地質は、北部北上山地の西半部を含む葛巻～釜石帯の延長上にあり、先第三系が分布する。主に頁岩・砂岩・チャートなどからなり、火山岩・凝灰岩類・石灰岩を伴い、石灰岩・チャートには石炭～ジュラ紀の化石を含む。その上位は十和田・八甲田系の火山碎屑物に覆われ、古い順に洪積世では天狗袋火山灰層・高龜火山灰層・八戸火山灰層、沖積世では二ノ倉火山灰層、南部浮石層・十和田中振浮石層・十和田b降下火山灰層・十和田a降下火山灰層となる。

遺跡周辺の地質を見ると瀬月内川西方は折爪岳起源の丘陵地東部先端にあたり、表土の下には古生層の粘板岩・チャートによって作られる崖錐性堆積物が厚く堆積しているのに対し、瀬月内川東方は表土の下にローム（黒ボク）があり、遺跡付近は駒板統と呼ばれる黒ボク土壤である。

＜参考文献＞

岩手県企画開発室（北上山系開発） 1976『北上山系開発地域 土地分類基本調査 一戸』

3 基 本 上 層

今回の調査区は、瀬月内川の影響を受けた沖積段丘面に立地する。調査区幅は東西間 175 m、南北間 188 mで調査区北側のI Cグリッドと南西側のII A・III A区は湿地状の地形であった。このうちII A・III A区は耕作土下から古代の溝跡の一部が検出され、埋土中や周辺からは繩文土器が散布的な出土を確認したものの、溝の検出面から約1 m下の礫層間までは酸化鉄を含む褐色粘土を主体とする層で造構・遺物はみつからなかった。調査の主体となつた遺構検出箇所にもっとも準じているII B 14 j グリッドを基本層序のメインセクションとしたが、遺跡全体に見られる層序をすべて確認できる箇所はなく、欠落した層序についてはIII層は堆積が確認できた補点4より南西側に位置するII B 19 f グリッドの基本層序3層、補4より北東側で堆積が確認できるV層を調査区北側 I C 9 i の基本層序7層よりそれぞれ補完した。なお、補1に隣接する調査区のトレンチで十和田a降下火山灰の堆積がII層・III層間で確認されたが、造構・遺物は全くなかった。また、湿地状で水の湧く地点でもあり、農業用道路として日常的に使用され、早急に埋め戻しを行わなければならない状況であったため図化は行わず、写真のみの記録に留めたため、基本土層図面に該当する層は含まれていない。

今回の調査で造構・遺物が確認されたのはIV層・V層で、IV層は後期後半、V層は後期前半の遺物を包含する。

基本土層（II B 14 j）<メインセクション>

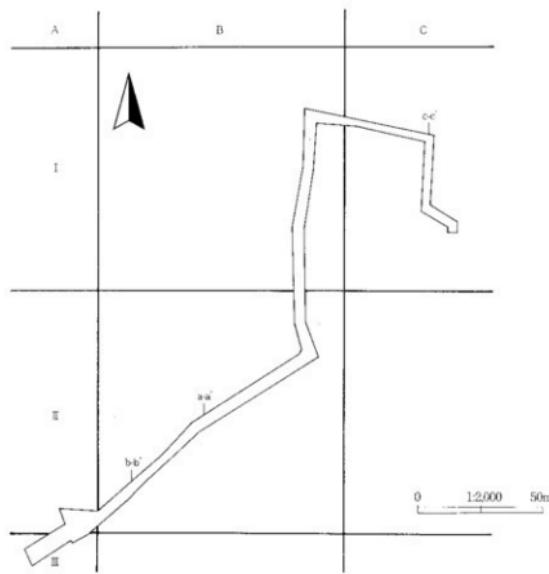
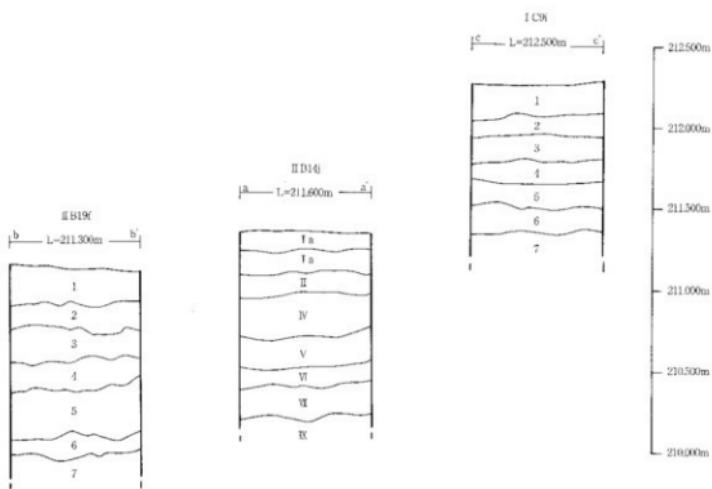
- I 10YR2/2 黒褐色土 旧耕作土。2層（a、b層）に分層される。層厚各 25 cm。
- II 10YR3/2 黒褐色土 粘性なし しまりあり 層厚 10 ~ 20 cm。旧耕作土ないし、整地層の可能性あり。
下に酸化鉄層確認できる箇所あり（この場合、酸化鉄層を II b 層と区別した）
- III 10YR2/1 黒色土 粘性なし しまりややあり 十和田 b 降下火山灰（ $\phi 1 \sim 3 \text{ mm}$ ）7%混入（※土器含む）。補4より南西側の調査区の一部で堆積を確認。
- IV 10YR2/2 黒褐色土 粘性ややあり しまりあり 径 1 mm の中揮浮石粒微量（1%未満）含む。縄文後期後半の遺構検出・遺物出土。
- V 10YR2/1 黒色土 粘性なし しまりあり 径 1 mm の中揮浮石粒 3 ~ 5 % 含む。縄文後期前半の遺物出土。
- VI 10YR2/1 黒色土 粘性なし しまりあり にぶい黄燈色砂（10YR6/4）20%、中揮浮石粒 3 % 含む。
- VII 10YR2/1 黒色土 粘性あり しまりあり 径 1 ~ 3 cm の礫 10%混入。
- VIII 10YR4/2 灰黃褐色土 粘性あり しまりあり 補4より北東側の調査区で堆積を確認。湿地状でない箇所については土色は 10YR4/3 ~ 10YR4/4 である。
- IX 砂疊層。

基本土層（I C 9 i）

- 1 10YR4/1 灰褐色土 現耕作土。
- 2 10YR2/1 黑色土 粘性あり しまりあり 1 ~ 2 mm の中揮浮石粒 1 % 未満含む。IV層に相当
- 3 10YR2/1 黑色土 粘性ややあり しまりあり 1 ~ 2 mm の中揮浮石粒 3 % 未満含む。V層に相当
- 4 10YR2/2 黒褐色土 粘性ややあり しまりあり 1 ~ 2 mm の中揮浮石粒 5 % 未満含む。3層が 10% 混合。VI層に相当
- 5 10YR4/4 紅色砂 粘性なし しまりあり 1 ~ 2 mm の中揮浮石粒 20 ~ 25%含む。VI層に相当
- 6 10YR2/1 黑色土 粘性あり しまりあり VII層に相当
- 7 10YR4/2 灰黃褐色土 粘性あり しまりあり VIII層に相当

基本土層（II B 19 f）

- 1 10YR3/2 黒褐色土 粘性なし しまりあり 十和田 b 降下火山灰（ $\phi 1 \sim 2 \text{ mm}$ ）3 %、中揮浮石粒（ $\phi 1 \text{ mm}$ ）1 %、炭化物粒（ $\phi 1 \text{ mm}$ ）1 %混入（※旧耕作土） I層に相当
- 2 10YR3/3 暗褐色土 粘性なし しまりややあり 十和田 b 降下火山灰（ $\phi 1 \text{ mm}$ ）2 %混入 II層に相当 To-a 15%ブロックで混入
- 3 10YR2/1 黑色土 粘性なし しまりややあり 十和田 b 降下火山灰（ $\phi 1 \sim 3 \text{ mm}$ ）7 %混入（※土器含む） III層に相当
- 4 10YR3/1~3/2 黒褐色砂質土 粘性なし しまりややあり 酸化鉄 10%混入 IV層に相当
- 5 10YR3/2 黒褐色砂質土 粘性ややあり しまりややあり 酸化鉄 7 %、中揮浮石粒 5 %（下部に多い）混入 V層に相当
- 6 10YR4/2 灰黃褐色砂質土 粘性ややあり しまりややあり 酸化鉄 3 %、中揮浮石粒 10%混入 VI層に相当
- 7 10YR4/1 暗褐色粘土 粘性あり しまりあり 酸化鉄 5 %混入 VII層に相当



第4図 基本土層

4 遺跡周辺の歴史的環境

(1) 軽米町の遺跡

軽米町の遺跡は、平成 19 年 12 月 31 日現在、岩手県教育委員会が作成した「岩手県遺跡情報検索システム（二戸・久慈地方振興局管内）」によれば、520 箇所が登録されている。時代別の内訳をみると 112 遺跡は時代が複合しているため重複するが、縄文時代 410、弥生時代 24、古墳時代 1、奈良・平安時代 116、中世 33、近世 48 で旧石器時代の遺跡は確認されていない。縄文時代の遺跡が全体の約 78% で最も多く、次いで古代が 28% であるが、古代の遺跡は、縄文時代の遺跡と複合するものが 90 遺跡と圧倒的に多い。中世・近世の遺跡はそれぞれ全体の 1 割に満たないが、中世はいずれも城館跡、近世は觀音林の一里塚以外はすべて製鉄関連遺跡である。遺跡の分布傾向としては縄文時代～古代が瀬内川・雪谷川とその支流一帯に多く、特に瀬内川西側の段丘に集中する傾向がある。近世の製鉄関連遺跡は、軽米町東方の山間部に集中する。

(2) 周辺の遺跡

軽米町の遺跡は、前述のように 520 箇所が登録されているが、このうち駒板 3 遺跡が所在する山内地区には 85 箇所の遺跡が周知されている。時代別の遺跡数は縄文時代が 77（複合遺跡を含む）で最も多く、約 93% を占める。古代は 5 であるが複合遺跡を含めると 26 あり遺跡数の 28% を占める。他は弥生時代 2、中世 3、近世 1 となっている。遺跡の立地状況をみると、折爪岳の東山麓の丘陵地や段丘面に多く、瀬内川左岸に偏って分布する傾向を示し、隣接する九戸村江刺家にある遺跡でも同様であるが、これは開発による遺跡の分布調査が瀬内川左岸に多いことも影響していると考えられる。

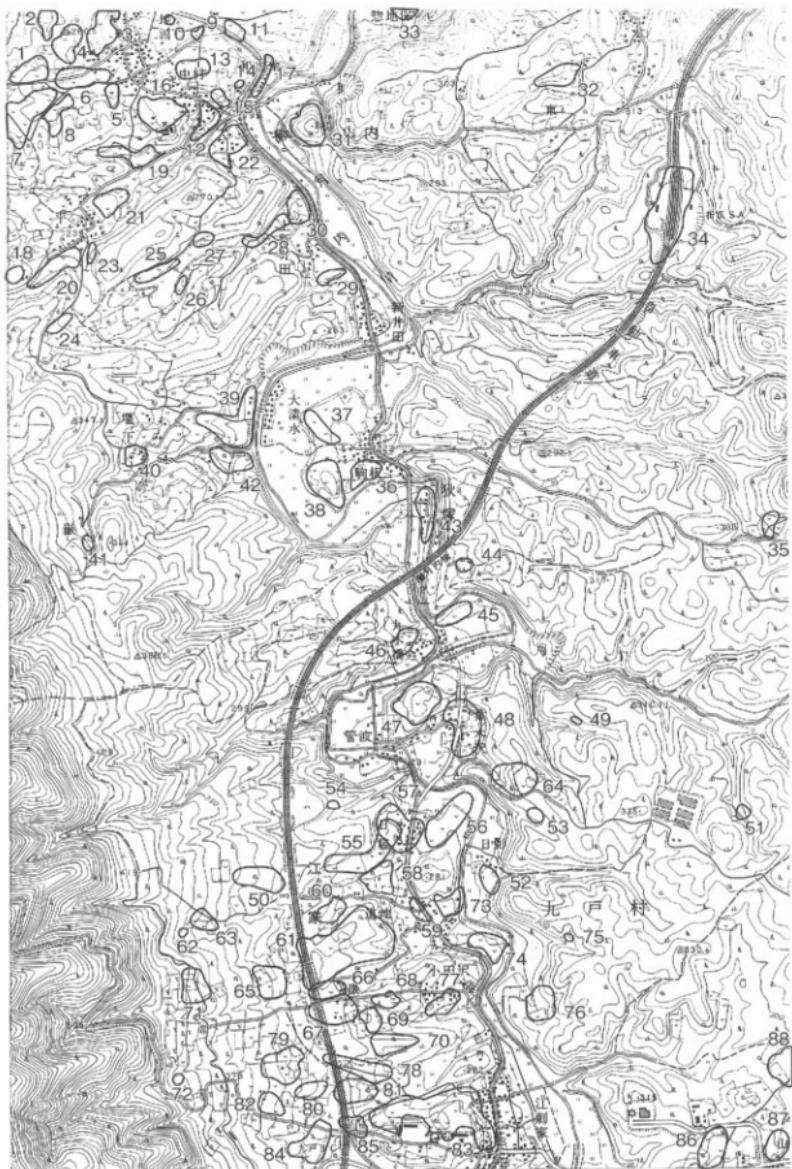
過去に周辺で調査された遺跡としては、昭和 57・58 年に東北縦貫自動車道八戸線建設に関連して行われた駒板遺跡があげられる。駒板遺跡は今回調査を行った駒板 3 遺跡から北東方向約 2 km の丘陵地上に立地する遺跡であり、縄文時代の住居跡や陥り穴状遺構、奈良時代の住居跡、近世の密錢鑄造跡や炭窯などがみつかっている。また、平成 7 年には県北農業研究センターの建設に関連して和当地 I 遺跡の調査が行われ、縄文時代の住居跡や陥り穴状遺構、弥生時代の住居跡等が見つかっている。

また、隣接する九戸村でも開発に伴い、多くの調査が実施されており、昭和 56・57 年には東北縦貫自動車道八戸線建設に関連して道地 II・道地 III・嶺 I・嶺 II・江刺家 IV・江刺家 V・滝谷 III などの各遺跡が調査されている。昭和 63 年～平成 3 年には国道 340 号の改良工事に関連して丸木橋遺跡・管波 I 遺跡・葉ノ木沢遺跡が調査されている。平成 2 ～ 4 年には農免農道整備事業に関連して田代 IV・田代 VI 遺跡の調査が実施され、田代 IV 遺跡では縄文時代中期の配石遺構・陥り穴状遺構、田代 VI 遺跡では縄文時代中期の住居跡が検出されている。

第 1 表 周辺の遺跡一覧表

NO.	遺跡名	よみがな	種別	時代	遺構・遺物
1	大久保塚	おおくぼがしまち	散布地	縄文・古代	縄文土器（後期）、土師器
2	大久保塚 3	おおくぼがしまち 3	散布地	縄文	縄文土器
3	谷地波	やちわたり	乗馬跡	縄文	縄文土器
4	谷地波 2	やちわたり 2	散布地	縄文	縄文土器
5	谷地波 5	やちわたり 5	散布地	縄文	縄文土器
6	上平 1	かみひら 1	放棄地	縄文・古代	縄文土器（後期・晚期）、土師器
7	上平 2	かみひら 2	集落跡	縄文・古代	縄文土器（後期・晚期）、土師器
8	上平 5	かみひら 5	散布地	縄文	縄文土器
9	大久保塚	おおくぼがしまり	散布地	縄文	縄文土器（後期・晚期）
10	大久保塚 2	おおくぼがしまり 2	散布地	縄文	縄文土器
11	和当地 1	わとうち 1	集落跡	縄文・古代	縄文土器ほか
12	和当地 3	わとうち 3	散布地	縄文	縄文土器
13	円塚	えんばつ	乗馬跡	中世	平場

NO	遺跡名	上みがな	種別	時代	遺構・遺物
14	山内中村1	さんないなかむら1	散布地	縄文、古代	縄文土器(後期・晚期)、土器群
15	山内中村2	さんないなかむら2	散布地	縄文、古代	縄文土器(後期)、土器群
16	山内中村3	さんないなかむら3	散布地	縄文	縄文土器
17	佛成寺	ぼうじょうじ	散布地	縄文、古代	縄文土器(前期)、土器群
18	平2	たいら2	散布地	縄文	縄文土器(後期・中期)
19	平3	たいら3	散布地	縄文	縄文土器(後期)
20	平41	たいらさわ1	散布地	縄文	縄文土器(後期・中期)
21	平42	たいらさわ2	集落跡	縄文	縄文土器(中期・後期)
22	小笠沢1	こやしづわ1	散布地	縄文	縄文土器(後期・中期)
23	小笠沢2	こやしづわ2	散布地	縄文	縄文土器(後期・中期)
24	小笠沢3	こやしづわ3	散布地	縄文	縄文土器(後期・中期)
25	小笠沢4	こやしづわ4	集落跡	縄文	縄文土器(後期・中期)
26	小笠沢5	こやしづわ5	散布地	縄文	縄文土器(後期・中期)
27	小笠沢6	こやしづわ6	散布地	縄文	縄文土器(後期・中期)
28	上新井田	かみいにだ	散布地	縄文	縄文土器(前中期・後期・晚期)
29	下新井田	しもいにだ	散布地	縄文	縄文土器(後期・中期)
30	和井田原	わいだたり	城壁跡	中世	塔、平塁
31	吉山	よしやま	城壁跡	中世	塔、单郭
32	和安地向1	わとうぢむかわい1	先史跡	縄文、古代	縄文土器(後期・晚期)、土器群
33	和安地向3	わとうぢむかわい3	散布地	縄文、古代	縄文土器(後期・晚期)、土器群
34	胸原	こまはら	集落跡、拠点場跡	縄文・近世	縄文土器(後期)
35	胸原2	こまはら2	散布地	縄文	縄文土器(後期)
36	胸原3	こまはら3	集落跡	縄文、古代	縄文灰陶(穴式住居跡、土坑、炉)、土器、石器
37	胸原4	こまはら4	散布地	縄文、古代	縄文(後陶期)、土器群
38	まつっこ	まつっこ	散布地	縄文、古代	縄文土器(後期)、土器群
39	境ノ下1	せきのした1	集落跡	縄文	縄文土器(前中期・後期・中期)
40	境ノ下2	せきのした2	散布地	縄文、古代	縄文土器(後期・晚期)、土器群
41	境ノ下3	せきのした3	散布地	縄文	縄文土器(後期・晚期)
42	境ノ下4	せきのした4	先史跡	縄文	縄文土器(後期・中期)
43	上秋坂	かみあきざか	集落跡	縄文、古代	縄文土器(後期)、土器群
44	川角	かわのくぼ	散布地	縄文	縄文土器(後期)
45	丸木橋	まるきばし	散布地	縄文	縄文土器
46	丸木橋Ⅱ	まるきばしⅡ	散布地	縄文	縄文土器
47	萬葉原	まんげんば	遺跡跡	中世	
48	安ノ木沢	あのぎわ	散布地	縄文、古代	縄文土器、土器群
49	安ノ木沢Ⅱ	あのぎわⅡ	鉱物開発	不明	塔壇、技術
50	安ノ木沢Ⅲ	あのぎわⅢ	散布地	縄文、奈良、平安	縄文土器、上加添
51	安ノ木沢Ⅳ	あのぎわⅣ	鉱物開発	不明	塔壇、道路
52	日影	ひかげ	散布地	縄文	縄文土器
53	日影Ⅱ	ひかげⅡ	製鉄炉跡	不明	塔壇、廢炉
54	日ノ船1	ひのふね1	製鉄炉跡	不明	塔壇、廢炉
55	日ノ船2	ひのふね2	散布地	縄文、奈良、平安	縄文土器
56	日の脇2	ひのわき2	散布地	縄文、奈良、平安	縄文土器、上加添
57	智積1	ちづみ1	集落跡	縄文	縄文土器(後期)
58	智積Ⅱ	ちづみⅡ	集落跡	縄文、平安	縄文土器(後期)、土器群
59	高塚1	たかつか1	散布地	縄文	石標、石斧、五石
60	高塚Ⅱ	たかつかⅡ	集落跡	縄文	縄文土器(晚期)
61	高塚Ⅲ	たかつかⅢ	集落跡	縄文	縄文土器(中期)
62	高塚Ⅳ	たかつかⅣ	祭祀開闢	不明	埋納、鉛錠
63	通途Ⅰ	どおり1	散布地	縄文	縄文土器
64	通途Ⅱ	どおり2	散布地	縄文	縄文土器
65	通途Ⅲ	どおり3	散布地	縄文	縄文土器
66	通途Ⅳ	どおり4	散布地	縄文	縄文土器(中期)
67	通途Ⅴ	だけⅤ	散布地	縄文	縄文土器
68	通途Ⅵ	だけⅥ	集落跡	縄文	縄文土器(晚期)
69	通途Ⅶ	だけⅦ	集落跡	縄文	縄文土器(晚期)
70	通途Ⅷ	だけⅧ	散布地	縄文	縄文土器(後・晚期)
71	通途Ⅸ	だけⅨ	散布地	縄文	縄文土器
72	通途Ⅹ	だけⅩ	祭祀開闢	不明	塔壇
73	通途Ⅺ	だけⅪ	散布地	縄文、奈良、平安	縄文土器、土器群
74	通途Ⅻ	だけⅫ	散布地	縄文、奈良、平安	縄文土器
75	高見原1	たかみはら1	祭祀開闢	小明	塔壇、废炉
76	高見原2	たかみはら2	祭祀開闢	不明	塔壇
77	小出沢	こいでざわ	散布地	縄文	縄文土器
78	江刺家1	えきしか1	集落跡	縄文、古代	縄文土器(晚期)、土器群
79	江刺家Ⅱ	えきしかⅡ	集落跡	縄文	縄文土器(後・晚期)
80	江刺家Ⅲ	えきしかⅢ	集落跡	縄文	縄文土器(中・晚期)
81	江刺家Ⅳ	えきしかⅣ	集落跡	縄文	縄文土器(中・後・晚期)
82	江刺家Ⅴ	えきしかⅤ	集落跡	縄文	縄文土器(晚期)
83	江刺家地	えきしかだい	地盤跡	中世	塔、土塁、平塁
84	春ノ1	わいみや1	集落跡	縄文	縄文土器(晚期)
85	春ノ2	わいみや2	集落跡	縄文	縄文土器(晚期)
86	山庭1	やまとや1	散布地	古代	土器群
87	山庭2	やまとや2	散布地	古代	土器群
88	山庭Ⅳ	やまとや4	散布地	縄文	縄文土器



第5図 周辺の遺跡分布図

III 調査の経過と方法

1 野外調査の経緯

(1) 作業経過

今回の調査は中山間整備事業に伴う排水路、バイパス、揚水機場の設置と共に伴う工事用（未舗装）道路の建設のため、調査の対象となる水田・畑・農道を対象に調査を行った。揚水機場用地の調査については当初の調査予定にはなかったが、境界である調査区西端部で縄文時代の遺物と古代の溝跡が検出されたため、岩手県二戸地方振興局農政部農村整備室と岩手県教育委員会の協議を経て、追加となったものである。

9月1日 調査開始。現場設営・環境整備。

9月8日 基準点設置。

9月8日 未舗装道路の一部（本・確認調査区分）の調査を行った。

9月26日 未舗装道路の残り部分（確認調査区分）の調査をトレンチにて行った。

10月14日 調査区北部の水田部分の調査を開始した。

10月20日 追加調査区分の調査に着手した。

10月23日 航空写真撮影を実施した。

10月29日 現地公開を実施した。参加者22名。

11月11日 調査終了確認。

11月14日 野外調査終了（埋め戻し含む）。一部資材搬出。

11月17日～11月18日 プレハブ用地内にて遺物水洗を行った。資材搬出完了（11/18）。

（＊終了確認はいずれも委託者・岩手県教育委員会・埋文センターの3者による）

2 野外調査の方法

(1) グリッドの設定

平面直角座標第X系のX = 31,900,000、Y = 48,360,000を原点として 100 × 100 m の大グリッドを設定し、これを 25等分し、4 × 4 m の小グリッドとしている。大グリッドの呼称は原点を起点に南方向へ I～Ⅲ、東方向へ A～C、小グリッドの呼称は南方向へ 1～25、東方向へ a～y としている。小グリッドの呼称は I A 1 a となる。

(2) 基準点の設定

造構の実測に利用するため調査区内に基準点および補助点を有限会社下斗米測量設計に委託して打設した。各基準点および補助点の成果値と杭高は以下のとおりである。これらはいずれも世界測地系によるものである。

基準点1 X = 31,768,000、Y = 48,524,000、H = 211.593 m

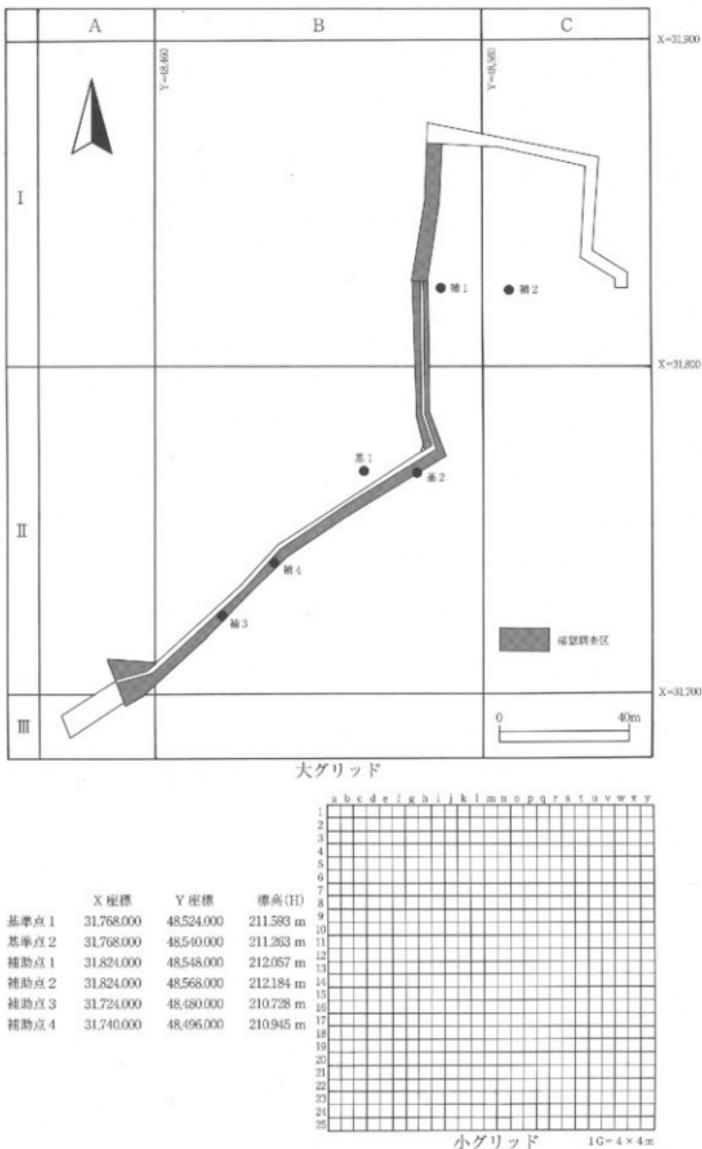
基準点2 X = 31,768,000、Y = 48,540,000、H = 211.263 m

補助点1 X = 31,824,000、Y = 48,548,000、H = 212.057 m

補助点2 X = 31,824,000、Y = 48,568,000、H = 212.184 m

補助点3 X = 31,724,000、Y = 48,480,000、H = 210.728 m

補助点4 X = 31,740,000、Y = 48,496,000、H = 210.945 m



第6図 グリッド配置図

(3) 表土除去と遺構の検出

各遺跡の調査に先立って、岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課による事前の試掘調査が実施されている。この試掘により調査対象区内の水田・畑・未舗装道路などに過去の造成工事による盛土・耕作土が厚く堆積し、その下に縄文時代の遺構・遺物が包蔵されている層が確認されたため、盛土・耕作土の除去は重機で行い、その後人力による遺構検出を行った。また、古代の面（十和田a降下火山灰）が残存している箇所については一度この面で検出を行い、遺構・遺物の有無を確認した後、さらに重機で下層まで掘り下げ、縄文時代の遺構・遺物の有無を確認した。

(4) 遺構の精査と実測

調査で検出された遺構は、以下の手順で調査を進めた。竪穴住居跡は4分法で土坑は2分法で行い、埋土の堆積状況の確認を行なながら掘り下げた。

(5) 遺物の取り上げ方

遺物の取り上げは遺構内と遺構外に大別し、遺構内出土遺物については遺構名と相対的層位（検出面・上位・中位・下位・底面）を記し、遺構外出土遺物についてはグリッドおよび出土層位を記して取り上げたが、この際、グリッドをまたいで取り上げたものについてはグリッド名を複数記した。また、取り上げに際しては事前に必要に応じて出土地点の座標値の測量および写真撮影を行っている。

(6) 写 真 撮 影

調査記録用に35mmモノクロームとデジタルカメラを使用した。撮影にあたって、整理時の混乱を防ぐため撮影内容を記入した撮影カードを対象遺構撮影前に撮影している。その他、調査期間中にセスナ機による航空写真撮影を実施した。

3 室内整理の手順と方法

(1) 作 業 経 過

各遺跡の室内整理期間は前述の例言のとおりで、整理作業は出土遺物の洗浄と遺物の仕分けは野外調査と平行して現地および室内で行った。また、土器の接合・復元・実測図作成・拓影作成などの作業は室内で行った。整理担当者はこれらの作業の確認・点検と平行して図面合成・原稿執筆・各種観察表の作成等の作業を実施した。

(2) 遺 物

現場で洗浄した遺物の注記作業から開始し、続いて接合・復元を行った。その過程で本書に掲載するものを抽出し、それらの実測図を作成、トレースした。抽出にあたっては遺構内のものについては小破片でもなるべく掲載するようにした。遺構外のものについては出土地点・層位などを考慮して選別した。実測と平行して、これらを撮影し、合わせて登録作業を行った。

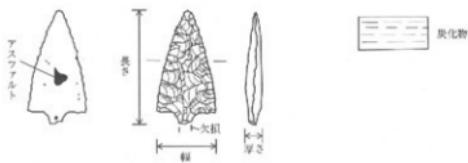
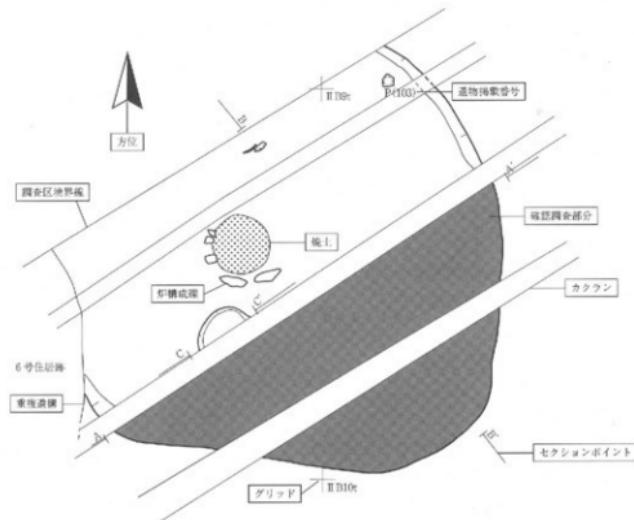
(3) 遺 構

実測図を点検・合成しながら遺構の検討を行った。その後、第2原図を作成し、そのトレースを行った。また、野外調査で撮影した遺構の写真も整理し、台帳登録をしている。その後、掲載するものを抽出し、写真図版とした。

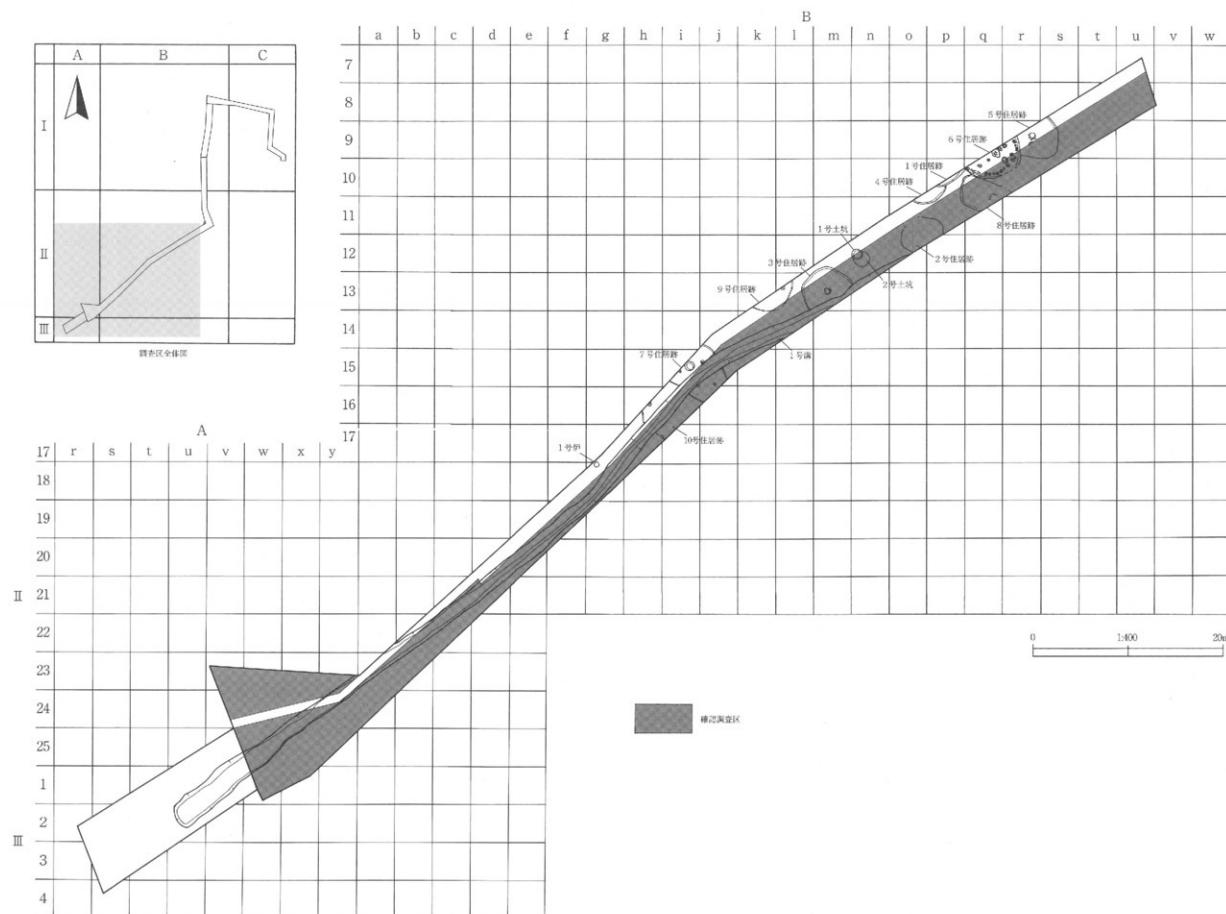
(4) 掲 載 図

掲載している遺構の縮尺は平面図・断面図とともに竪穴住居跡が1/50、住居内炉が1/25、土坑・焼土が平面図・断面図ともに1/40、溝跡が平面図1/400、断面図1/40とした。また、土器は深鉢形土器の一部が1/4、他が1/3、剥片石器が1/2、礫石器が1/3～1/4を基本とした。ただし、一部異なる

るものもあるため、各図にスケールおよび縮尺を付した。また、図中において土坑類は「p p」、土器は「p」、石器・礫は「s」と表記し、図中の掲載遺物については遺物番号を付けた。スクリーントーンの使用は凡例図（第7図）のとおりであるが、これ以外の使用については使用箇所に用例を表記した。また、遺構が本調査区と確認調査区を跨ぐものは一部、確認調査部分をスクリーントーンで示した。なお写真図版については掲載図に準ずる縮尺を基本とした。各遺構の計測値表記については、確認できた範囲内での長軸方向×短軸方向の計測値である。



第7図 凡例図



第8図 遺構配置図

IV 検出遺構と出土遺物

1 遺構

今回の調査で検出した遺構は、竪穴住居跡 10 棟、炉 1 基、土坑 2 基、溝跡 1 条である。時期は、溝跡が古代で他は遺構検出面や出土した遺物から縄文時代後期後葉～末葉である。

1号住居跡

遺構（第9図、写真図版4）

【位置・検出状況】 II B 10 p グリッドの本調査区内に位置し、IV層面で検出した。地表から遺構検出面までの深さは約 30 ~ 40 cm である。検出した遺構の大半が調査区外である。

【重複関係】 4・6号住居跡と重複し、これらを切る。

【形状・規模】 遺構の一部の調査のため、形状や全体の規模は不明であるが、調査区内で確認できた遺構の規模は南西 - 北東間 372 cm、北西 - 南東間 52 cm である。

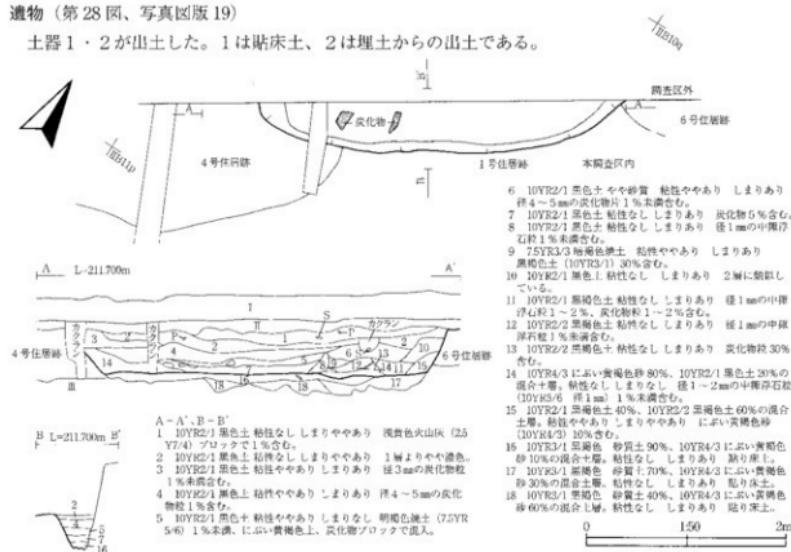
【壁・床面】 壁面はやや内湾気味に立ち上がる。床面は一部を除きほぼ平坦で埴輪まで掘り下げた後に貼り床が 10 ~ 24 cm の厚さで施されている。検出面から床面までの深さは 46 ~ 50 cm である。

【埋土】 18 層に細分した。検出面の 1 層上位には十和田 a 降下火山灰がブロックで混入している。9 層は暗褐色焼土含む層。また埋土中～下位には炭化物が多量混入し、特に床面に近い 5・7・12・13 層から多く出土する。14 層は埴輪層を主体とする層。16 ~ 18 層は貼床土。

【炉】 調査した範囲では見つかっていないが、9 層に暗褐色焼土層が確認されたので、隣接する調査区外の遺構内に炉が存在する可能性が高い。

遺物（第28図、写真図版19）

土器 1・2 が出土した。1 は貼床土、2 は埋土からの出土である。



第9図 1号住居跡

2号住居跡

遺構（第10図、写真図版4・5）

【位置・検出状況】 II B 11 o・11 p・12 o・12 pグリッドの確認調査区内に位置し、IV層面で検出した。地表面から遺構検出面までの深さは約30cmである。検出した遺構の一部は調査区外にある。また、遺構壁面の一部が擾乱の影響を受けている。調査方法は遺構が確認調査区であるため、埋土・遺構範囲を確認するために行ったトレンチ調査のみである。

【重複関係】 重複する遺構はない。

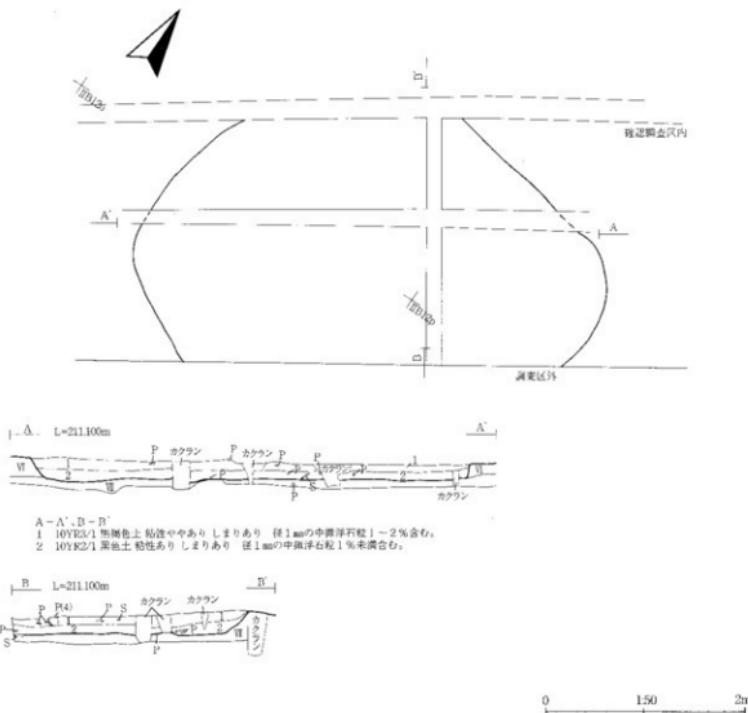
【形状・規模】 遺構の一部の検出であるが、形状は橢円形と推定される。規模は長軸が420cmである。

【埋土】 2層確認した。検出面にあたる埋土1層は基本土層のIV層と類似した色調で遺物を多く含む。下位は黒色土であり、いずれにも中揮浮石粒が微量混入する。床面はV層であるが、トレンチ調査のため床面の硬化状況は把握できなかった。

【炉】 検出のみの調査で炉の有無は確認していない。

遺物（第28・43・44図、写真図版19・30・31）

検出面および確認トレンチ内から土器3~7、石錐1点(186)、土偶1点(150)が出土している。



第10図 2号住居跡

3号住居跡

遺構（第 11・12 図、写真図版 6）

【調査方法・経過】 調査は当初、本調査区箇所のみ行ったが、検出による遺構の範囲確認が困難であったことから、確認調査区部分も追加して調査を行うこととなった。

【位置・検出状況】 II B 12 1・13 1・13 m グリッドに跨って位置し、IV 層面で検出された。遺構は本調査区・確認調査区に跨る。また、北側横面と炉の一部が搅乱を受けている。

【重複関係】 1 号溝と重複し、遺構南側がこれに切られる。

【形状・規模】 遺構の一部の検出であるが、形状は円形基調を呈すると推定される。規模は 528 × 324 cm である。

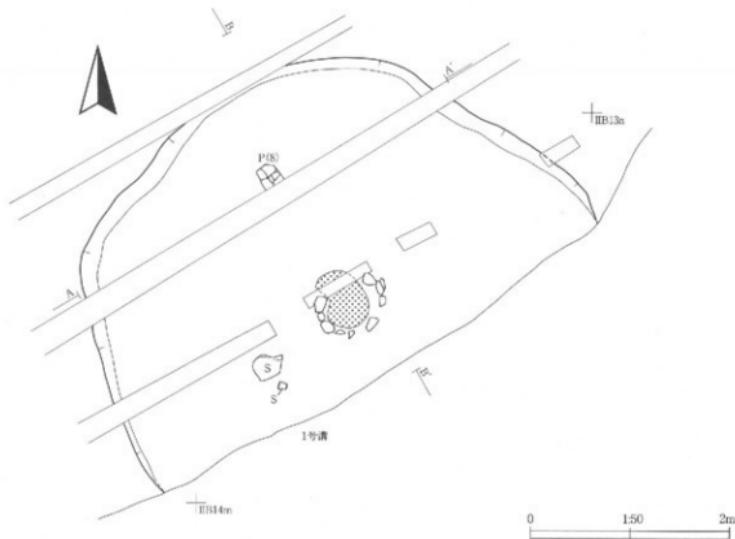
【埋土】 6 層確認した。検出面にあたる 1 層はプランの中央部分に括がり、基本土層の IV 層と区別の付く黒色土であるが、2 層は IV 層と類似する。埋土中一下位の 3～6 層は黒褐色土を主体とする色調で、4 層には中揮浮石粒が微量混入する。

【壁・床面】 壁面はやや外傾～内湾気味に立ち上がる。床面は一部を除きほぼ平坦で VI 層を床面としている。

【炉】 炉は 10 cm 前後の自然礫を並べた石開炉で北側の石を欠く。焼土範囲は約 63 × 46 cm。焼土層は約 5 cm である。

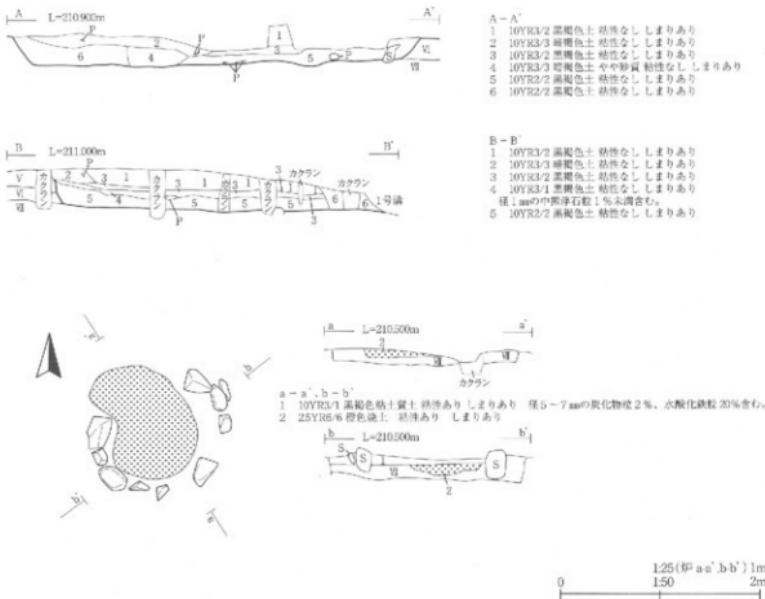
遺物（第 28・29・42・43・47 図、写真図版 19・20・30・31・33）

土器は 8～17 が出土した。8～11 は床面、他は埋土からの出土である。石器は石鎌 1 点 (168)、石皿 3 点 (218～220) で 168 と 220 は床面、218・219 は炉の構成礫である。他に土製耳飾りが 1 点 (152) 出土している。



第 11 図 3号住居跡 (1)

1 遺構



4号住居跡

遺構 (第13図、写真図版7)

[位置・検出状況] II B 10 o · 10 p · 11 o · 11 p グリッドに跨る本調査区の第IV層で検出された。

遺構の北側は調査区外へ延びる。検出した遺構の1/3~1/4は畑耕作時の搅乱の影響を受けている。

[重複関係] 遺構の北東側にある1号住居跡と重複し、これに切られる。

[形状・規模] 遺構の一部のみの調査であるが、形状は円形および楕円形と推定される。調査した範囲内での遺構規模は北西-南東間 130cm、北東-南西間 384cmである。

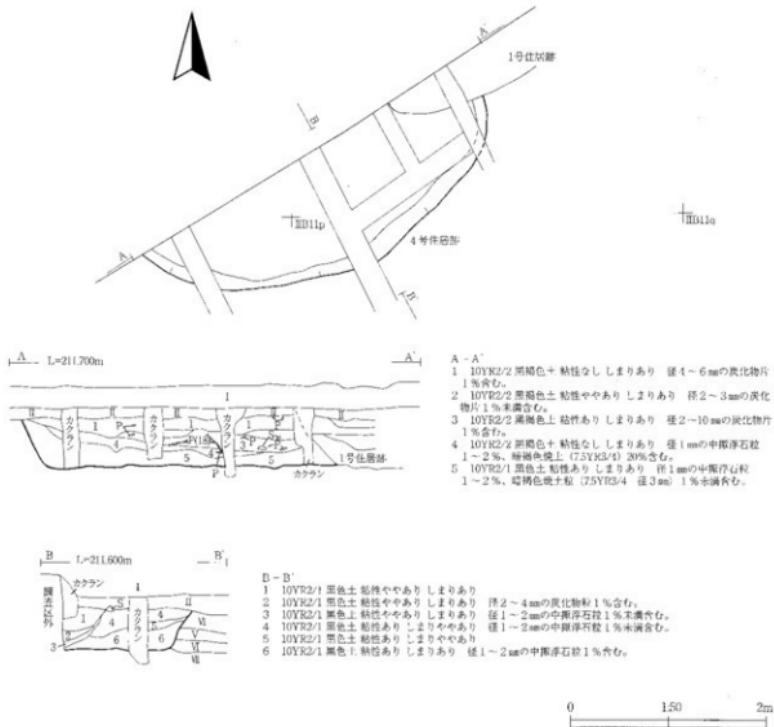
[埋土] 6層確認した。埋土は黒~黒褐色土を主体とした堆積であるが、3・4層に上器片が多く混入する。また4層には暗褐色焼土が多く混入し、炭化物粒も多く含まれる。埋土5・6層には中漂浮石粒が微量含まれるが、遺物は少ない。

[床面] 離層を床面とし、硬化面はない。床面に小さな凹凸はあるが、ほぼ平坦である。

[炉] 調査した範囲内に炉はない。

遺物 (第29・30図、写真図版20)

土器は18~24が出土した。18は埋土3層、他は埋土上位~中位で、床面からの出土はない。



第13図 4号住居跡

5号住居跡

遺構（第14・15図、写真図版8・9）

[調査方法・経過] 本調査区・確認調査区に跨った遺構であるため、本調査区箇所は床面下まで調査を行ったが、南東側の確認調査区箇所については埋土の状況と遺構範囲を確認するために最小幅のトレンチを掘り断面を確認したのみである。

[位置・検出状況] II B 9 r・9 s グリッドに跨り、IV層～V層面で検出された。本調査区と確認調査区に跨る。遺構壁面を含む一部が畑耕作時の搅乱の影響を受けている。

[重複関係] 遺構の南西端が6号住居跡と重複し、これに切られる。

[形状・規模] 遺構の一端の検出であるため形状は不明であるが、円形または橋円形の形状と考えられる。調査した範囲での計測規模は462×382cmである。

[埋土] 2層確認した。埋土は黒色土が主体で中～下位には明黄褐色土が混入している。また、炉周

辺の埋土には炭化材・炭化種実が含まれている。

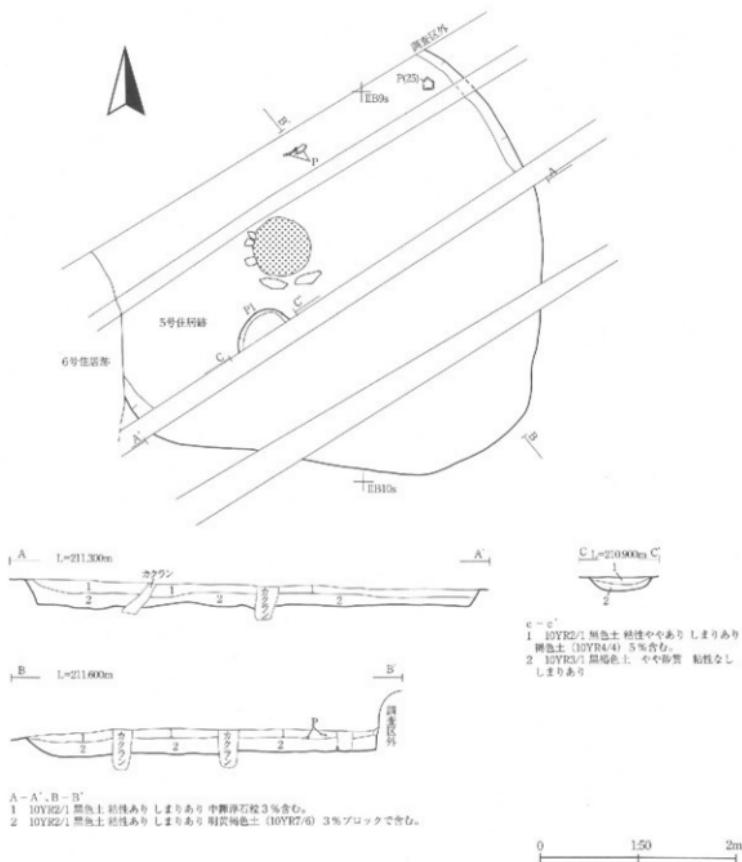
[床面] VII層を床面とし、暗褐色土が少量混入している。床面はほぼ平坦で硬化面はない。

[炉] 遺構中央へやや西側で検出した。炉は長さ約30cmの細長い礫2個と10cm前後の礫3個で構成される。焼土は約60×60cmの範囲で炉の内面に広がる。焼土の厚さは約8cmである。

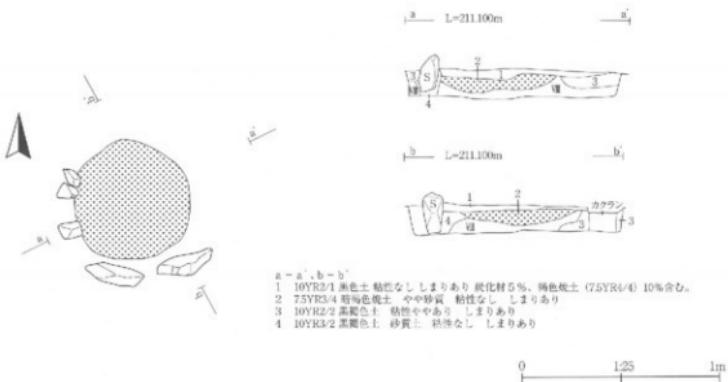
[土坑] 床面より1基検出した。遺構の一部は擾乱の影響でなくなっているため、規模は不明である。深さは14cmで、埋土から深鉢の口縁部破片(27)が出土している。

遺物(第30・31・44図、写真図版20・21・32)

出土した土器は25~36で、25・26は床面、27は土坑(PPI)の埋土、他は住居埋土からの出土である。石器は床面より石匙(201)が1点出土した。他に炉付近から炭化したクリ2点、オニグルミ1点が出土した。



第14図 5号住居跡(1)



第15図 5号住居跡（2）

6号住居跡

遺構（第16・17図、写真図版10・11）

【調査方法・経過】本調査区・確認調査区に跨った遺構であり、当初は本調査区側のみを掘り下げたが、掘り下げ後まもなく、埋土中から大きさ約20～50cmの礫が多数出土したため、配石遺構や住居に付属する何らかの施設に関連するものである可能性が高いと考えられた。これらを含めた遺構全体の性格をより詳細に把握するには確認調査区側の範囲も併せて調査をする必要があるとの認識から県教委の確認を経て遺構の全てを精査することとなった。

【位置・検出状況】II B 9 r・10 rグリッドに跨り、IV層面で検出された。本調査区と確認調査区に跨り、遺構の北側は調査区外へ延びる。検出した遺構の南壁を含む遺構の一部が畑耕作時の搅乱の影響を受けている。

【重複関係】1・5号住居跡と重複する。1号住居跡より古く、5号住居跡より新しい。

【形状・規模】遺構の一部の調査であるが、調査した範囲から形状は円形を呈すると推測される。規模は南西～北東間625cm、南東壁から北西の調査区内まで254cmを測る。

【埋土】自然堆積を呈し、埋土は11層に細分される。埋土上位は黒色土で十和田b火山灰が混入する。埋土中～下位は西側が黒色土、東側が黒褐色土を主体とする層が堆積している。

【床面】基本層序のⅢ層を床面とする。床面には凹凸があり、凹みからは上器片が出土している。

【用途不明遺構】北壁よりの床面で検出した（PP1）。長さ約10cm前後の礫を円形に配置した遺構で石を含む外径は約40×38cmである。石組み部分の内径は約15cmほどで、全体の形状は石圓炉に類似するが、これらを含む約88×82cmの範囲が土坑状を呈する窪みになっている。土坑断面（a-a'）は住居床面から石組み方向に向かって緩やかに下がり、石組みの直下でさらに一段下がる。炭化物や焼土粒などは混入していない。（柱穴の断面に類似。）

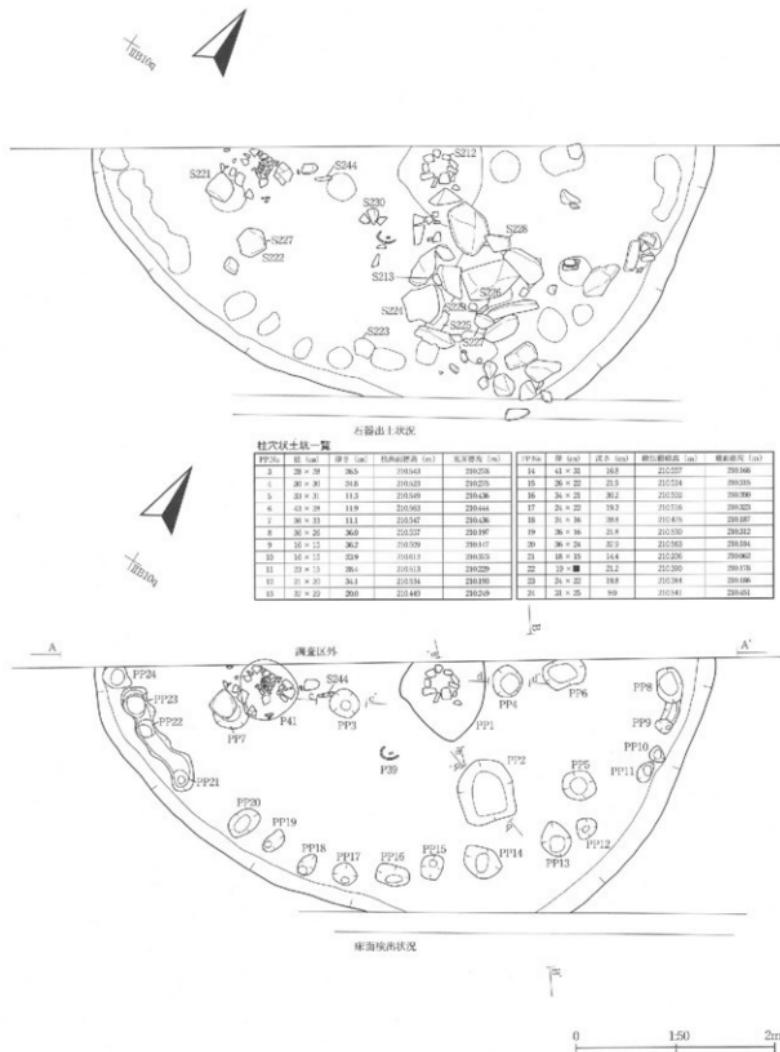
【土坑】1基検出した（PP2）。規模は64×56cmで深さは38cm、底面は凸凹である。

【柱穴】22個検出し、うち17個は壁面沿いにある。規模等については計測表に記した。

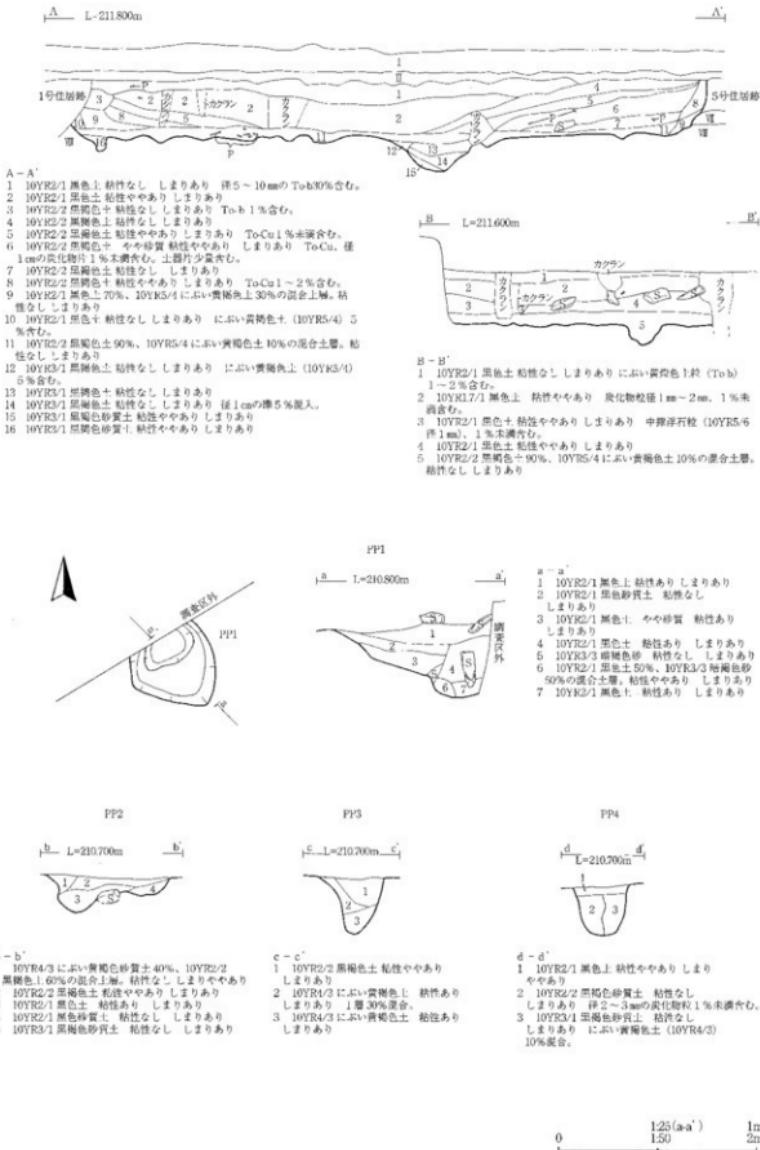
遺物（第31・32・42・43・45・46～49・51図、写真図版21・22・30～35・37）

出土遺物は土器37～44、土製品は6点（153～158）でいずれも耳飾りの一部破片、石器は石錐（169

~171)、石皿類(221~231)、石錐(181·187·188)、磨石類(207·212·213)、石製品は石棒1点(244)である。このうち37~41·153~155·169が床面、212はP1上面の構成礫である。また、石皿221~231はすべて埋土からの出土であり、住居廃絶後に廃棄されたものと考えられる。



第16図 6号住居跡(1)



第17図 6号住居跡（2）

7号住居跡

遺構（第18・19図、写真図版12）

【調査経過】 本調査区・確認調査区に跨った遺構である。本調査区内の精査では遺構の一部を除き、検出面が不明のことと、埋土と床面の区別がつかなかったことから南東側の確認調査区部分も追加して調査を行った。

【位置・検出状況】 II B 14 i - 15 i - 15 j - 16 i - 16 j グリッドに跨り、IV層面で検出された。本調査区と確認調査区に跨り、遺構の南北端はそれぞれ調査区外へと延びる。検出した遺構の埋土と床面の一部が畑耕作時の搅乱の影響を受けている。

【重複関係】 10号住居跡と重複し、これを切る。また、遺構の中央部分が1号溝に切られる。

【形状・規模】 調査した部分から形状は楕円形を呈すると推測される。規模は南西-北東間 534 cm、南東壁から北西の調査区境までは 438 cm である。

【埋土】 床面までの堆積は自然堆積を呈し、3層に細分される。埋土上位は暗褐色土、中～下位は黒褐色土を主体とし、炭化物粒・中振浮石粒が 2～3% 混入している。

【床面】 床面はVI層が湿地状の地形により酸化し、硬化・変色したもので、炭化物粒・中振浮石粒を含む黒褐色土ではほぼ平坦である。

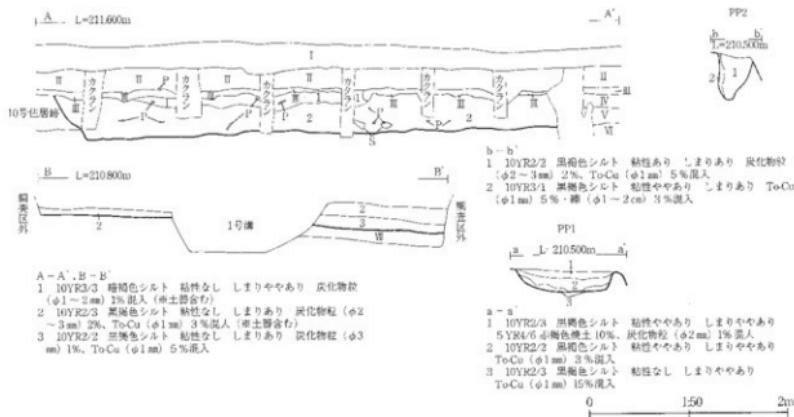
【土坑】 床面で1基検出した。形状は円形で、規模は径 102 cm、深さ 20 cm である。1号溝に近い部分の埋土には赤褐色焼土・炭化物粒が混入する。

【柱穴】 床面で3個（P P 2～P P 4）検出した。規模等については計測表に記した。

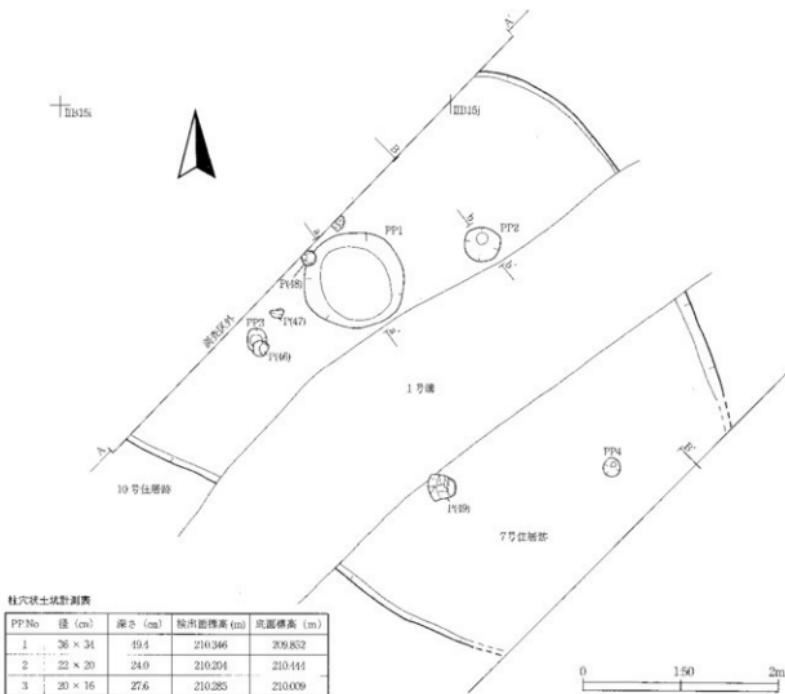
【時期】 出土した土器の特徴から縄文時代後期後葉に属する。

遺物（第32・33図、写真図版22・23）

土器 45～57 が出土した。45～50 は床面、他は埋土から出土した。



第18図 7号住居跡（1）



第19図 7号住居跡（2）

8号住居跡

遺構（第20・21図、写真図版13・14）

【調査経過】 本遺構の調査は当初、本調査区箇所を全掘調査し、確認調査区箇所については範囲確認のみで埋め戻し作業を重機で行う際に破損する可能性のある表面に露出している遺物については取り上げを行うこととした。しかし取り上げに際しては大形の破片が多いことや接合可能な破片が多く、深く掘り下げるにそれらを取り上げることが困難であったため、県教委の確認を経て、遺物の取り上げを目的に床面まで掘り下げることとなった。よってその課程で検出した炉は検出段階まで、精查は行っていない。

【位置・検出状況】 II B 10 p・10 q・10 r・11 p・11 q・11 r グリッドに跨り、IV層面で検出された。本調査区と確認調査区に跨り、遺構の南側は調査区外へ延びる。検出した遺構の一部が畑耕作時の擾乱の影響を受けている。

【重複関係】 6号住居跡と接するため、重複している可能性が考えられるが明確な重複関係は不明である。また、8号住居跡の一部を含む東側（6号住居の南側）に別の遺構（住居跡？）があった可能性もあるが、確認調査区にあるため掘り下げることができなかつたため詳細は不明である。

[形状・規模] 確認した部分は細長く、不整な形状を呈する。規模は北西－南東間 360 cm、北東－南西間 344 cm である。

[埋土] 自然堆積を呈し、2層に細分される。全体に黒褐色土を主体とする堆積であるが、2層より濃色である。中揮浮石粒が微量混入する。

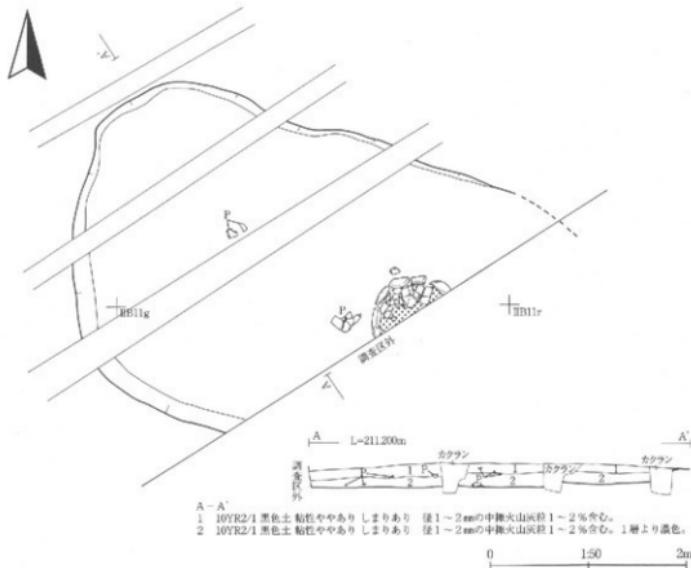
[床面] VI層が床面であるが、硬化面や貼り床は調査した範囲では確認されていない。

[炉] 調査区南東端で検出した。確認調査区のため検出のみである。大きさ 12～20 cm の礫を円形に並べた石囲炉で、炉の半分は調査区外にある。

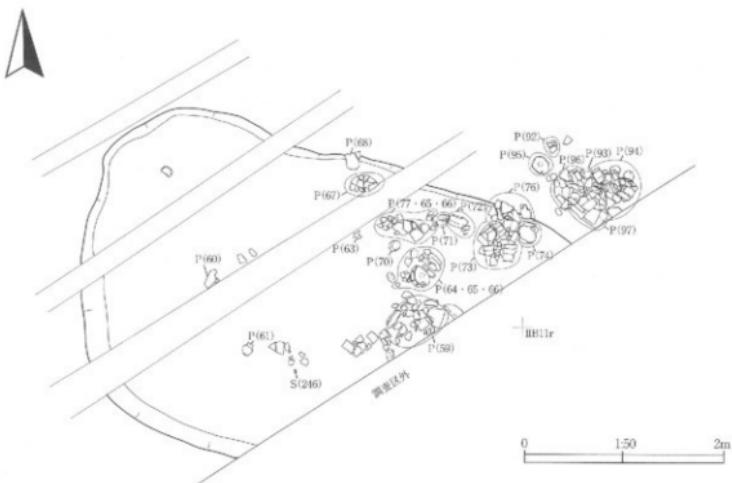
遺物（第33～37・43～45・50・51図、写真図版23～27・31・32・36・37）

炉を含む確認調査区側の住居埋土とその隣接地から住居に廃棄したと思われる土器が出土した。前述の調査過程により、炉が調査の最終段階で見つかったことや床面であるVI層と住居の埋土2層との区別が付かないこともあり、炉の周辺以外は正確な床面が分からなかつたことから、本遺構に伴うもの（床面に残っていたもの）か、住居使用後に廃棄されたものかの区別がつかないものがほとんどであったため、グリッド出土の遺物も含めて一括した。

土器は58が床面、59が炉の覆土、60～91が埋土、92～97が遺構周辺からの出土である。石器は石鎌（172・173）、石匙（198・199・202）、磨石類（208）、石皿（232・233）が埋土からそれぞれ出土している。石製品は埋土下位より1点出土した（246）。



第20図 8号住居跡 (1)



第21図 8号住居跡（2）

9号住居跡

遺構（第22図、写真図版15・16）

【調査方法・経過】 調査可能な範囲はすべて本調査区内での検出であったが、本来の遺構検出面では埋土と自然堆積層との区別がつかなかったことから、壇面を含む埋土の大半を掘り下げ、除去した後の精査となってしまった。

【位置・検出状況】 本調査区のII B 13 k・13 l グリッドに跨り、IV層面で検出された。遺構の一部は調査区外にある。また、遺構の両側壁面を含む一部が畑耕作時の擾乱の影響を受けている。

【重複関係】 重複している遺構はない。

【形状・規模】 遺構の一部のみの検出であるが形状は円形・楕円形と推測される。調査で確認できた遺構規模は南西-北東 504 cm、北西-南東 270 cmである。

【埋土】 埋土は7層で、上位が黒色土、中～下位は黒・黒褐色を基調とした層の堆積である。

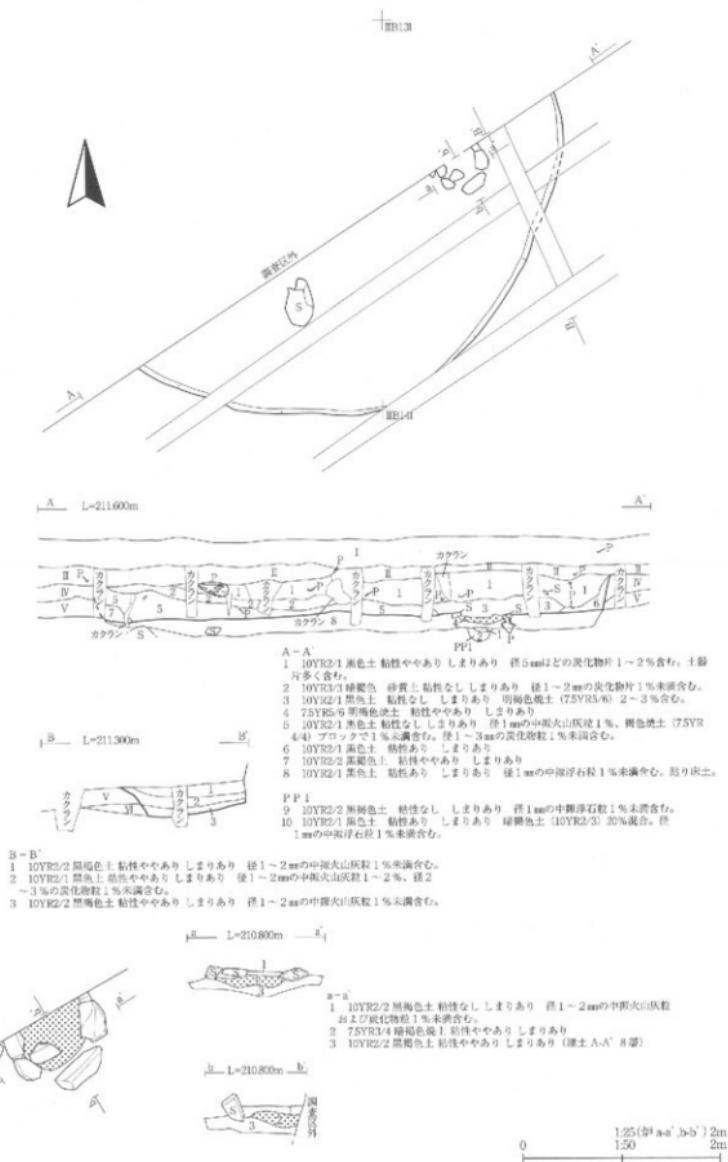
【床面】 床面は基本土層VI層まで掘り下げ、その後に黒褐色土（埋土8層）が貼られている。床面は固く縮まっている。

【炉】 北東壁際の本調査区で検出した。長さ約15～28 cmの礫5個で構成される。焼土の色調は暗褐色で約26×46 cmの範囲まで確認できるが調査区外へと広がる。焼土の厚さは最大で6 cmである。

【柱穴】 8層下の炉の直下に位置する調査区境で1基検出した。

遺物（第38図、写真図版27）

土器98～104が出土した。98は床面、99・100は貼床土からの出土で、炉の構成礫より下から出土した。他は埋土からの出土である。石器は磨石類（209）が炉の構成礫、磨製石斧（206）が埋土から出土した。



第22図 9号住居跡

10号住居跡

遺構（第23・24図、写真図版16）

【調査方法・経過】 遺構にあたる箇所を掘り下げている段階で何らかのプランが存在することは予想されたが、北東に隣接する7号住居跡を含めたプラン全体が不明瞭であり、これと併せて調査区境の壁面も上層観察したが、畑耕作時の細長い搅乱が密にあったため遺構の立ち上がりがつかめなかつた。よって本造構よりも一部でもプランが判別できる7号住居跡の調査を優先して行い、その経過を観て調査に着手することとした。調査途中で7号住居の方が新しい時期に属するもので、10号住居跡の壁面を切っている状況であることが確認されたため、7号住居の調査終了後に本遺構の精査に着手した。

【位置・検出状況】 本調査区のII B 15 i・16 h・16 i・17 h・17 iグリッドに跨り、IV層面で検出された。遺構の一部は調査区外にある。

【重複関係】 1号溝・7号住居と重複し、これらに切られる。

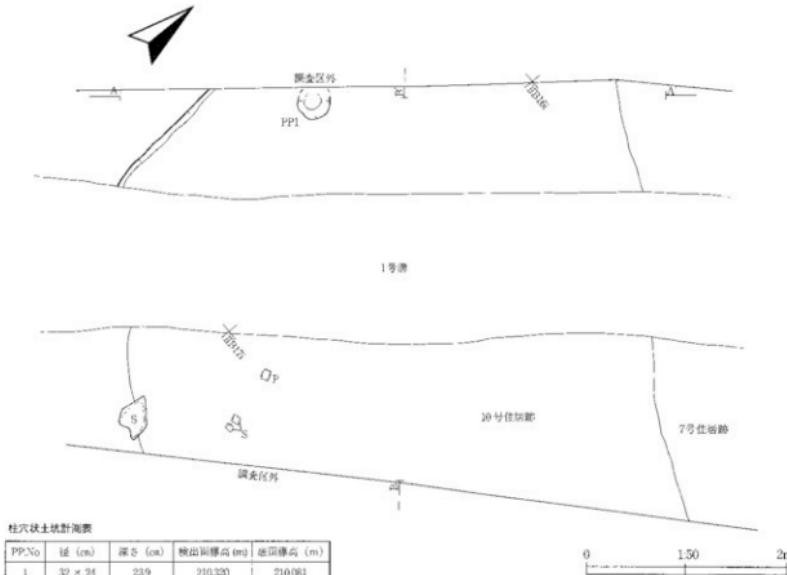
【形状・規模】 遺構の一部の調査であるため形状・規模の詳細は不明であるが、遺構の南北端は調査区外へと延びることから、規模は大きい。

【埋土】 3層確認した。全体に黒褐色土を主体とした色調で上位は十和田b降下火山灰を含む層で、基本土層Ⅲ層に類似する。中～下位は炭化物粒・中揮浮石粒を含むが下層ほど含有量が多い。

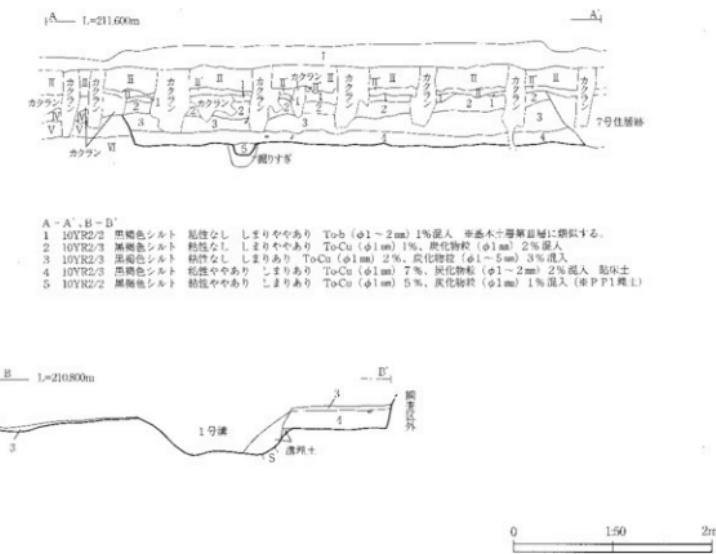
【壁】 検出面から床面までの深さは30～40cmで、壁面は外傾して立ち上がる。

【床面】 床面は基本土層Ⅵ層まで掘り下げ、その後に黒褐色土（埋土4層）が貼られている。床面はほぼ平坦であるが、小さな凹凸がある。

【柱穴】 北西壁際の埋土4層下から1基検出した。形状は円形で北西側は調査区外へと延びる。



第23図 10号住居跡(1)



第24図 10号住居跡（2）

【炉】 調査した範囲で炉は見つかっていない。

遺物（第38図、写真図版27）

土器105～107で、105は床面、106・107は埋土から出土した。他に118・122・135も遺構外で取り上げ掲載したが、本遺構に伴う可能性がある。

1号炉

遺構（第25図、写真図版17）

【調査方法・経過】 検出・精査段階で住居跡に伴う炉かどうかの判別はつかなかったが、精査後に北側に隣接する壁面の土層観察を行ったところ、竪穴状の遺構が確認された。検査面の層位やレベルから本遺構に関連するものである可能性が高いことから壁面断面図を付した。

【位置・検出状況】 本調査区のII B 17 g グリッドに位置し、IV層面で検出された。

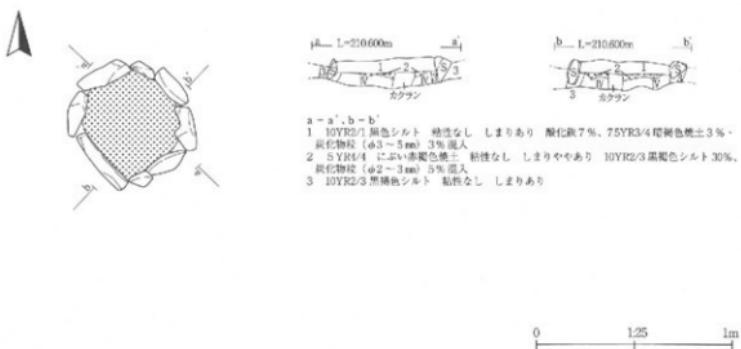
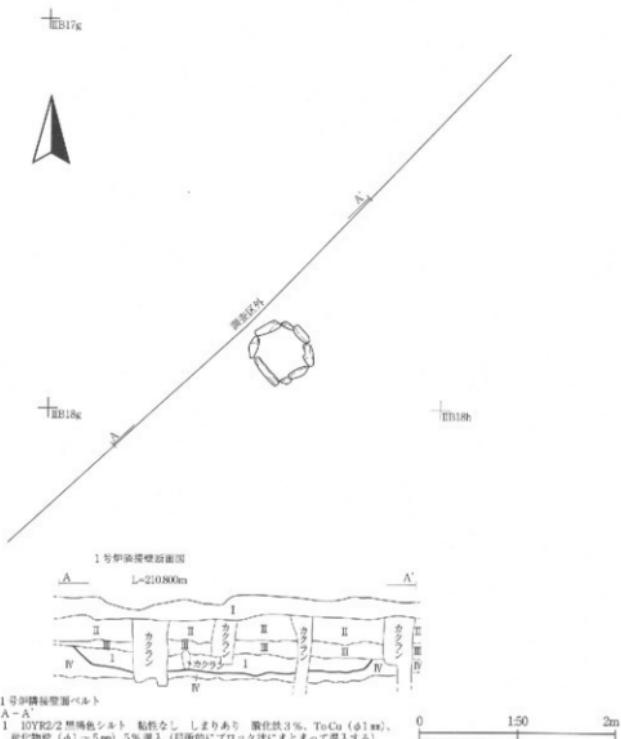
【重複関係】 重複する遺構はない。

【形状・規模・構造】 長さ10～30cmの細長い甌を使用し、円形に配置している。炉の規模は約65×60cmである。

【焼土】 炉の内面全体ににぶい赤褐色焼土が確認された。焼土層は最大で約3cm堆積している。

遺物（第50図、写真図版36）

炉の構成甌に石皿（234・235）が使用されている。



第25図 1号跡

1号土坑

遺構（第26図、写真図版18）

[位置・検出状況] 本調査区のII B 12 o グリッドに位置し、IV層面で検出された。

[重複関係] 2号土坑と重複し、これを切る。

[形状・規模] 形状は円形を呈し、規模は開口部径 106 cm、底径 88 cm、深さ 60 cmである。

遺物（第38・50図、写真図版27・36）

土器 108、石器 236・237 が埋土から出土した。

2号土坑

遺構（第26図、写真図版18）

[位置・検出状況] II B 12 o グリッドの本調査区・確認調査区に跨って位置する。IV層面で検出された。

[重複関係] 1号土坑と重複し、これに切られる。

[形状・規模] 検出段階での形状は円形を呈し、規模は開口部径 174 × 160 cm、深さ 24 cmを測る。

1号溝

遺構（第27図、写真図版18）

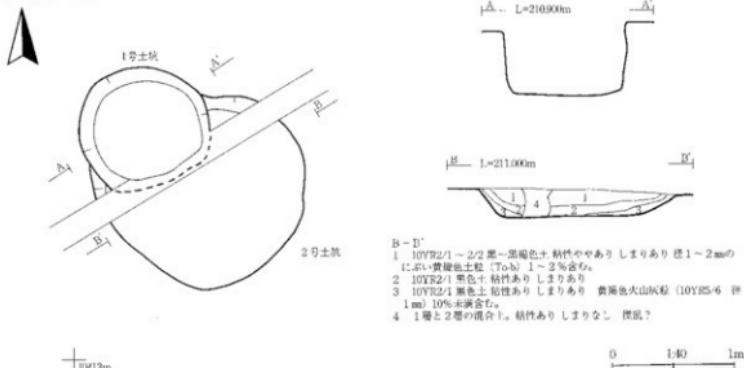
[位置・検出状況] 調査区南西部のII A・II B・III A グリッドに跨り、II層除去後にIII層以下の面で検出された。また、遺構の北東端部は調査区外へと延びている。

[重複関係] 3・7・10号住居跡と重複し、これらを切る。

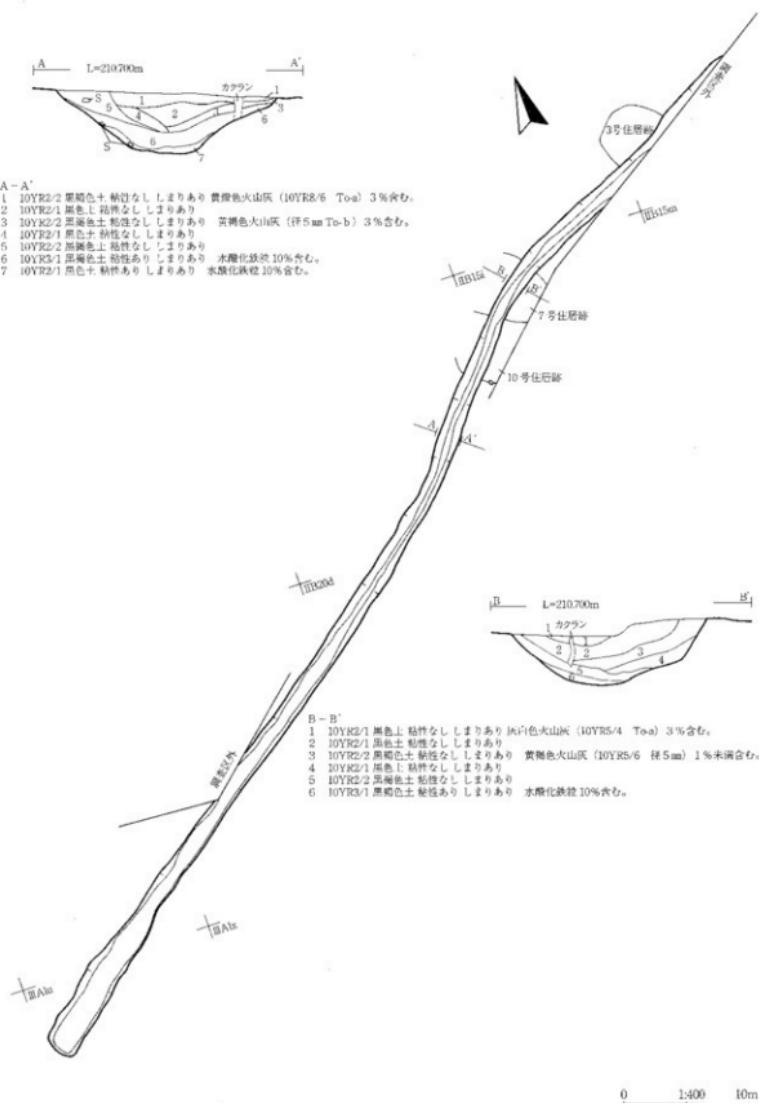
[埋土] 埋土最上位に古代の火山灰（十和田a降下火山灰）が堆積する。壁面は外傾して立ち上がるが、南側の壁面の一部は底面近く以外ではなくなっている状況であった。

[規模] 検出した規模は長さ 80 mで、北東から南西へと傾斜する。北東端から南西方向 26 m地点までは緩やかに蛇行し、そこから 54 mは真っ直ぐ南西方向に向かっている。南西端部は次第に広がって立ち上がりが浅くなる。

遺物 埋土からは周辺からの流入と思われる縄文時代の遺物が出土したが、遺構外出土遺物として扱った。古代の遺物はみつかっていない。



第26図 1・2号土坑



第27図 1号溝

2 遺 物

(1) 土 器

本遺跡から出土した土器は大コンテナで約 11 箱分である。時期は縄文時代後期、特に後半のもののが中心で晚期は中葉の土器が調査区南西端部の湿地状地形になっている箇所から少量出土している。出土した土器の大半は住居を中心とする遺構の埋土とその周辺からで、遺構外のグリッドで取り上げた土器については遺構の認識が遅れたために本来、遺構検出面～遺構埋土位に含まれていた可能性があるものもある。出土した土器は時期により、第 I 群～第 IV 群に分類した。

第 I 群土器・・・縄文時代後期前半の土器。

第 II 群土器・・・縄文時代後期後半の土器。

第 III 群土器・・・縄文時代晚期中葉の土器。

第 IV 群土器・・・古代の土器。

第 I 群土器（109～117）

縄文時代後期前半期に位置づけられる土器群で調査区南西部の湿地状地形にある II B 19 e・20 d・21 c・22 c グリッドの V 層を中心に出土した。器種は深鉢、鉢、壺などで 109～111 は口縁部・胴部上位に沈線による文様が展開する。112・113 は体部上位に膨らみをもつ粗製の深鉢の破片で口縁・胴部間に原体圧痕が施されている。114 は平行沈線を横位・斜方向に展開し、それぞれが接する箇所に刺突文が施されている。

第 II 群土器

今回の調査で最も多く出土した縄文時代後期後葉～末葉の土器群である。該当する土器形式としては十腰内 IV・V 式、瘤付土器第 I～IV 段階である。大半は住居を中心とする遺構内からの出土で、器種は深鉢・鉢・台付鉢・台付浅鉢・壺・皿・注口土器・香炉形土器などである。破片が多いことから個体全体の器形や文様構成が確認できないものが大半であるが、さらに時期を細分することが可能であると思われる。

深鉢（2・5・6・9・10・13・15・20・21・23・27・28・30・31・37・40・42・46・49・50・52・54・55・59・64・65・70・80・82・83・85・93・94・96～99・103・105～107・118～126・128～131・136・138 ほか）

深鉢は大きく分けて、装飾が施される精製土器と縄文のみが施文される粗製土器とに分けられる。精製深鉢は口縁部が波状のもの（28・31・83・103・118・119）もあるが、28 以外は突起のみで全体の器形までは分からぬ。いずれも沈線文・貼瘤が施され、103 は波状口縁で波状頂部下に縦位に切れ目が入り、その下に又状貼瘤が付し、口縁と平行した沈線文間には刺突文が施されている。平縁口縁のもので器形全体が分かるものは 30・46・49・59 で底～胴部が内湾し、頭部から上が外傾する形態である。文様構成は大きく分けて口縁端部や脛曲部に沈線区画された縄文帯・貼瘤帯を施されるものと縄文帯に代わって沈線区画内に連続した刺突文・刻目文が多用されるものとに分けられるが、前者で文様構成が確認できるのは 30・46・49・59・64 などで、30 は口縁部の上・中・下位に平行沈線により区画された縄文帯が施されている。46・64 は弧状沈線文などにより区画された縄文帯と貼瘤による文様構成であるが、縄文帯は磨消手法によって縄文を区画する沈線文がほとんど消え、縄文

帶が浮き上がっている。49・59は口縁部を区画された貼瘤縄文帯に格子目状に沈線文を施している。これ以外にも破片資料であるが5・99・107・123・124などがこれと同じ文様構成要素をもつ。比較的多く出土しているものとしては貼瘤と弧状沈線文により入組帶状文が展開するもの（20・27・37・50・52・55・80・82・106・120～122）がある。他には細い沈線による平行沈線文・弧状沈線文などが重なって施されているもの（42・54）、口縁部が平行沈線と連続弧線文で構成され、弧線による菱形文様の要所には貼瘤が施されているもの（85）なども少數であるが出土している。貼瘤・縄文帯に後続して沈線文間に連続する刺突文・刻目文が多用される土器群は10・15・21・23・98・103・125・128～131などで10は口縁部破片で口縁の文様は沈線間の連続刺突文と無文帯からなり、これを跨ぐように貼瘤が付く。23・40・128～130も口縁部破片で40・128・129の口縁部には文様のない突起があり、頭部および口縁上部に刺突が施された平行沈線文により胴部文様帯・口縁部文様帯とを区画し、口縁部に入組帶状文が施されている。23は頭部区画帯、130は入組帶状文にそれぞれ貼瘤が付いている。13は小形の深鉢で胴部に膨らみをもち、口縁部が外反する器形で、口縁部には大小の突起を有し、突起は刻みにより二分・三分されている。頭部には連続する沈線文と貼瘤、口縁部には弧状沈線文により右下がりの入組帶状文が展開している。粗製深鉢で口縁～底部まで残存するものは6・57・65・94・96・97・105・136・138で136のみ口縁部が小波状になり、これ以外はいずれも平縁である。全体の器形は底部から胴上部まで開き気味に立ち上がり、そこから内側に湾曲するもの（6・65・94・96）や底部に段があり、内面があがっているもの（6・65・97・136・138）などがある。器面にはいずれも縄文が全体に施され、羽状縄文か単節縄文が施されるもの。

注口土器（7？・11・26・35・36・43・47・48・69・79？・86・87・92・100・101・131・139～141）

鉢類について出土数が多い。全体の形状が分かるものは92と100で一部欠損するがおおよその形状が分かるものは69・141で、他はいずれも一部破片のみで全体の形状は不明である。69・92・141は口縁部・頭部・胴部の3段、100は口縁部・胴部の2段構成である。注口部分が確認できるものは11・43・87・92・100でいずれも注口先端部に括れをもち、やや外反した形態である。胴部に文様が施されているのは69・87・92・139で頭部・胴部には沈線により棒掛け状文・入組帶状文・弧状線文、鰐歯状文が展開している。69は沈線文間を微隆帯状にやや浮き上げさせ、そこに刺突文を巡らせている。139の胴部の屈曲部付近には尖銳貼瘤が付される。141は注口部分を欠くが口縁部～胴部で無文であるが、口縁部・頭部間・頭部・胴部間に小さな貼瘤が施されている。26・35は胴部破片でともに縦に貫通する橋状把手を付す。36は胴部破片で頭部との間には平行沈線文間に押圧状刻目文が施され、胴部は屈曲部付近を平行沈線文間に貼瘤を充填し、区画帯とし、区画内には弧状線文・貼瘤により文様が施され、要衝に縦に貫通する円形の貼瘤が貼付されている。

壺（14・32・39・61・62・72・73・102・142・143）

14・32・61は完形品で14・61は無文、32は頭部・胴部に平行沈線による貼瘤帯が施されている。39は口縁～胴部破片で胴部には弧状の沈線により文様が施され、頭部に沈線文と縦位の橋状把手が付く。73は器体外面全体、62・72は胴部文様が縄文のみで、73は口縁部・頭部・胴部の3段構成である。62は口縁部が欠損した胴部破片で肩部がくの字に内湾する形状を呈し、胴部は無文である。102は口縁部が無文で胴部のみ縄文が施されているが、頭部4箇所に縦位の橋状把手が付き、胎土にやや大きめの砂粒が含まれている。142は口縁～胴部上位の破片で頭部の上下段に押圧状の刻目文が巡り、縦位の橋状把手が付く。143は口縁部破片で口縁部上端に橋状の突起が付くが、全体の形状が

分からぬため、注口土器の可能性もある。

台付鉢（4・12・19・56・75・104）

台部を含む全体の形状が確認できたのは4・19・56で4は貼瘤帶繩文が口縁端部以下、胴部屈曲部などに施されている。19は台部が全体の約2/3を占め、頸部・口縁部・体部は沈線により区画され、体部は沈線や透かし技法により、三角形・菱形・円形の文様を展開し、要衝にやや先端の尖った貼瘤が付く。56は台より上は半球状の形状を呈し、無文で口縁端部に縱方向の貫通孔をもつ貼瘤が付く。12・75・104は台部は欠損しているが台付鉢である可能性が高い。75は頸部に沈線区画の貼瘤帶が巡り、胴部には沈線による連結帶状文が施文されている。104は胴部は無文で1条の沈線文と横位の連続する刺突文で胴部と口縁部とを区画している。

皿（45）

7号住居の床面から1点出土した。口縁部は浅い沈線文によって区画され、胴部に対してやや肥厚している。

香炉形土器（16・22・63・81・93・145）

63はいわゆる人面付の香炉形土器で、頂部の摘み部分が欠損するが、それ以外はほぼ残存している。方形の透かしのある2面と刺突文により人面が表現されている2面が交互にある4面構造で、人面は2~3段の刺突列で輪郭や鼻など（片面）を、円形の透かしで目・口をそれぞれ表現している。また片面の鼻は貼り付けられたもので、鼻孔も刺突によって表現されている。93は2段の連続刺突文、貼瘤、沈線文、円形透かし文による文様構成で、胴部上部が欠ける。22は摘み部分、81は摘み～胴部上半で胴部は円形の透かしを中心にして沈線文と磨り消し技法により繩文帶が区画されている。145は胴部破片である。16は孔のある部分の横は透かし状の形状を呈すると考えられ、香炉としたが、台付鉢かもしれない。

ミニチュア土器（44・89~91・146）

5点出土した。44・89・146は鉢、90は台付鉢、91は皿である。いずれも文様はなく、無文である。

器種不明の土器（78）

78は「く」の字に折れた形状で、注口土器の注口部分のように開口した形状を呈し、沈線文・貼瘤が施されているが器種は不明である。

第Ⅲ群土器・・・繩文時代晩期中葉の大洞C2式に比定される土器で2点出土した。147は鉢の口縁部破片で4条の平行沈線文が施されている。148は台付鉢で口縁部上端は欠損している。体部上半には沈線により文様帶が施されている。

第Ⅳ群土器（149）

1点出土した。土師器壺の口縁～胴部破片である。II B 2 u グリッドの擾乱土中からの出土である。

(2) 土 製 品

出土した土製品は土偶 2 点、耳飾り 11 点、垂れ飾り 1 点、円盤状土製品 1 点で、大半が住居の埋土かその周辺から見つかっている。土偶・耳飾りは破片である。また、耳飾りの一部と垂れ飾りには赤色顔料の付着が確認された。

土偶 (150・151)

2 点出土した。150 は 2 号住居の検出面、151 は 6 号住居検出時に出土した。いずれも肩～上腕部にかけてのもので文様は沈線文・刺突文で 151 には貼崩が施されている。時期は縄文時代後期後葉である。

耳飾り (152～162)

11 点出土した。出土地点は 152 は 3 号住居、153～158 は 6 号住居で 159～162 は遺構外からの出土である。形態は環状の形状を呈する滑車形で、すべて 1/3 以下の破片である。160 の内面側に赤色顔料の付着が認められた。

垂れ飾り (163)

1 点出土した。形状は逆三角形で上側の両端には紐を通すための孔があり、そこから V 字状に 2 条の沈線文を巡らせ、下端部の沈線が折り返す部分は瘤状に盛り上げている。

円盤状土製品 (164)

1 点出土した。深鉢形土器の胴部破片を使用したもので、円形に形狀を整えるために周囲を打ち欠いている。

(3) 石 器

石鎚 (165～180)

総数 16 点出土した。168～173 は遺構内でその他は遺構外からの出土である。石材には頁岩・珪質頁岩が使用されている。いずれも基部は有茎である。また、165・167・176 にはアスファルトと思われる付着物が確認された。

石鎌 (181～196)

16 点出土した。形態は摘み部分が肥厚するもの 181～185、摘み部分の厚さが使用先端部とはほとんど変わらないもの 186～196 に大きく分かれる。192 は摘み部分が肥厚するタイプの可能性もある。使用された石材は頁岩・珪質頁岩である。

石匙 (197～205)

9 点出土した。石材はすべて頁岩が使用されている。形態については摘み部の軸を垂直にしたときの形状で以下の 3 形態に大別される。

I 類 縦方向に刃部を有するもの。(197)

II 類 横方向に刃部を有するもの。(198～200)

Ⅲ類 斜方向に刃部を有するもの。(201～205)

磨製石斧 (206)

9号住居の埋土から1点出土した。石材は頁岩が使用され、基部が欠損している。

磨石類 (207～217)

いわゆる磨石・凹石・敲石とよばれている石器を含むものである。12点出土したが、磨石+円石(207～211)、磨石+敲石(217)などの併用がみられる。使用された石材は砂岩(75%)、花崗岩(17%)、安山岩(8%)で砂岩が多い。

石皿 (218～242)

植物性食料の粉碎・磨り潰しなどの用途に使用されたもので25点出土した。石材は多い順に砂岩(80%)、花崗閃緑岩(8%)、安山岩(4%)、頁岩(4%)、粘板岩(4%)である。大半は自然縦をそのまま利用しているものであるが、242のように外縁に成形を施しているものや222・223のように外縁の一部に調整が施されているものもある。241は六角形の形状をしているが、石材に粘板岩が使用されており、別な用途に使用された可能性も考えられる。

砥石

1点出土した(243)。石材にはチャートが使用され、片面に幅2～3mmの縦長の研磨痕が溝状に残っている。

(4) 石 製 品

石棒 (244)

6号住居埋土下位の床面近くから出土した。石材には頁岩が使用され、先端部が欠損している。出土状況はほぼ水平であった。

垂れ飾り (246)

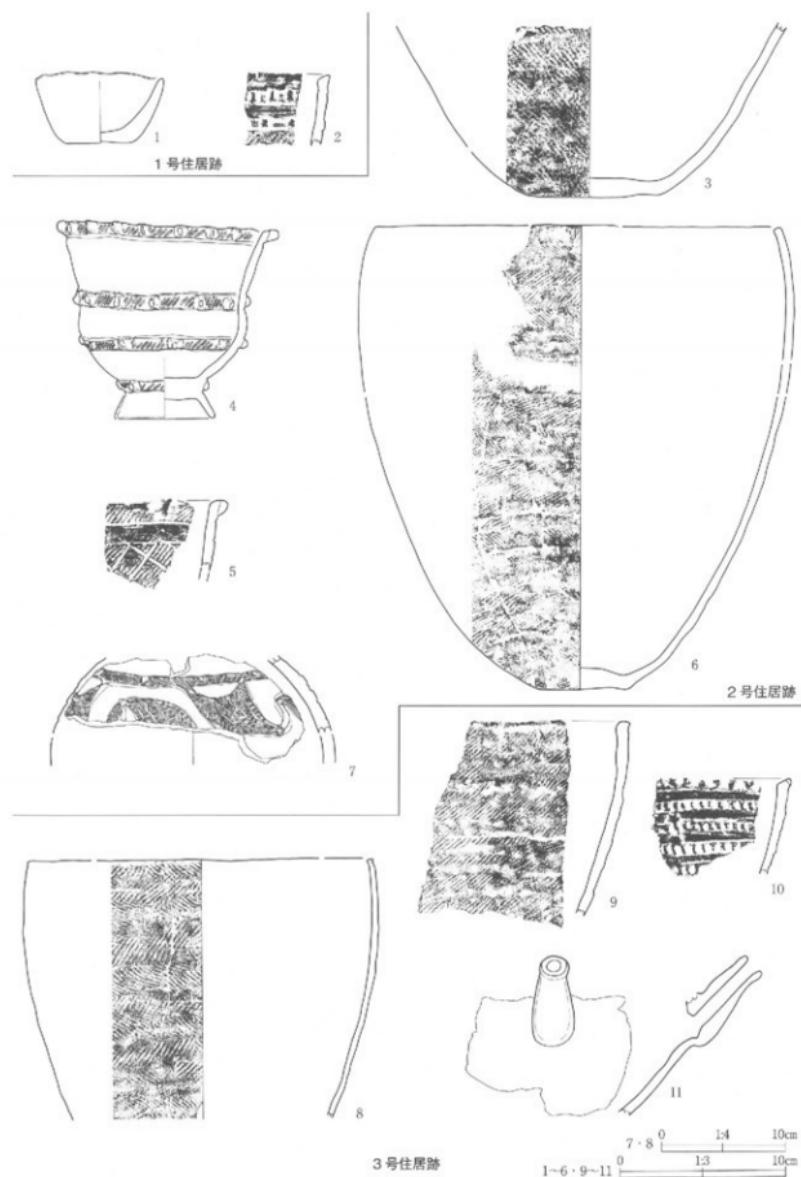
8号住居の上層観察用のベルトを除去する際に埋土2層から出土した。両面が平坦で片端部がヒダ状の形態で平坦部分には線刻が施されている。色調は緑色の濃い部分と透明感のある薄い部分に分かれれる。肉眼観察で石材はヒスイ製と考えたため、原石の産地分析鑑定を依頼したが、既存の産地データとは化学組成が異なるため、産地および石質を同定するには至らなかった。(79～84頁参照)

用途不明石製品 (245)

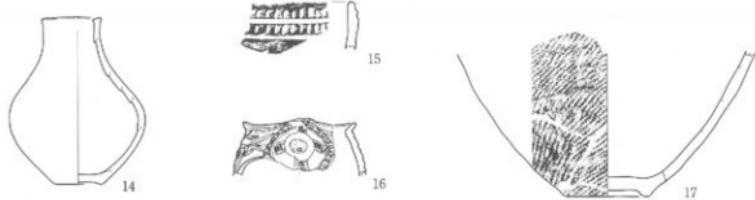
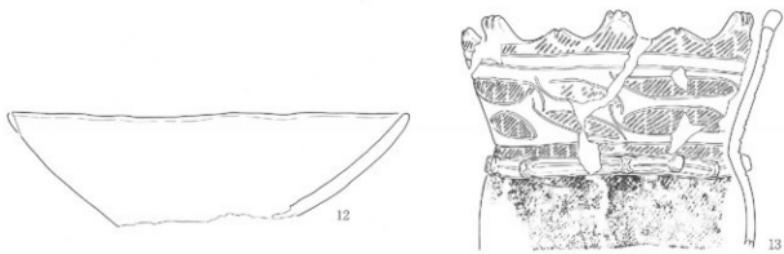
II B 18 h グリッドの第Ⅲ層から出土した。形は梢円状で成形した痕跡は見られない。石材は頁岩が使用され、先端部が欠損している。欠損した部分に溝状の線刻が施されている。用途は不明である。

(5) 炭 化 種 実

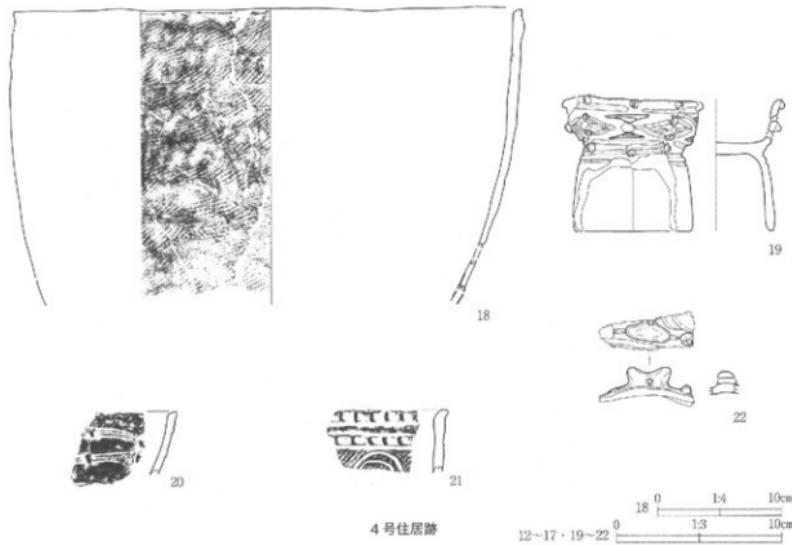
遺構内から6点出土した。採集した試料は5号住居の炉、2号住居・8号住居の埋土である。このうち5号住居から出土した1点はオニグルミで他はすべてクリであった。いずれも炭化したもので食料としたものである。詳細は分析鑑定結果にある。(77・78頁参照)



第28図 遺構内出土土器（1）

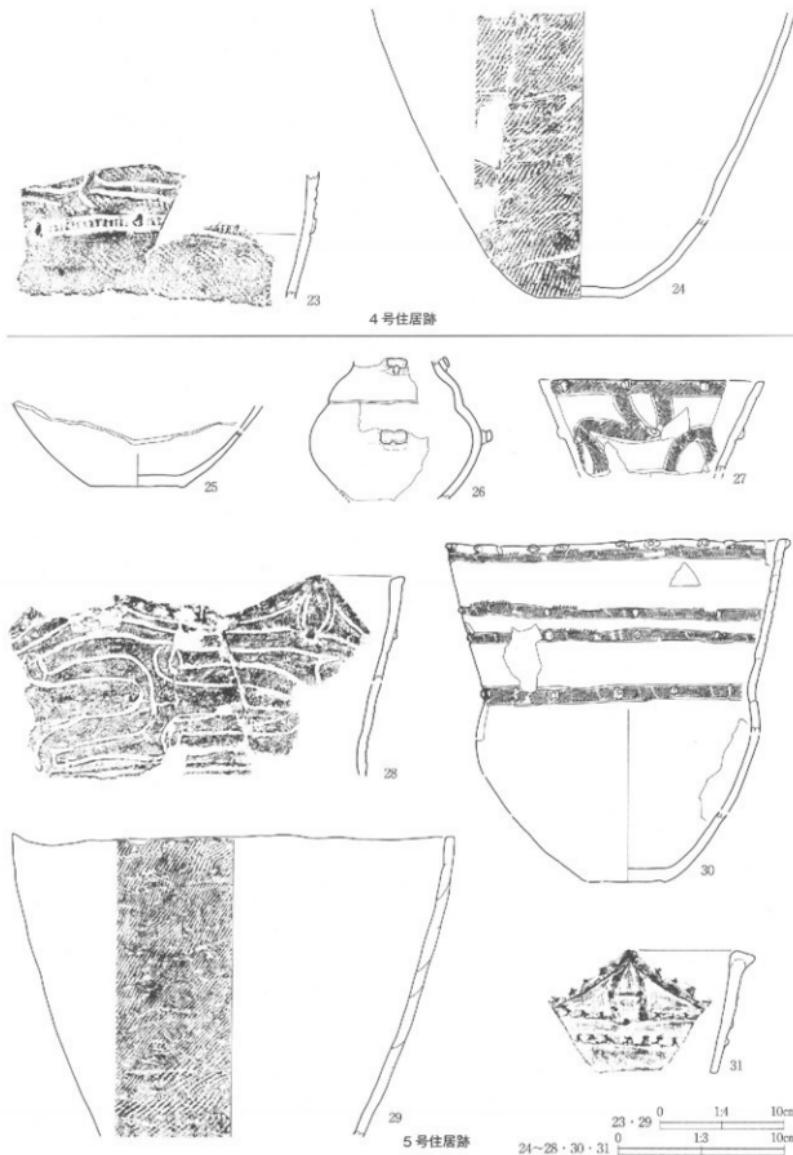


3号住居跡

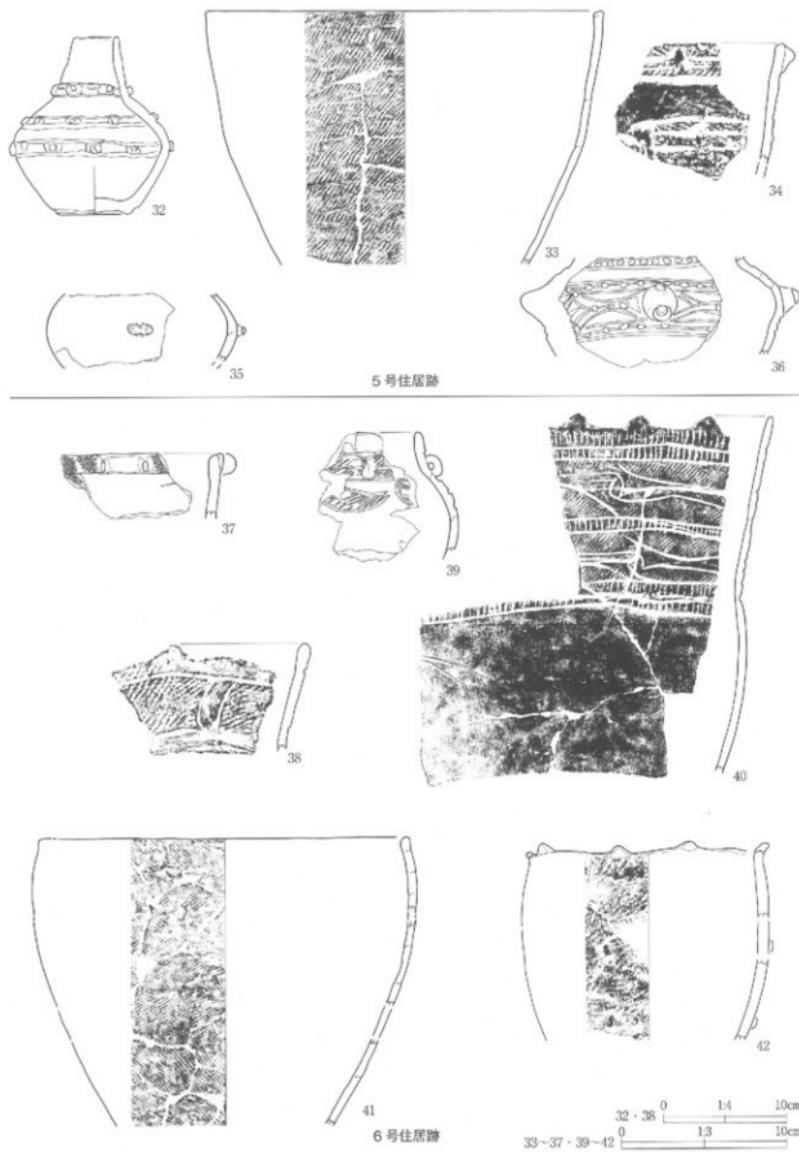


12~17・19~22 1:4
18 0 10cm
21 0 10cm

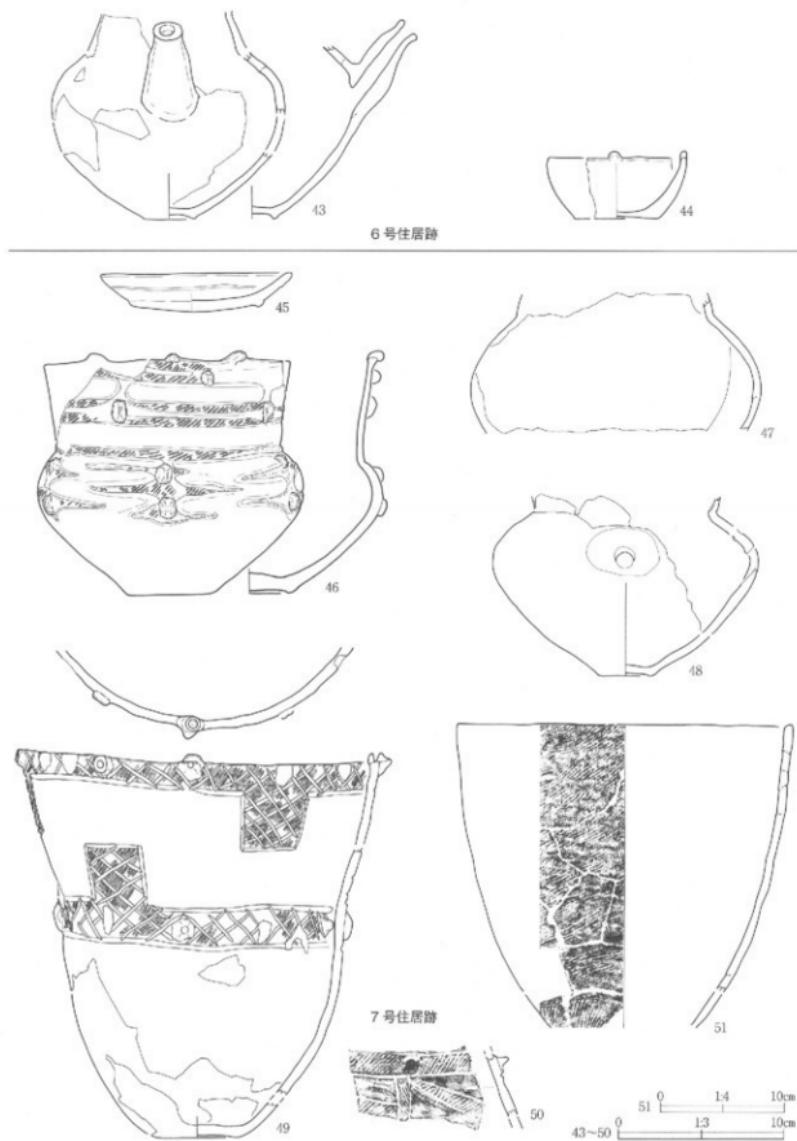
第29図 遺構内出土土器（2）



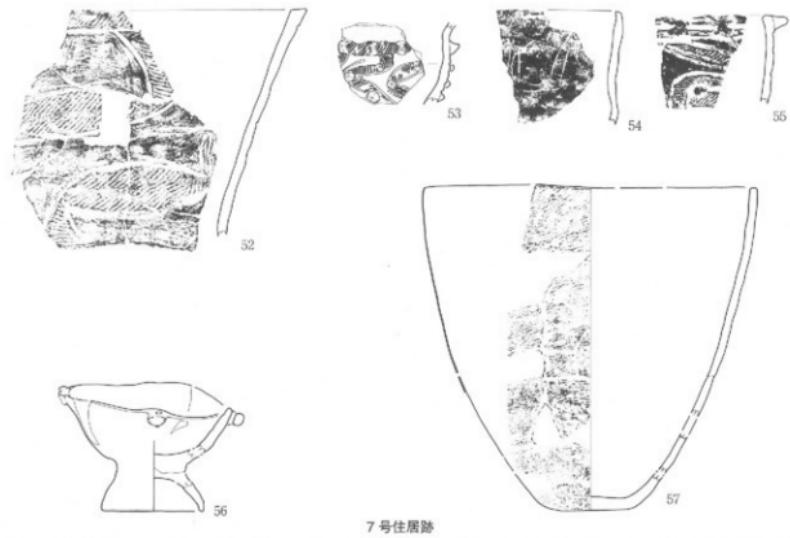
第30図 遺構内出土土器(3)



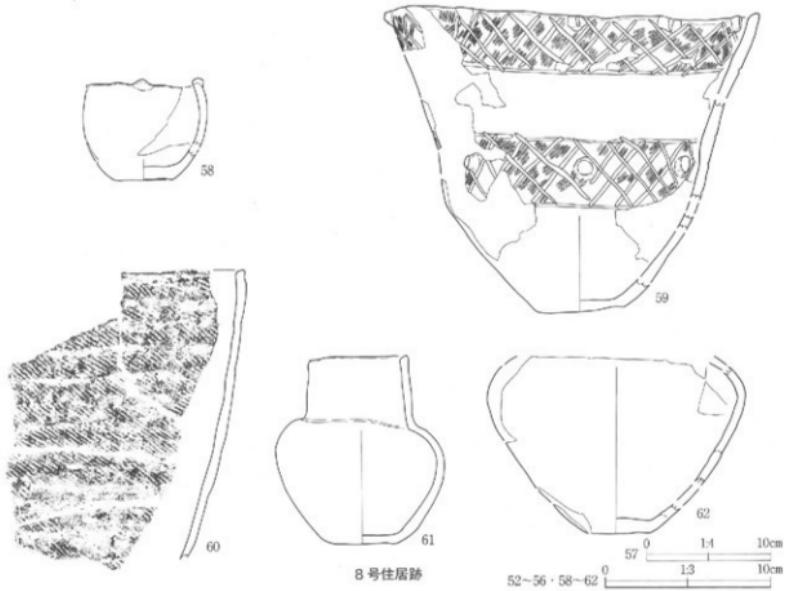
第31図 造構内出土土器 (4)



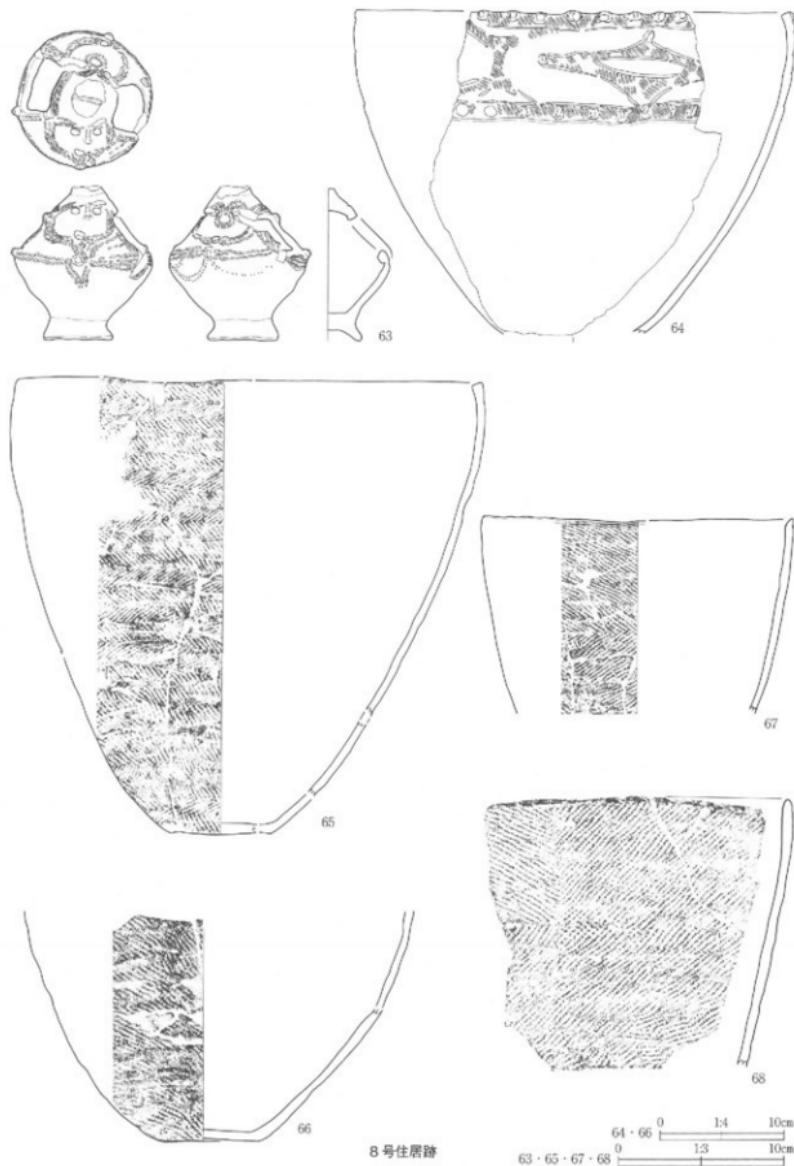
第32図 遺構内出土土器（5）



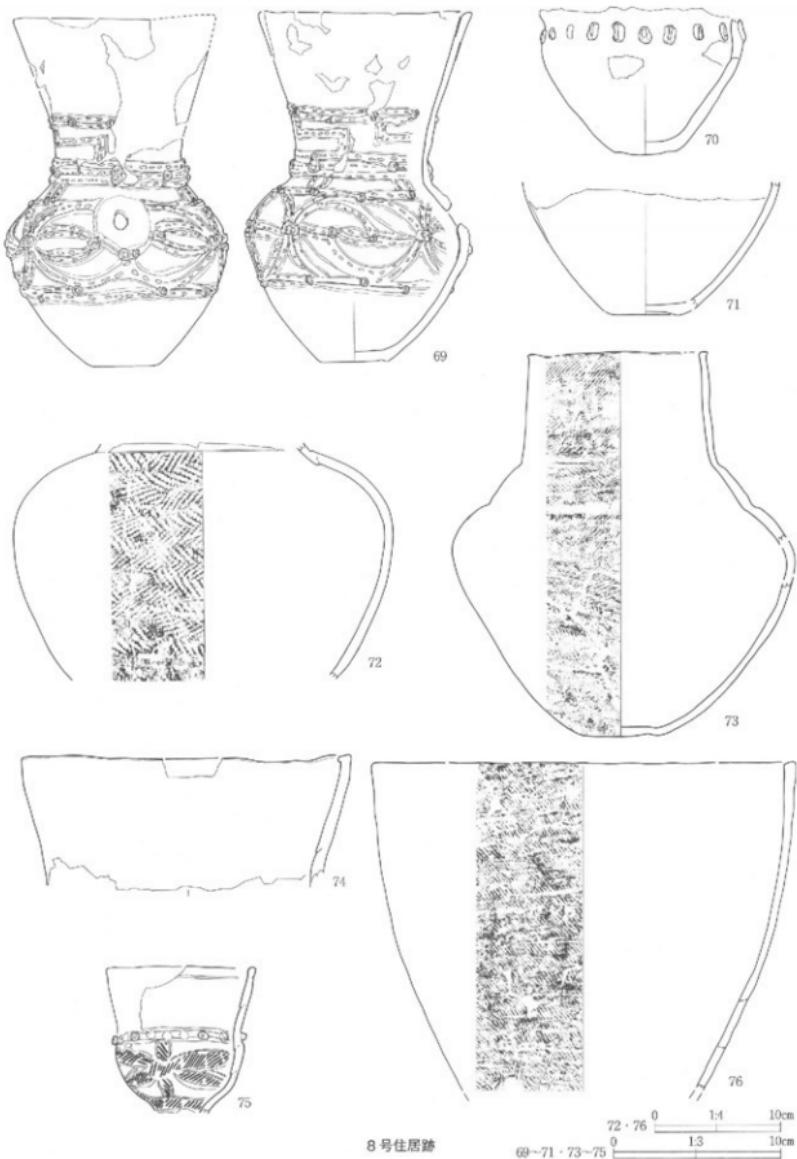
7号住居跡



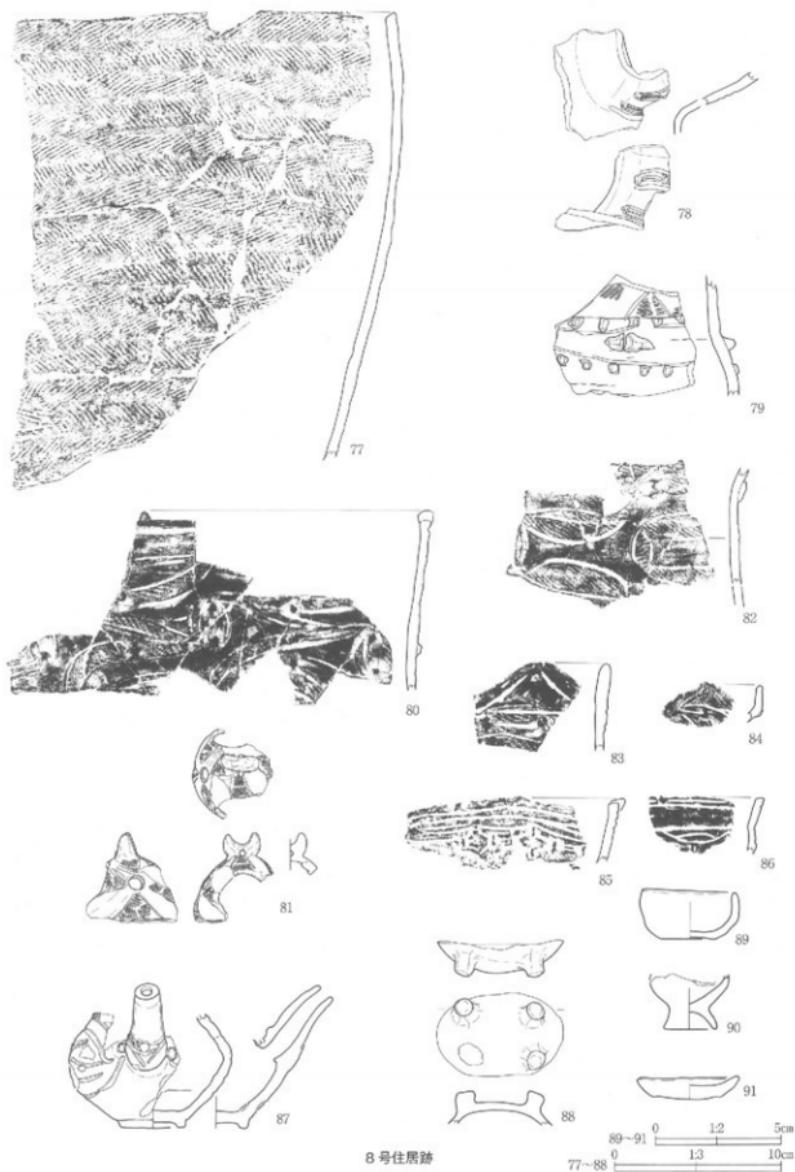
第33図 遺構内出土土器（6）



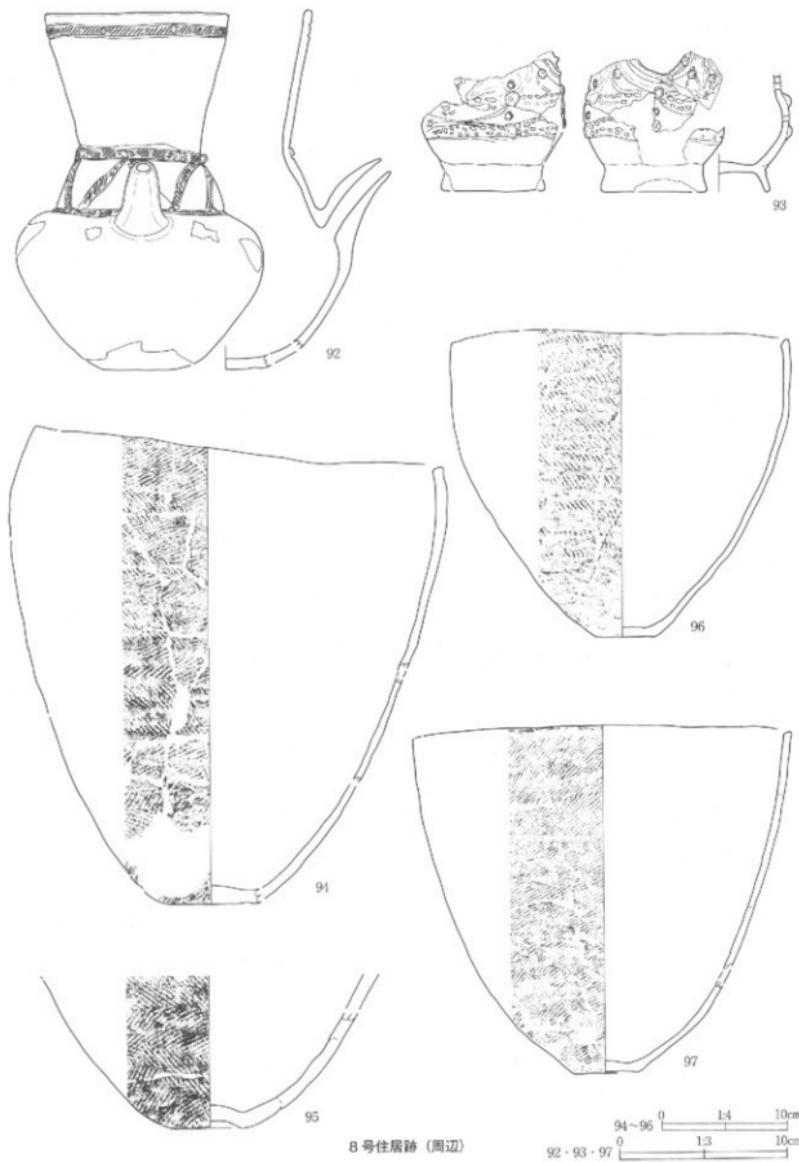
第34図 遺構内出土土器（7）



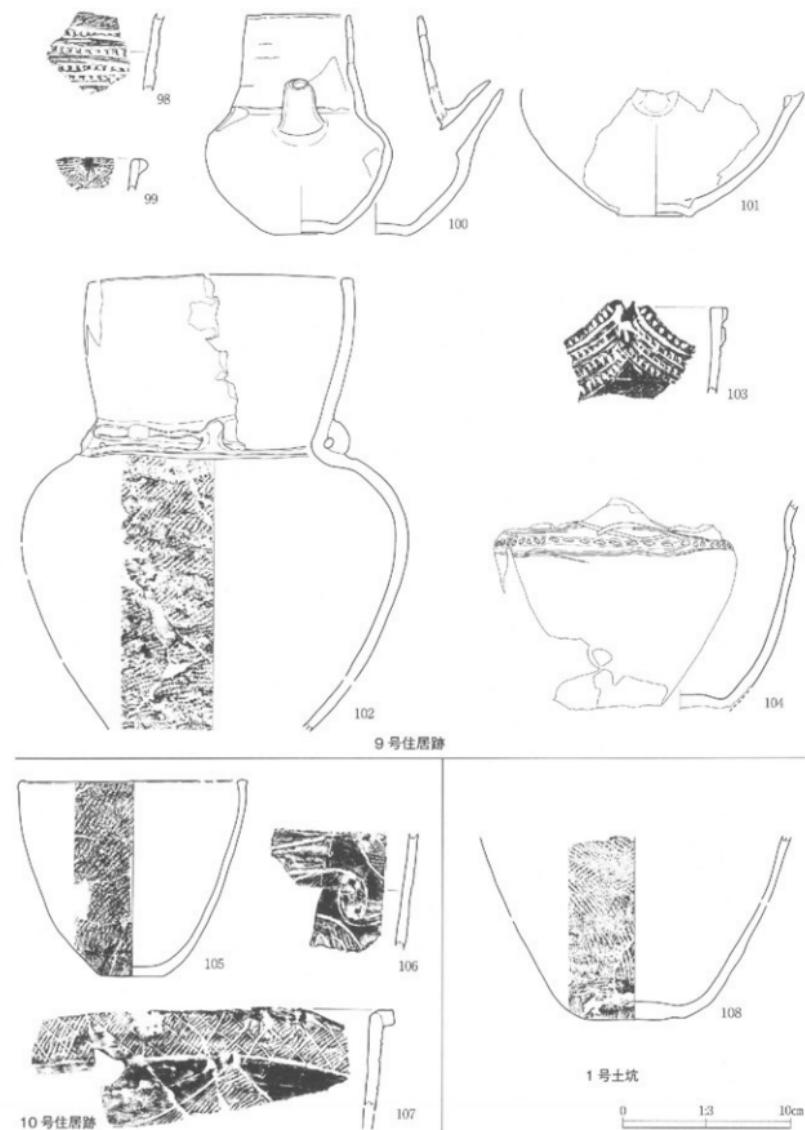
第35図 遺構内出土土器（8）



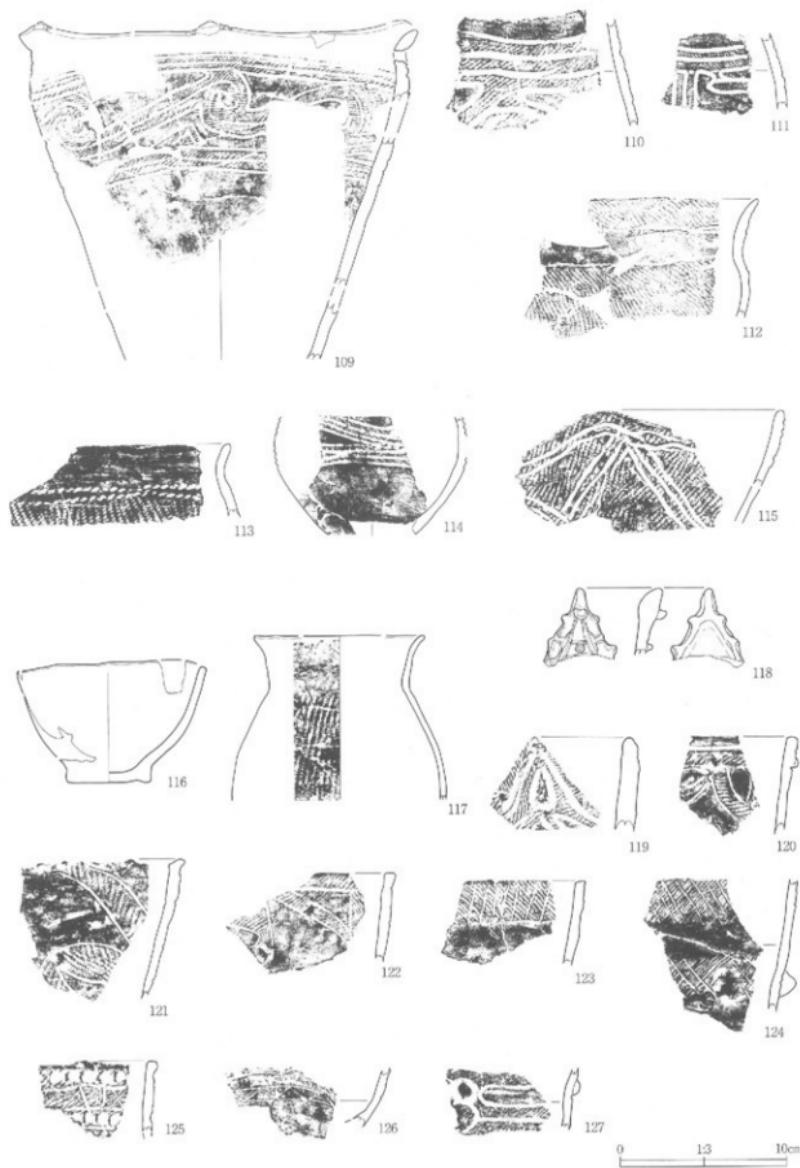
第36図 遺構内出土土器（9）



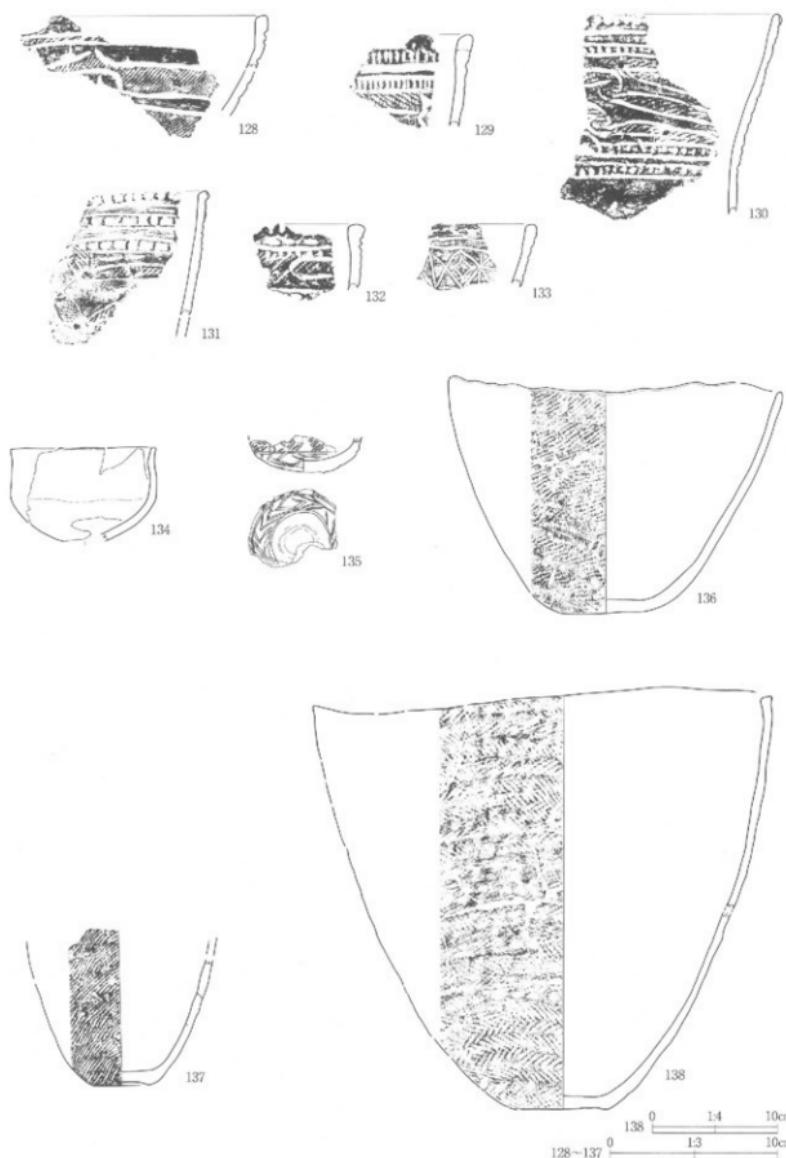
第37図 遺構内出土土器 (10)



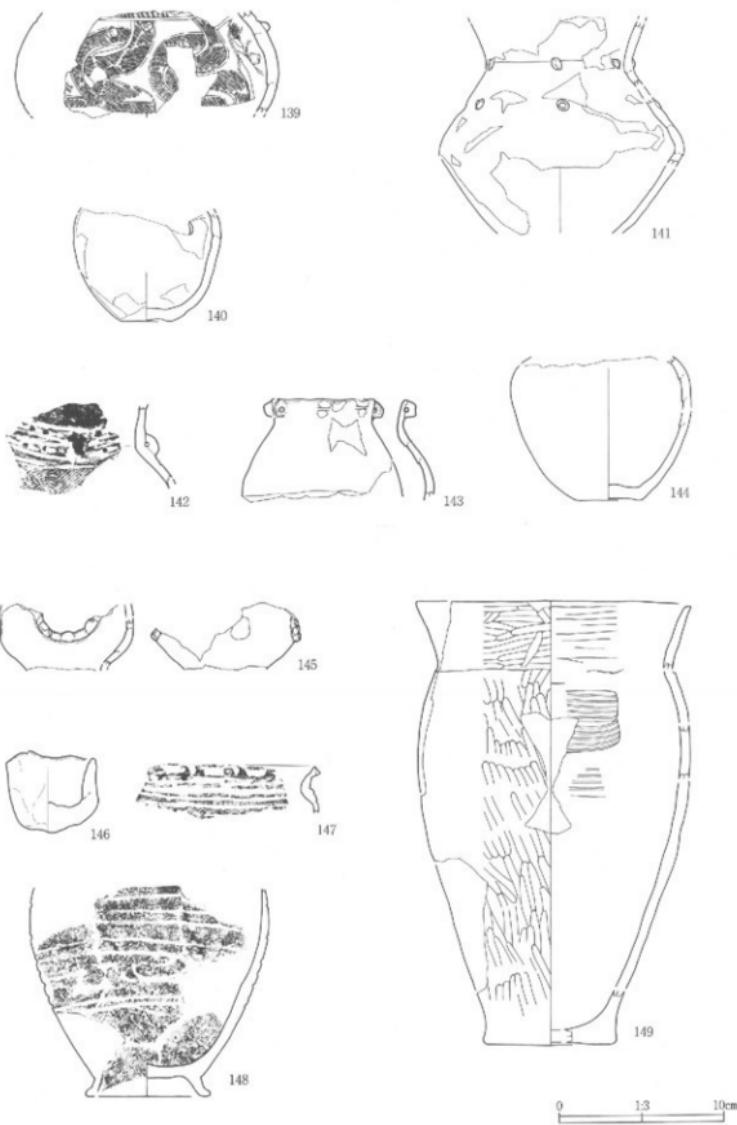
第38図 遺構内出土土器 (11)



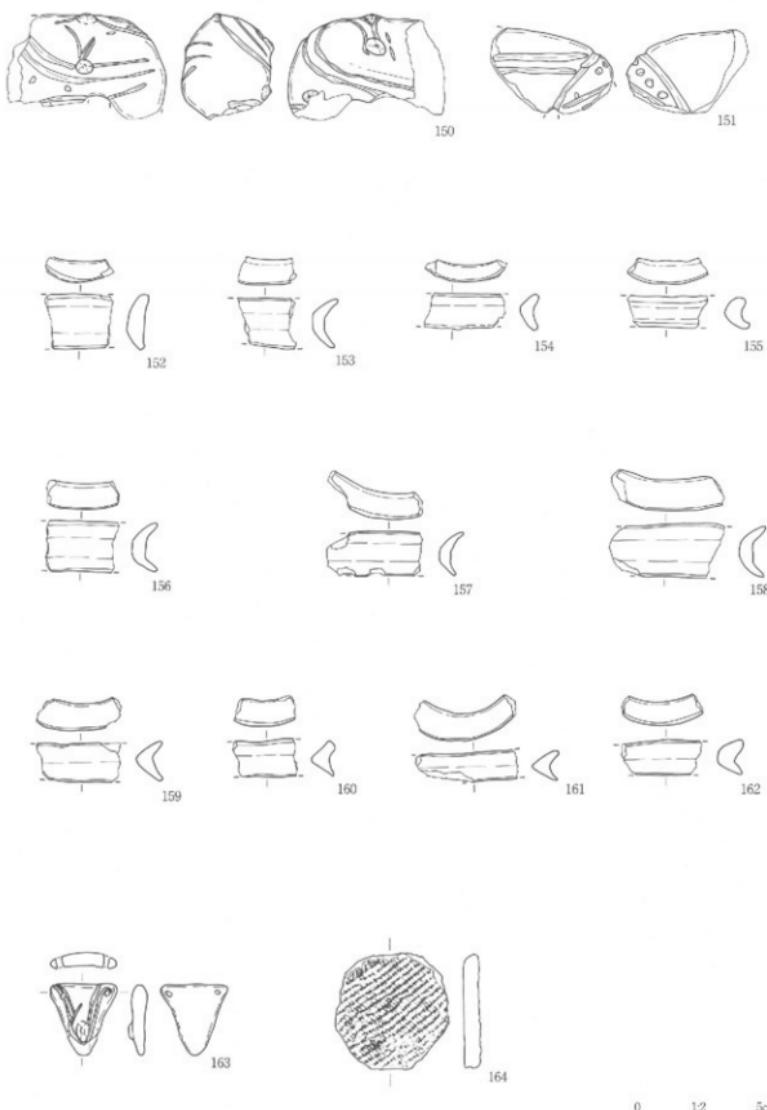
第39図 遺構外出土土器（1）



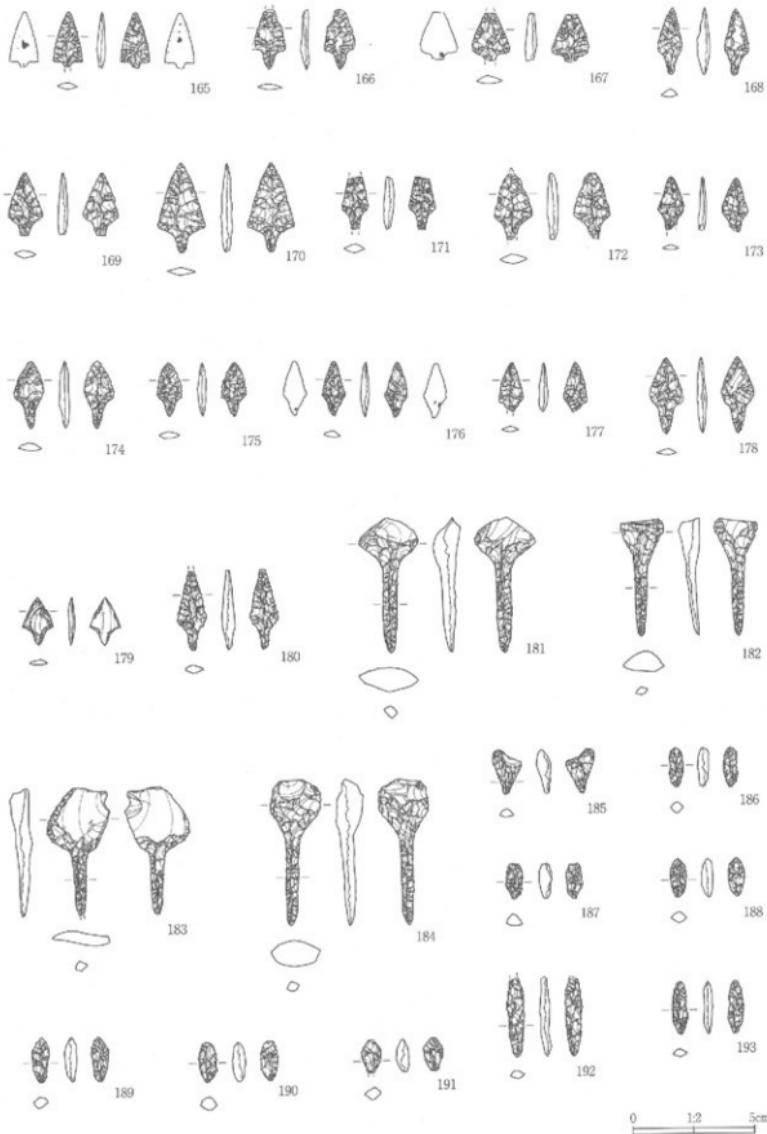
第40図 通構外出土土器（2）



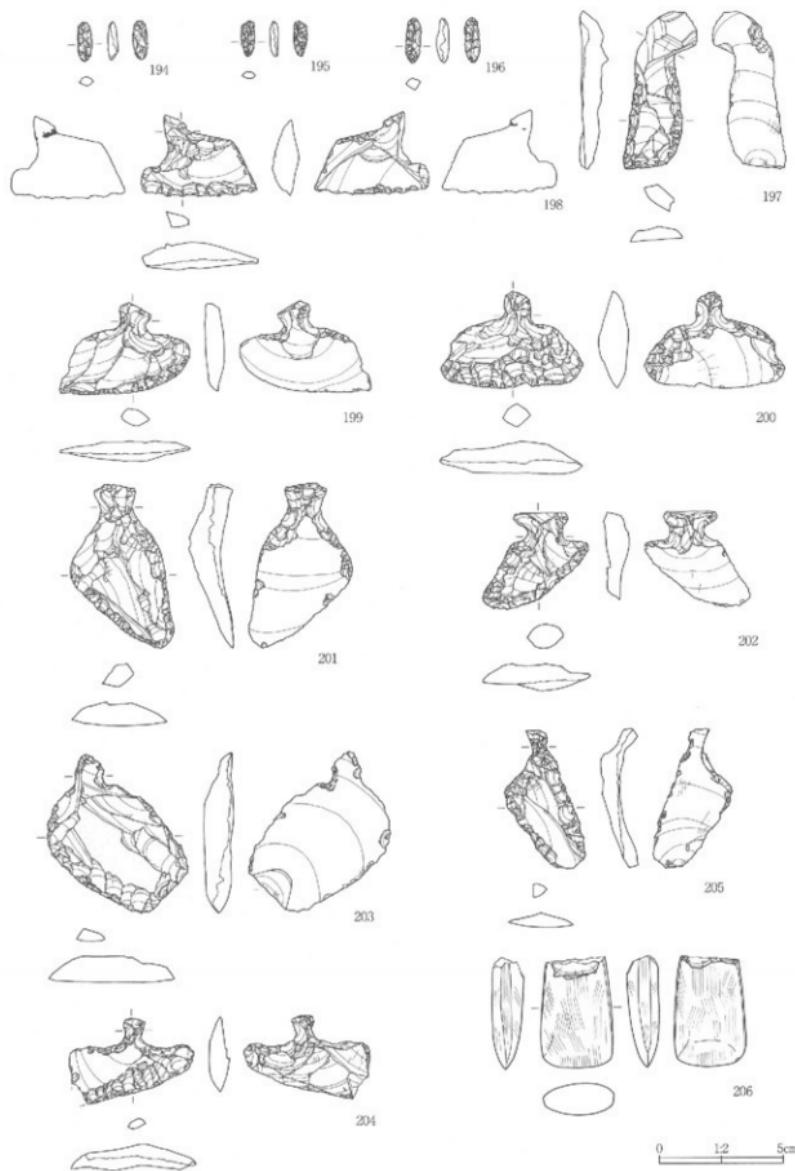
第41図 遺構外出土土器（3）



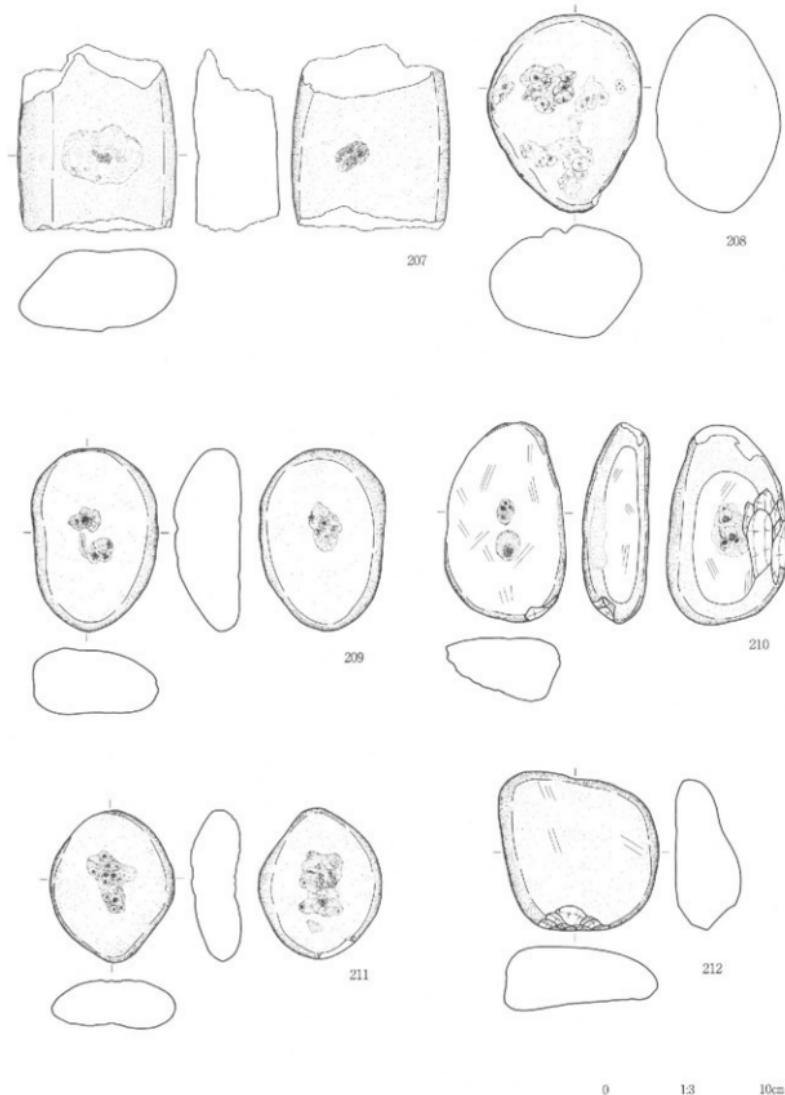
第42図 土製品



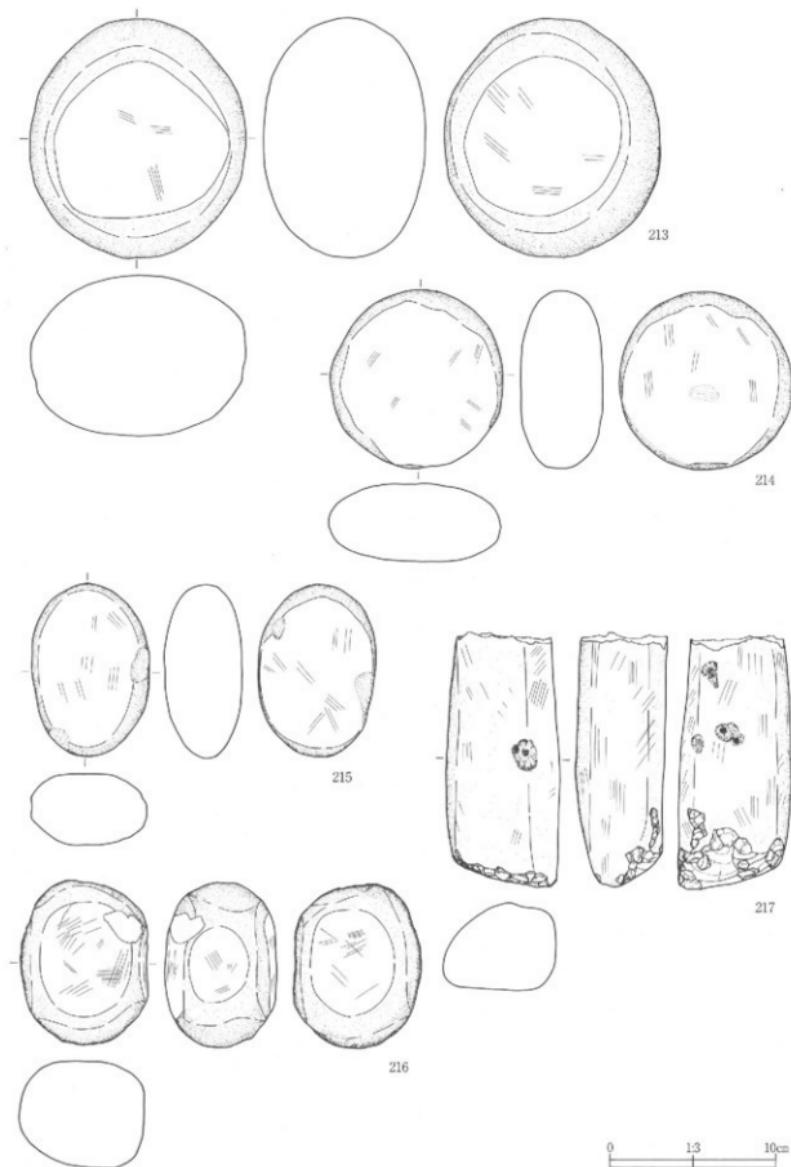
第43図 石器(1)



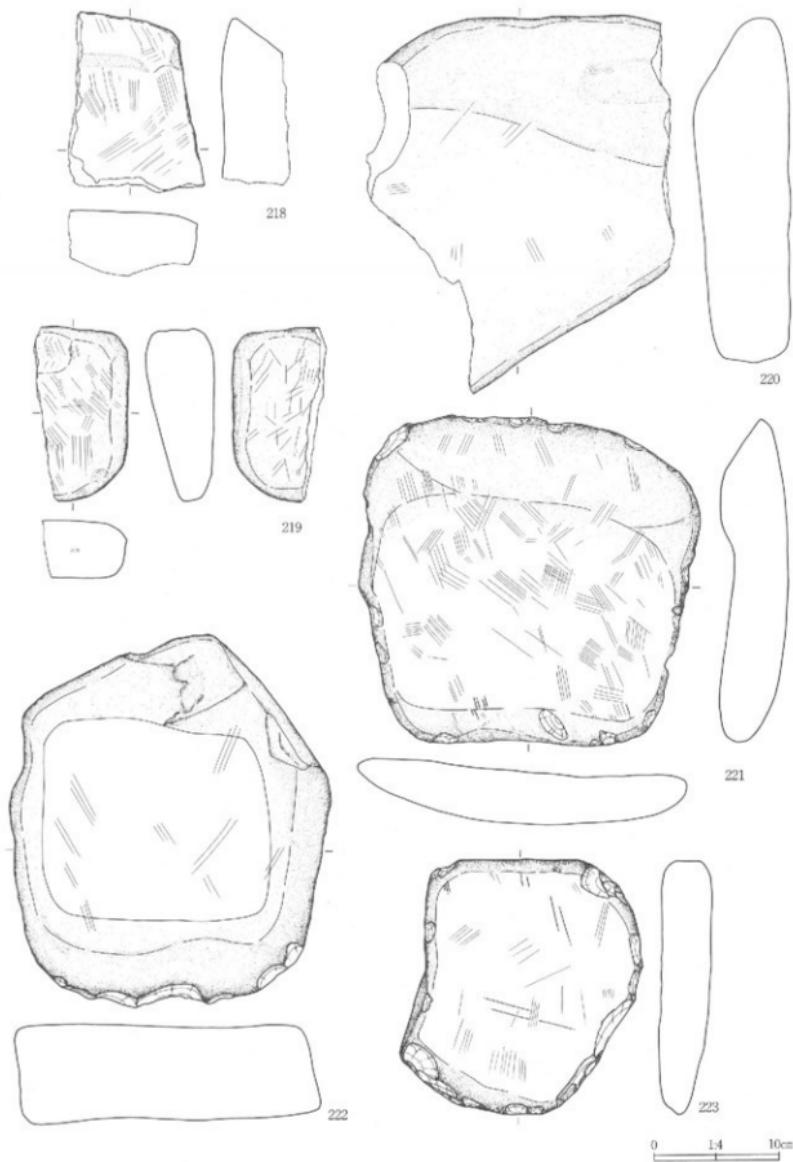
第44図 石器(2)



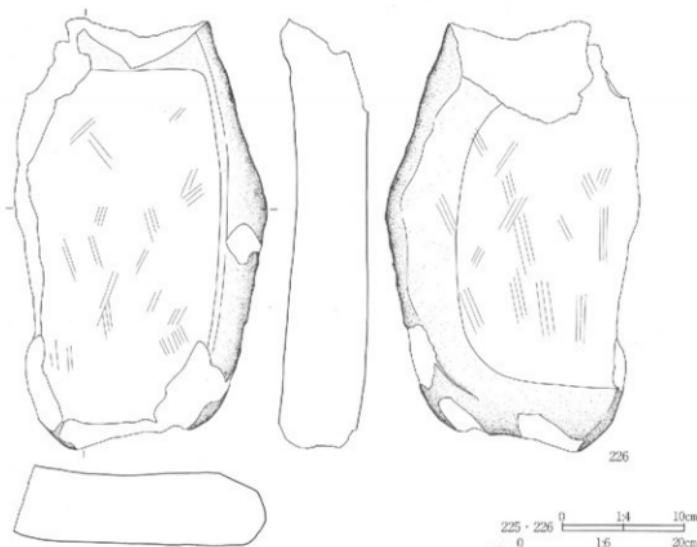
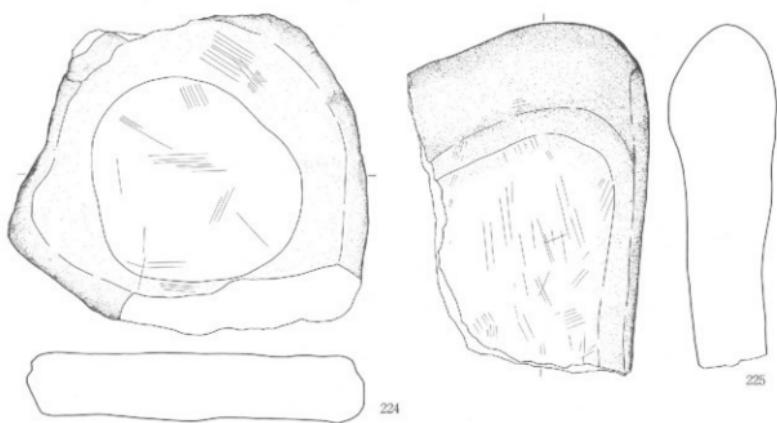
第45図 石器（3）



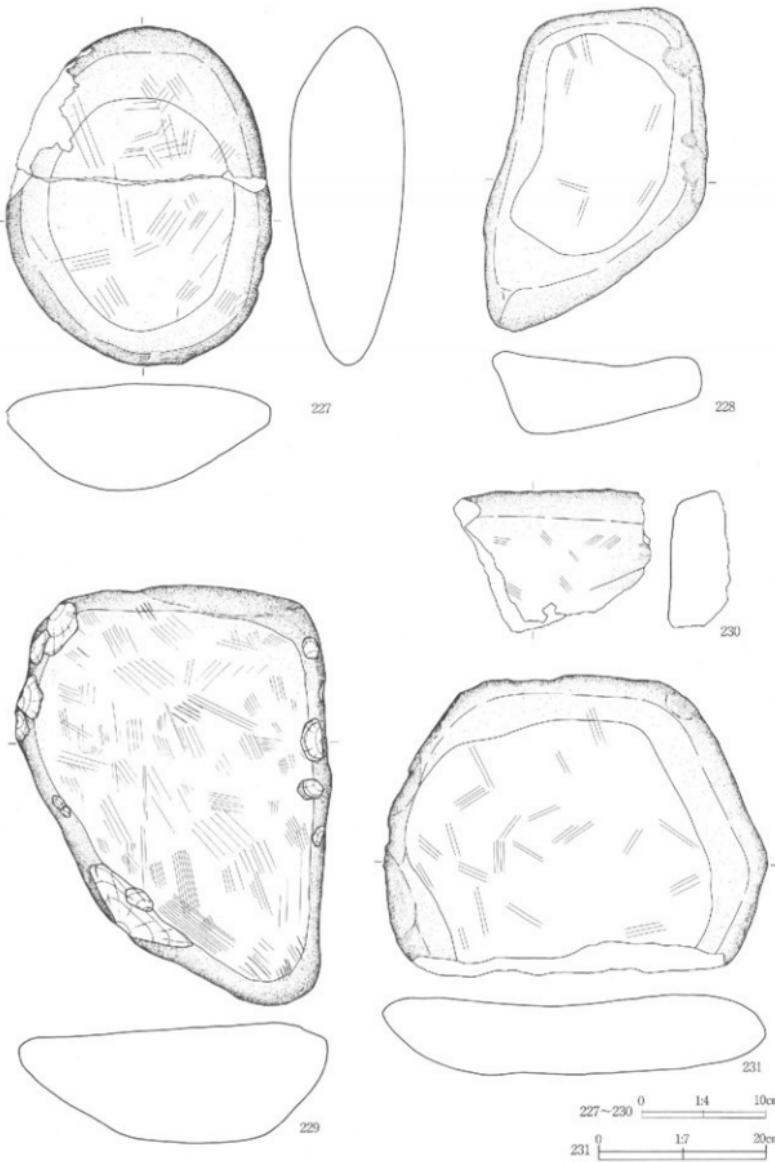
第46図 石器(4)



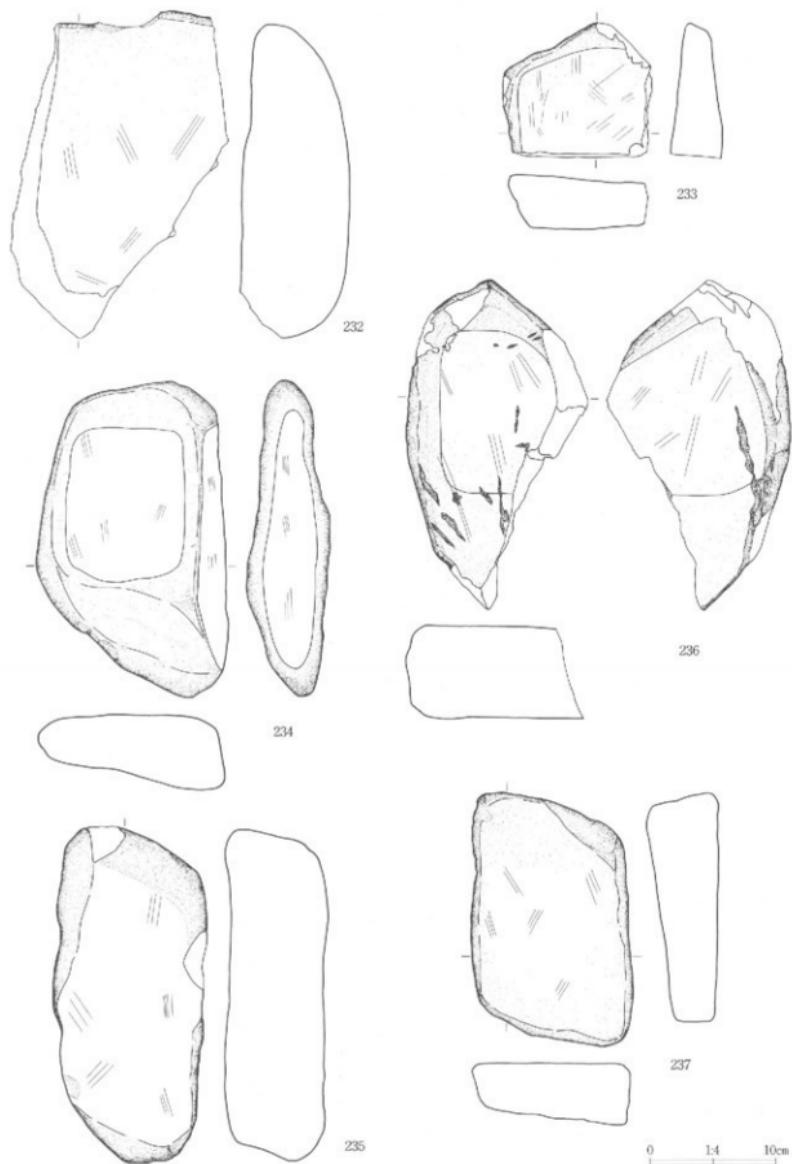
第47図 石器(5)



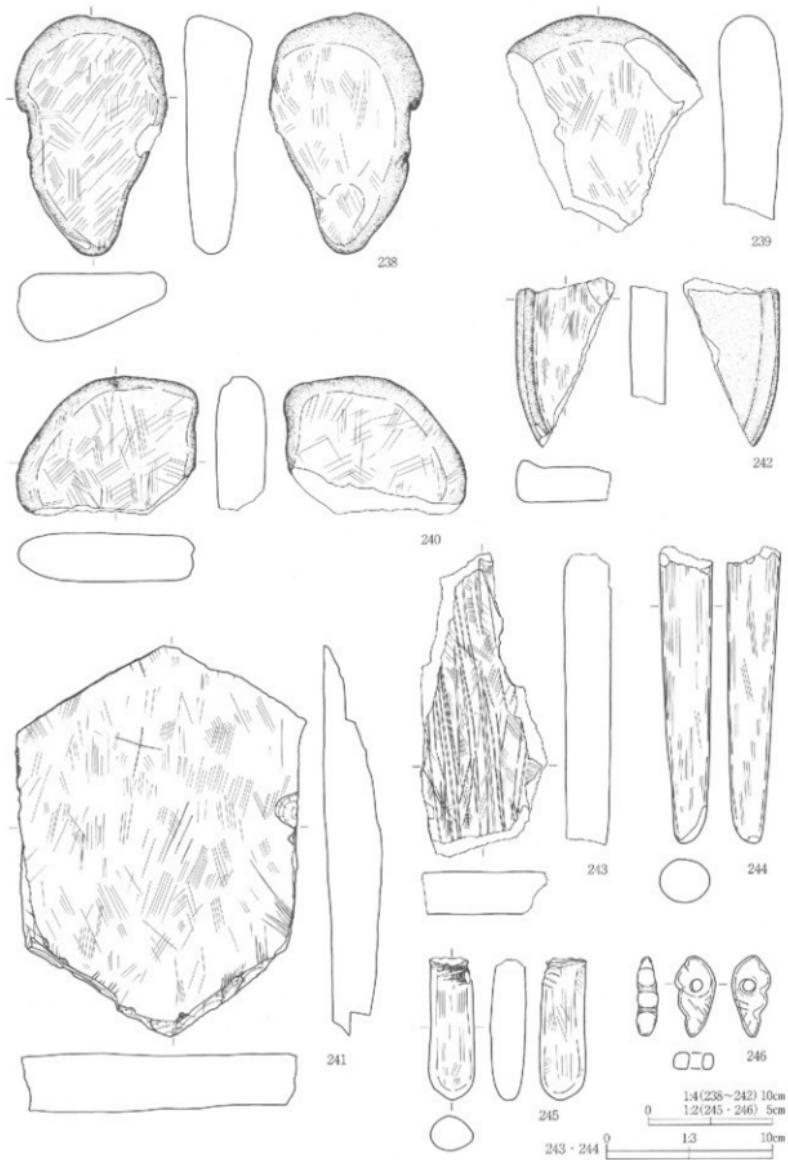
第48図 石器(6)



第49図 石器 (7)



第50図 石器（8）



第51図 石器(9)、石製品

第2表 土器観察表(1)

No.	用+地点	部位	構造	部位	口径(cm) 容量(cm) 高さ(cm)	外縁(文様・模様・地文・原体など)	内面調整 外面 内面	備考	記載 年月
1 1号住	粘土	鉢	丸形器	口縁	7.7 4.0	4.4 [圓底小底、無文]	ミガキ ナフ	○ ○	28 19
2 1号住	用1	深鉢	口縁部	—	—	10.5 R.L.施文	ミガキ ナフ	○ ○	28 19
3 2号住	堆土上位	深鉢	削~直部	—	8.0	10.9 沈底小底による點地文帯、R.L.施文	ミガキ ナフ	○ ○	28 19
4 2号住	堆土上位	台付鉢	口縁~合部	4.1	2.7	—	ミガキ ナフ	○ ○	28 19
5 2号住	堆土上位	深鉢	口縁部	—	—	點地、沈底文(落子目)、R.L.施文	ミガキ ナフ	○ ○	28 19
6 2号住	堆土上位	深鉢	口縁~底部	(32.7)	2.0	38.1 R.L.R.L.施文	ミガキ ナフ	○ ○	28 19
7 2号住	検出箇所	口縁?	圓底	—	—	點地、沈底文、R.L.施文	ミガキ ナフ	○ ○	28 19
8 3号住	宋画	深鉢	口縁~脚部	(28.0)	—	—	ミガキ ナフ	○ ○	28 19
9 3号住	宋画	深鉢	口縁~脚部	—	—	1.R.R.L.施文	ミガキ ナフ	○ ○	28 19
10 3号住	宋画	深鉢	口縁部	—	—	點地、沈底文、連続刻文	ミガキ ナフ	○ ○	28 19
11 3号住	宋画	注口	削部	—	—	無文(ミガキ)	ミガキ ナフ	○ ○	28 19
12 3号住	堆土上位	台付鉢	口縁部	2.43	—	無文(ミガキ)	ミガキ ナフ	○ ○	29 19
13 3号住	堆土上位	深鉢	口縁~脚部?	(20.6)	—	0.45 沈底文、尖底、R.L.施文	ミガキ ナフ	○ ○	29 19
14 3号住	検出箇所	壺	完形品	3.6	3.0	10.3 無文(ミガキ)	ミガキ ナフ	○ ○	29 19
15 3号住	検出箇所	深鉢	口縁部	—	—	連続刻文、北朝文	ミガキ ナフ	○ ○	29 20
16 3号住	検出箇所	香炉形?	削部	—	—	連続刻文、點地、沈底文、穿孔	ミガキ ナフ	○ ○	29 20
17 3号住	堆土	深鉢	削~底部	—	—	—	ミガキ ナフ	○ ○	29 20
18 4号住	堆土+3層	深鉢	口縁部	41.2	—	(24.5) R.L.施文	ミガキ ナフ	○ ○	29 20
19 4号住	堆土上位	台付鉢	口縁~台部	(6.5)	7.0	8.3 點地、沈底文、浅く少し(凹形・三分割)	ミガキ ナフ	○ ○	29 20
20 4号住	堆土	深鉢	口縁部	—	—	點地、沈底文、R.L.施文	ミガキ ナフ	○ ○	29 20
21 4号住	堆土	深鉢	口縁部	—	—	沈底文、連続刻文、R.L.施文	ミガキ ナフ	○ ○	29 20
22 4号住	堆土	香炉形	奥み部	—	—	沈底文、點地、輪笠(穿孔あり)	ミガキ ナフ	○ ○	29 20
23 4号住	堆土	深鉢	口縁~底部	—	—	連続刻文、點地、沈底文、R.L.施文	ミガキ ナフ	○ ○	30 20
24 4号住	堆土	深鉢	削~底部	—	6.1	(23.5) 無文(ミガキ)	ミガキ ナフ	○ ○	30 20
25 5号住	宋画	深鉢	削部	—	5.6	(6.5) 無文(ミガキ)	ミガキ ナフ	○ ○	30 20
26 5号住	點茶	注口	—	—	—	—	ミガキ ナフ	○ ○	30 20
27 5号住 PPI	堆土	鉢	口縁部	(13.5)	—	(6.0) 點地、沈底文、R.L.施文	ミガキ ナフ	○ ○	30 20

* () の付は、運行は埋元復、鋤向は現存復。

No.	出土点	層位	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	外寸(文様・文面・地文、原体など)	内面調整	壁材	備考
					—	—	—	底盤・貼盤、沈縫、L.R.縫文	ミガキ・粗	○ ○	・断面・写真
28	5号住	埴土2層	深鉢	口縁部	—	—	—	(24.8) L.R.縫文	ナフ	○ ○	30 21
29	5号住	埴土2層	深鉢	口縁～全体部	25.8	—	—	底盤・貼盤、沈縫、L.R.縫文	ミガキ	○ ○	30 21
30	5号住	埴土1・2層	深鉢	口縁～底部	26.6	6.4	23.1	沈縫文、貼盤、L.R.縫文	ミガキ	○ ○	30 21
31	5号住	埴土1層	深鉢	上縁部	—	—	—	底盤・貼盤、沈縫文	ミガキ	○ ○	30 21
32	5号住	埴土上位	壺	完形品	27	4.1	10.9	底盤、沈縫文	ミガキ	○ ○	31 21
33	5号住	埴土上位	深鉢	口縁部	(32.0)	—	(21.8)	L.R.縫文	ミガキ	○ ○	31 21
34	5号住	埴土	深鉢	口縁部	—	—	—	贴盤、沈縫文、R.L.縫文	ミガキ	○ ○	31 21
35	5号住	埴土	注口	側部	—	—	—	贴盤、底板(底板に穿孔あり)	ミガキ	○ ○	31 21
36	5号住	埴川面	注口?	側部	—	—	—	贴盤、沈縫文、刻突文、(円形の施脂)底板に穿孔あり	ミガキ	○ ○	31 21
37	6号住	床面	深鉢	口縁部	—	—	—	R.L.縫文、沈縫文、帶?	ミガキ	○ ○	31 21
38	6号住	床面	深鉢	口縁部	—	—	—	底盤、沈縫文、L.R.縫文	ミガキ	○ ○	31 21
39	6号住	床面	壺	上縁～脚部	—	—	—	沈縫文、L.R.縫文、(頭部に施脂手形)	ミガキ	○ ○	31 21
40	6号住	床面	深鉢	口縁部	—	—	—	底盤、沈縫文、施脂手形目、R.L.縫文	ミガキ	○ ○	31 21
41	6号住	床面	深鉢	口縁～脚部	(30.0)	—	(23.7)	R.L.・L.R.縫文	ナフ	○ ○	31 21
42	6号住	貼朱	深鉢	上縁～脚部	14.4	—	(12.2)	贴盤、沈縫文、L.R.縫文	ミガキ	○ ○	31 22
43	6号住	埴土	注口	側～底部	—	30	(12.7)	無文(ミガキ)	ナフ・粗	—	32 22
44	6号住	埴土	杯	杯	(5.6)	(3.4)	2.8	火照、無文(ミガキ)	ナフ	ミニナフア	32 22
45	7号住	床面	深鉢	口縁～底部	(11.5)	8.0	2.4	無文(ミガキ)、沈縫文?	ミガキ	—	32 22
46	7号住	床面	深鉢	口縁～底部	(15.0)	5.0	14.9	火照、贴盤、沈縫文、L.R.縫文	ミガキ	—	32 22
47	7号住	床面	注口	側部	—	—	—	無文(ミガキ)	ミガキ	—	32 22
48	7号住	床面	注口	底～底部	—	—	—	無文(ミガキ)	ミガキ	—	32 22
49	7号住	床面	深鉢	口縁～底部	21.7	5.0	23.9	火照、沈縫文、帽子目状	ミガキ	—	32 22
50	7号住	床面	深鉢	口縁部	—	—	—	沈縫文間に施脂、L.R.縫文	ミガキ	—	32 22
51	7号住	埴土	注口	側～脚部	(27.0)	—	(25.0)	R.L.縫文	ミガキ	○ ○	32 22
52	7号住	埴土	深鉢	口縁部	—	—	—	贴盤文、L.R.縫文	ミガキ	○ ○	33 23
53	7号住	埴土	脚?	口縁部	—	—	—	贴盤、沈縫文、L.R.縫文	ミガキ・粗	—	33 23
54	7号住	埴土	深鉢	口縁部	—	—	—	沈縫文(粗)	ミガキ	○ ○	33 23

*() の上は、既存は既定値、器底は実存値。

第2表 土器観察表(3)

No	出土地點	層位	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	外側(文様・基盤・地文・面文など)	内面(文様・基盤・地文・面文など)	備考	回数
55	7号住	周上	深鉢	口縁部	—	—	—	沈痕文、片縫、LR基盤	ミガキ	33	23
56	7号住	埋土	台付鉢	口縁～底部	10.3 (26.8)	6.2 (26.7)	7.9	沈痕文、片縫、LR基盤	ミガキ	33	23
57	7号住、1号構	埋土	深鉢	口縁～底部	6.7	6.7	—	口縫位に穿孔あり	ミガキ	33	23
58	8号住	床面	鉢	口縁～底部	7.0	3.4	6.2	口縫位	○	33	23
59	8号住、炉	省略山面	深鉢	口縁～底部	22.2	5.2	18.9	底面、沈痕文(棒子目状)、LR基盤	ミガキ	33	23
60	8号住	周上・2層	深鉢	口縁～底部	—	—	—	LR・底文	ミガキ	33	23
61	8号住	周上・2層	壺	变形	6.0	4.0	11.5	無文(ミガキ)	ミガキ	33	23
62	8号住	周上・下位	壺	肩～底部	—	—	3.8	(0.9) 無文	ミガキ	34	23
63	8号住	埋土・下位	香炉形	肩～底部	—	—	4.2	(0.9) 沈痕文、2～3段の漸然する割れが、點痕、透かし	ミガキ	34	23
64	8号住	埋土・下位	深鉢	1様～肩部	(25.4)	—	(19.9)	底面、沈痕文、RL基盤	ミガキ	34	23
65	8号住	埋土・下位	深鉢	口縁～底部	(37.5)	8.0	37.5	RL・底文	ミガキ	34	24
66	8号住	埋土・下位	深鉢	肩～底部	—	—	5.8	(14.2) RL・底文	ミガキ	34	24
67	8号住	埋土・下位	深鉢	口縁～肩部	(25.0)	—	(16.0)	LR・RL・底文	ミガキ	34	24
68	8号住	埋土・1層	深鉢	口縁～底部	—	—	—	RL・底文	ミガキ	34	24
69	8号住	埋土・1層	注口	口縁～底部	(12.8)	4.0	21.7	點痕、沈痕文、利突文	ミガキ	35	24
70	8号住	埋土・1層	深鉢	肩～底部	—	—	3.6	(9.1) 肩側(偏長)	ミガキ	35	24
71	8号住	埋土・1層	深鉢?	肩下平～底部	—	—	(3.8)	(8.2) 無文(ミガキ・粗)	ミガキ	35	24
72	8号住	埋土・1層	壺	底部	—	—	—	RL・LR・底文	ミガキ	35	24
73	8号住	周上	壺	口縁～底部	14.5	6.0	31.8	LR・RL・底文	ミガキ	35	25
74	8号住	周上	壺?	口縫部	—	—	—	無文	ミガキ	35	25
75	8号住	周上	台付鉢	口縫～脚下	20.8	—	—	底面、沈痕文、LR・底文	ミガキ	35	25
76	8号住	埋土	深鉢	口縁～底部	(34.2)	—	(27.8)	RL・底文	ミガキ	35	25
77	8号住	埋土	深鉢	口縁～底部	—	—	—	LR・RL・底文	ミガキ	36	25
78	8号住	埋土	壺	基底不規	—	—	—	點痕、沈痕文	ミガキ	36	25
79	8号住	埋土	注口	口縫～底部	—	—	—	點痕、沈痕文、RL・底文	ミガキ	36	25
80	8号住	埋土	深鉢	口縁～底部	—	—	—	點痕、沈痕文、LR・底文	ミガキ	36	25

* () の1・2位・3位は塗穴集、器尚は質好集。

第2章 土器調査表(4)

No	出土場所	層位	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外縁(文様・装饰・施文・削痕など)	内面(剥離・ 剥落・凹凸)	深井青 外壺 内面	備考	調査
81	8号住	瓦土	青花形 壺	口縁～腹部	—	—	—	光腹文、L.R削文、透孔、穿孔	—	—	—	36 25
82	8号住	瓦土	深鉢	L.I.腹部	—	—	—	貼瘤、沈窓文、L.R削文	ナギ	—	—	36 25
83	8号住	瓦土	深鉢	L.I.腹部	—	—	—	貼瘤、沈窓文、L.R削文	ミガキ	—	—	36 26
84	8号住	瓦土	深鉢	L.I.腹部	—	—	—	貼瘤、沈窓文	ナフ	—	—	36 26
85	8号住	瓦土	深鉢?	L.I.腹部	—	—	—	貼瘤、沈窓文	ミガキ	○ ○	—	36 26
86	8号住	椚出	注口?	L.I.腹部	—	—	—	貼瘤、沈窓文	ナフ	—	—	36 26
87	8号住	椚出面	注口?	L.I.壺～底部	—	—	—	貼瘤、沈窓文、R.L削文	—	—	—	36 26
88	8号住	椚山面	鉢(付)	底部	—	—	—	—	—	—	—	36 26
89	8号住	瓦土	鉢	完光品	38	22	21	施文	ナフ	—	ミニチュア	36 26
90	8号住	瓦土	合掌形 壺	肩～台部	—	—	—	—	ナフ	—	ミニチュア	36 26
91	8号住	瓦土	皿	皿	41	28	0.9	無文	ナフ	—	—	36 26
92	ⅡB10r(8号住面) 直縁下位	注口	口縁～底部	—	112	—	—	貼瘤、沈窓文、L.R削文	—	—	—	37 26
93	ⅡB10r(+)	直縁下位	青花	肩～台部	—	63	63	貼瘤、沈窓文、轉突文、円窓の連かし	—	—	赤色顔料付	37 26
94	ⅡB10r(+)	直縁下位	青花	L.I.腹部	34.1	—	36.0	L.R削文	ナフ	○	—	37 26
95	ⅡB10r(+)	直縁下位	青花	胸～底部	—	46	64.9	R.L.R削文	ナフ	○	—	37 26
96	ⅡB10r(+)	直縁	青花	L.I.腹部	27.1	46	24.2	R.L削文	ミガキ	○ ○	—	37 26
97	ⅡB10r(+)	直縁下位	青花	口縁～底部	30.7	52	28.5	L.R削文	ナフ	○	—	37 27
98	9号住	瓦面	深鉢	L.I.腹部	—	—	—	沈窓文、剥離文、R.L削文	ナフ	○	—	38 27
99	9号住	粘床	深鉢	L.I.腹部	—	—	—	貼瘤、沈窓文	ナフ	—	—	38 27
100	9号住	粘床	注口	L.I.壺～底部	63	37	13.6	貼瘤～新部間に沈窓文	—	—	—	38 27
101	9号住	瓦土1層	漆	肩～底部	—	4.4	—	施文(ミガキ)	ナフ	—	—	38 27
102	9号住	瓦土1層	漆	L.I.腹部	(16.1)	—	(28.1)	沈窓文、L.R削文、側狀把手(側位)	ナフ	○	—	38 27
103	9号住	瓦土	深鉢	L.I.腹部	—	—	—	貼瘤、沈窓文、剥離文、R.L削文	ミガキ	○	—	38 27
104	9号住	椚出面	合掌形 盆	肩～底部	—	—	—	(15.0) 沈窓文、剥離文	ナフ	○ ○	吉村?	38 27
105	10号住	瓦面	深鉢	L.I.腹部	13.8	40	12.1	L.R削文	ミガキ	○	—	38 27
106	10号住	瓦土	深鉢	L.I.腹部	—	—	—	貼瘤、沈窓文、L.R削文	ミガキ	○	—	38 27
107	10号住	瓦土	深鉢	L.I.腹部	—	—	—	貼瘤、沈窓文(清子日記)、L.R削文	ミガキ	○	—	38 27

*()の口述、底面は施毛刷、器尚は焼青色。

第2表 土器観察表(5)

No	馬士地点	層位	器種	部位	口径(cm)底径(cm)高さ(cm)	外面(文様、表面、地文、周体など)		内面(調査		備考	図版	写真
						外圓	内圓	保付番				
108	I 1号土坑	埋土 1層	深鉢	肩下半~底部	—	60	(L R) 横文 60(8) 横口縁 (6半径)、沈縁文、無縁R	ミガキ	○	○	○	○
109	II B20d	V層 塗土	深鉢	口横~側部	G41	—	—	ミガキ	○	○	○	○
110	II B22c	V層	深鉢	口横~底	—	—	沈縁文、L R 横文	ミガキ	○	○	○	○
111	II B22c	V層	深鉢	口横~底	—	—	沈縁文、R L 横文	ミガキ	○	○	○	○
112	II B21c	I層	深鉢	口横~底	—	—	R L 横文、肩体L面R文	ミガキ	○	○	○	○
113	II B20d	V層	深鉢	口横~全体	—	—	R L 横文、肩体L面R文	ミガキ	○	○	○	○
114	II B19e~21c	V層 V層	鉢	鉢部	—	—	沈縁文、肩文	ミガキ	○	○	○	○
115	II B20d	V層	深鉢	口横~全体	—	—	沈縁文、L R 横文	ミガキ	○	○	○	○
116	II B20d	V層	台付鉢	口横~台部	115	50	75 無文(ミガキ)	ミガキ	○	○	○	○
117	II B20d	V層	鉢	口横~側部	40(3)	—	R L 横文	ミガキ	○	○	○	○
118	II B16 i	V層	深鉢	口横部	—	—	點縁、沈縁文	ミガキ	○	○	○	○
119	II B20d	V層	深鉢	口横~側部	—	—	點縁、沈縁文、L R 横文	ミガキ	○	○	○	○
120	II B10q	V層	深鉢	口横~底	—	—	點縁、沈縁文、R L 横文	ミガキ	○	○	○	○
121	II B10q	V層	深鉢	口横~全体	—	—	點縁、沈縁文、R L 横文	ミガキ	○	○	○	○
122	II B16 i	V層	深鉢	口横部	—	—	點縁、沈縁文、L R 横文	ミガキ	○	○	○	○
123	II B10q	V層	深鉢	口横部	—	—	沈縁文(椅子目状)、R L 横文	ミガキ	○	○	○	○
124	クリッド小窓 (1号室)	周土	深鉢	口横部	—	—	點縁、沈縁文(椅子目状)	ミガキ	○	○	○	○
125	I 1号櫻	塗土	深鉢	口横部	—	—	刺突文、沈縁文、L R 横文	ミガキ	○	○	○	○
126	II B12 p	V層	深鉢	口横部	—	—	沈縁文	ミガキ	○	○	○	○
127	II B10q	V層	深鉢	口横部	—	—	點縁、沈縁文、R L 横文	ミガキ	○	○	○	○
128	II B13 i	V層	深鉢	口横部	—	—	刺突文、沈縁文、肩口文、R L 横文	ミガキ	○	○	○	○
129	II B10 p	V層	深鉢	口横部	—	—	刺突文、沈縁文、肩口文、R L 横文	ミガキ	○	○	○	○
130	II B10 q	V層	深鉢	口横部	—	—	刺突、沈縁文、肩突文	ミガキ	○	○	○	○
131	II B10 r	V層	深鉢	口横部	—	—	點縁、沈縁文、肩突文、L R 横文	ミガキ	○	○	○	○
132	II B10 q	V層	深鉢	口横部	—	—	刺突、沈縁文、肩突文	ミガキ	○	○	○	○
133	表表	—	深鉢	口横部	—	—	沈縁文	ミガキ	○	○	○	○

* () の口添・既得は既存物、新高は新行物。

第2表 土器調査表(6)

No	出土地点	層位	沿縁	部位	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	外面(文様・模様・地文・刷毛など)	内面調整	備考	同族	写図
134	Ⅲ B10 q	V層	鉢	口縁～全体	(5.8)	—	(5.7)	無文	ナフ	—	40	29
135	Ⅲ B16 i	V層	鉢	口縁～全体	—	—	—	浅波文、LR模文	ナフ	○	40	29
136	Ⅲ B15 j	IV層	深鉢	口縁～全体	(20.2)	5.5	14.6	小波状口縁、LR模文	ミガキ	○	40	29
137	Ⅲ B10 q	V層	深鉢	側～底部	—	3.3	(9.0)	LR無	ナフ	○	40	29
138	Ⅲ B11 o	V層	深鉢	口縁～底部	36.4	7.0	34.4	RL・LR模文	ミガキ	○	40	29
139	Ⅲ B20 d	V層・V層	口縫?	底部	—	—	—	船形、沈底文、LR模文	ナフ	○	41	29
140	Ⅲ B15 i	IV層	注口?	側～底部	—	20	(6.9)	無文(ミガキ)	ナフ	—	41	29
141	1号溝	黑土	注口 or 薩	口縁	—	—	—	光面	ミガキ	○	41	29
142	Ⅲ B16 h	V層	鉢?	口縁～底部上	—	—	—	模状把手(縦)、沈底文、輪文、LR模文	ナフ	—	41	29
143	Ⅲ B19 g	V層	鉢?	口縁～底部上	6.2	—	(6.8)	無文、輪状把手(縦)	ミガキ	—	41	29
144	Ⅲ B14 l	V層	鉢	側～底部	—	—	4.0	(6.8) 無文(ミガキ・相)	ミガキ	○	41	30
145	Ⅲ B10 q	V層	舌形	底	—	—	—	無文(ミガキ)、點竪(欠け)	ナフ	○	41	30
146	Ⅲ B12 o	V層	鉢	完全形	—	3.6	—	無文	ミガキ	○	41	30
147	Ⅲ B19 e	V層	鉢	口縁部	—	—	—	浅波文、RL模文	ミガキ	○	41	30
148	Ⅲ B19 e	Ⅲ層	台付鉢	口縁～底部	—	(7.6)	(12.8)	浅波文、RL模文	ミガキ	○	41	30
149	Ⅲ B2 u	溝底	上部器	口縁～底部	—	—	—	ナフ・ミガキ	ナフ	—	41	30

* () の1個、前述は量定値、筋ぬは質定値。

第3表 土製品観察表(1)

No	出土地点	層位	部位	文様	重量(g)	備考	同族	写図	
150	2号住	層上～上位	左肩	沈底文、刺突文	90.29	—	42	30	
151	Ⅲ B10 q	V層	左肩	點竪、沈底文、刺突文	34.94	—	42	30	
蓋付瓶									
No	出土地点	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	文様	同族	写図
163	Ⅲ B20 d	V層	2.95	2.73	0.76	4.90	穿孔、沈底文、點竪	42	30
164	Ⅲ E13 m	V層	4.71	4.60	0.68	19.45	RL模文、外縁打ち欠け	42	30

第3表 土製品観察表(2)

耳飾り

No	出土地点	隔位	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考	図版	写真
152	3号住	陶土	—	2.26	0.89	5.51		42
153	6号住	米面	—	2.06	1.01	3.02		42
154	6号住	床角	—	1.51	0.73	2.96		42
155	6号住	米面	—	1.29	1.0	3.62		42
156	6号住	陶土	—	2.09	1.06	4.59		42
157	6号住	襷十	—	1.80	1.0	3.75		42
158	6号住	陶土	2.22	1.07	6.85		42	30
159	II B11 q	瓦	1.58	1.03	4.0		42	30
160	II B13 i	瓦	1.60	0.93	3.24	内側に赤色焼付箇	42	30
161	II B16 j	瓦	1.20	1.09	4.10		42	30
162	II B17 i	瓦	1.47	1.05	4.33		42	30

第4表 石器観察表(1)

No	部種	出土地点	部位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	產地・時代	備考	図版	写真
165	石鏡	II B15 j	瓦	2.29	1.17	0.35	0.65	珪質灰岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	アスファルト付箇	44	31
166	石鏡	II B8 u	N網	(2.47)	1.26	0.39	0.73	珪質灰岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	アスファルト付箇	44	31
167	石鏡	II B16 i	1号鏡	—	1.50	0.45	1.12	珪質灰岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	アスファルト付箇	44	31
168	石鏡	3号住	輪幅	(1.97)	0.98	0.56	1.0	珪質灰岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	アスファルト付箇	44	31
169	石鏡	6号住	床面	2.73	1.42	0.45	1.01	珪質灰岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	アスファルト付箇	44	31
170	石鏡	6号住	盤十	2.59	1.69	0.49	2.06	珪質灰岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	アスファルト付箇	44	31
171	石鏡	6号住	泥土	3.68	1.69	0.49	2.06	珪質灰岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	アスファルト付箇	44	31
172	石鏡	8号住	瓦上	(2.17)	1.08	0.44	0.83	珪質灰岩	北上山地 古生代後期～中生代初期	アスファルト付箇	44	31
173	石鏡	8号住	瓦十	(2.73)	1.50	0.47	1.43	珪質灰岩	北上山地 古生代後期～中生代初期	アスファルト付箇	44	31
174	石鏡	II B8 t	N網	(2.19)	1.06	0.33	0.51	珪質灰岩	北上山地 古生代後期～中生代初期	アスファルト付箇	44	31
175	石鏡	II B10 o	瓦	2.78	1.24	0.45	0.97	珪質灰岩	北上山地 古生代後期～中生代初期	アスファルト付箇	44	31
176	石鏡	II B11 o	N網	2.21	0.97	0.37	0.64	珪質灰岩	北上山地 古生代後期～中生代初期	アスファルト付箇	44	31
177	石鏡	II B11 p	瓦	2.25	0.92	0.36	0.50	珪質灰岩	北上山地 古生代後期～中生代初期	アスファルト付箇	44	31
178	石鏡	II B12 o	N網	(2.03)	0.96	0.39	0.57	珪質灰岩	北上山地 古生代後期～中生代初期	アスファルト付箇	44	31
179	石鏡	II B16 i	1号鏡	—	3.13	0.43	0.40	珪質灰岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	アスファルト付箇	44	31
180	石鏡	II B19 g	瓦	1.58	1.27	0.28	0.43	珪質灰岩	北上山地 古生代後期～中生代初期	アスファルト付箇	44	31
181	石鏡	6号住	瓦上	(3.29)	1.15	0.54	1.32	珪質灰岩	北上山地 古生代後期～中生代初期	アスファルト付箇	44	31

* () は参考値。

第4表 石器觀察表(2)

No.	種類	出土地点	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質・産地・時代	備考	国名	写真
182	石錐	II B10 q	IV層	4.85	1.76	0.90	3.39	頁岩 北上山地 古生代後期-中生代前期		43	31
183	石錐	II B15 i	IV層	6.28	2.36	0.90	5.08	頁岩 北上山地 古生代後期-中生代前期		43	31
184	石錐	II B19 q	IV層	6.05	2.08	1.12	6.43	頁岩 北上山地 古生代後期-中生代前期		43	31
185	石錐	II B16 i 1号	泥炭上	1.76	1.19	0.60	0.82	珪質頁岩 奥羽山脈 新生代第三紀		43	31
186	石錐	2号住	泥炭上	1.62	0.58	0.49	0.46	頁岩 奥羽山脈 新生代第三紀		43	31
187	石錐	6号住	泥土	1.46	0.65	0.53	0.51	頁岩 奥羽山脈 新生代第三紀		43	31
188	石錐	6号住	土	1.58	0.67	0.48	0.33	頁岩 奥羽山脈 新生代第三紀		43	31
189	石錐	II B9 r	IV層	1.84	0.74	0.52	0.62	頁岩 奥羽山脈 新生代第三紀		43	31
190	石錐	II B9 r	IV層	1.66	0.73	0.55	0.72	頁岩 奥羽山脈 新生代第三紀		43	31
191	石錐	II B9 r	IV層	1.38	0.81	0.54	0.55	頁岩 奥羽山脈 新生代第三紀		43	31
192	石錐	II B10 q	IV層	6.28	2.02	0.47	0.88	珪質頁岩 奥羽山脈 新生代第三紀		43	31
193	石錐	II B11 q	IV層	2.16	0.63	0.39	0.52	頁岩 奥羽山脈 新生代第三紀		43	31
194	石錐	II B12 o	IV層	1.62	0.59	0.45	0.42	頁岩 奥羽山脈 新生代第三紀		44	31
195	石錐	II B12 o	IV層	1.44	0.56	0.35	0.30	頁岩 奥羽山脈 新生代第三紀		44	31
196	石錐	II B12 o	IV層	1.85	0.60	0.54	0.59	頁岩 奥羽山脈 新生代第三紀		44	31
197	石錐	II B11 q	カクタシ	6.46	2.98	1.15	13.18	頁岩 奥羽山脈 新生代第三紀		44	31
198	石錐	8号住	土	3.41	4.64	1.15	12.45	頁岩 北上山地 古生代後期-中生代前期		44	31
199	石錐	8号住	土	3.75	5.29	0.81	11.98	頁岩 北上山地 古生代後期-中生代前期		44	31
200	石錐	II B12 m 1号	泥炭上	3.97	5.73	1.34	22.41	頁岩 北上山地 古生代後期-中生代前期		44	31
201	石錐	5号住	泥炭上	6.73	4.20	1.79	25.62	頁岩 奥羽山脈 新生代第三紀		44	31
202	石錐	8号住	土	3.97	4.29	1.13	11.76	頁岩 奥羽山脈 新生代第三紀		44	32
203	石錐	II B8 u	IV層	4.52	6.27	1.25	35.82	頁岩 奥羽山脈 新生代第三紀		44	32
204	石錐	II B10 q	IV層	6.51	6.68	1.07	10.12	頁岩 北上山地 古生代後期-中生代前期		44	32
205	石錐	II B11 q	IV層	5.67	3.24	1.31	8.68	頁岩 北上山地 古生代後期-中生代前期		44	32
206	骨質石斧	9号住	泥土	4.59	2.88	1.28	29.36	頁岩 北上山地 古生代後期-中生代前期		44	32
207	骨質石斧	6号住	土	11.4	9.5	5.0	83.67	砂岩 新生代 新第三紀	失落部分	45	32
208	骨質石斧	8号住	床面	12.2	9.2	7.4	93.44	砂岩 新生代 新第三紀	失落部分	45	32
209	石刀	9号住	地上	11.2	7.7	4.0	507.8	砂岩 新生代 新第三紀	先端破損	45	32
210	凹刃	II B15 j	泥炭土	12.2	7.2	3.8	461.5	砂岩 新生代 新第三紀		45	32
211	凹刃	II B16 i	IV層	9.3	7.4	2.9	270.6	砂岩 新生代 新第三紀		45	32
212	削石	6号住 加	膠質灰塵 S2	9.8	9.7	3.65	532.4	砂岩 新生代 新第三紀		45	32
213	削石	6号住	泥土	14.6	13.0	9.8	220.0	珪質粉土 北上山地 中生代白堊紀		46	33

* ()は残存部。

第4表 石器観察表(3)

No.	器種	出土地点	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	產地・時代	備考	同版	等級	
214	磨石	II B14R 1号窓	溝頭土	10.9	10.4	4.8	846.5	砂岩	新生代 新第三紀		46	33	
215	磨石	II B16L	Ⅴ層	10.5	7.1	4.6	558.2	砂岩	新生代 新第三紀		46	33	
216	磨石	II B18R 1号窓	溝頭土	10.1	7.7	6.8	799.6	花崗岩	新生代 新第三紀	先端部欠け		46	33
217	磨石	II B15i	Ⅴ層	10.6	4.5	3.6	281.0	砂岩	新生代 新第三紀		46	33	
218	石皿	3号住・鍋	構成層1	(15.3)	(11.0)	6.5	* 13.0	砂岩	新生代 新第三紀		47	33	
219	石皿	3号住・鍋	構成層2	(14.3)	(7.6)	5.5	* 906.2	砂岩	新生代 新第三紀		47	33	
220	石皿	3号住	床面	31.3	25.9	7.8	* 75.8	砂岩	新生代 新第三紀		47	33	
221	石皿	6号住	埋土下位	27.2	27.8	5.5	* 62	花崗岩	新生代 新第三紀		47	33	
222	石皿	6号住	埋土下位	30.4	26.1	8.2	* 11.9	砂岩	新生代 新第三紀		47	34	
223	石皿	6号住	廻上	21.0	19.8	4.2	* 25.8	砂岩	新生代 新第三紀		47	34	
224	石皿	6号住	廻上	(40.8)	44.9	8.6	* 265.5	砂岩	新生代 新第三紀		48	34	
225	石皿	6号住	廻上	29.9	19.8	9.1	* 80.0	砂岩	新生代 新第三紀		48	34	
226	石皿	6号住	廻上	38.8	20.6	6.7	* 80.7	砂岩	新生代 新第三紀		48	34	
227	石皿	6号住	廻上	27.9	21.4	9.2	* 61.1	砂岩	新生代 新第三紀		49	35	
228	石皿	6号住	廻上	24.8	17.2	6.2	* 40.0	花崗岩	新生代 新第三紀		49	35	
229	石皿	6号住	廻上	34.6	26.5	9.9	* 12.5	砂岩	新生代 新第三紀		49	35	
230	石皿	6号住	廻上	31.5	25.3	9.8	* 11.1	砂岩	新生代 新第三紀		49	35	
231	石皿	6号住	廻上	43.9	35.6	10.8	* 46.0	砂岩	新生代 新第三紀		49	35	
232	石皿	8号住	廻上	25.7	16.6	8.6	* 50.0	砂岩	新生代 新第三紀		50	36	
233	石皿	8号住	廻上	10.9	12.6	4.6	* 82.9	砂岩	新生代 新第三紀		50	36	
234	石皿	1号台	構成層1	28.5	15.3	5.9	* 29.9	砂岩	新生代 新第三紀	燃り、燒き 跡あり		50	36
235	石皿	1号台	構成層2	27.7	12.1	7.9	* 35.7	砂岩	新生代 新第三紀		50	36	
236	石皿	1号土坑	廻土下位	27.0	14.9	7.6	* 35.7	砂岩	新生代 新第三紀		50	36	
237	石皿	1号土坑	廻土下位	19.6	12.8	5.6	* 35.7	砂岩	新生代 新第三紀		50	36	
238	石皿	II B9t	Ⅴ層	19.9	12.4	5.3	1623.3	砂岩	新生代 新第三紀		51	36	
239	石皿	II B11o	Ⅴ層	17.9	15.7	5.1					51	36	
240	石皿	II B11p	Ⅴ層	(10.9)	14.8	4.0	963.7	安山岩	新生代 新第三紀		51	37	
241	石皿	II B15j	1号	32.2	23.6	4.75	* 49.7	粘板岩	新生代 新第三紀	周邊部剥離あり	51	37	
242	石皿	II B20c	V層	(13.9)	7.8	3.4	350.5	砂岩	新生代 新第三紀	周邊部剥離あり	51	37	
243	砾石	II B20e 1号窓	溝頭1	(18.7)	(7.6)	2.8	576.2	チタナ	新生代 新第三紀		51	37	

第5表 石器品種観察表

No.	器種	出土地点	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	產地・時代	備考	同版	等級
244	石塊	6号住	廻土下位	(18.2)	3.2	2.6	269.7	頁岩	新生代 新第三紀		51	37
245	不明石製品	II B18h	Ⅴ層	(6.8)	1.87	1.42	241.7	灰岩	新生代 新第三紀		51	37
246	丸石	8号住	廻土下位	3.33	1.61	0.96	6.78	ヒスコ?	不詳		51	37

* () は残存部。

V まとめ

1 調査区

調査区は主に遺跡の北東部、中央部、南西部で、幅5mの細長い箇所で、遺構は南西部の瀬月内川に平行した段丘線部から集中して見つかっており、調査区北東部は湿地状の地形で遺構・遺物は見つかっていない。中央部の現在未舗装道路として使用されている部分についても北側半分は湿地状、南側については道路の下に排水溝があった。地山を掘りこんで作られた痕跡があり、このため遺構はなく、遺物が散布的に出土するのみである。

2 遺構

今回の調査で検出した遺構は、堅穴住居跡10棟、炉跡1基、土坑2基、溝跡1条である。時期は溝跡が古代、他は検出面と出土遺物から縄文時代後期後葉である。

(1) 堅穴住居跡

今回の調査で最も多く検出された遺構である。調査区が狭隘なことや調査方法の制約、遺構の重複などにより、遺構全体を調査できたものはなかった。重複関係にあるものは5号住居(古)→6号住居→1号住居(新)、4号住居(古)→1号住居(新)、2号土坑(古)→1号土坑(新)で他に古代の溝跡によって3・7・10号住居が切られている。埋土に火山灰の混入が確認できたものは2棟で1号住居の検出面からは十和田a降下火山灰(to-a)、6号住居埋土上位からは十和田b降下火山灰(to-b)が検出されている。住居内に炉が確認できたものは3・5・8・9号住居跡で形態はすべて石囲炉である。6号住居床面中央部からは石囲炉と同様の形態をした遺構が検出されているが、燃焼痕がないことや、周辺を含め土坑状の掘り込みになっていることから炉とは異なる性格の遺構と考えられる。また、住居内に土坑が確認できたのは5・7号住居である。

今回の調査では住居内から出土した土器は縄文時代後期後葉～末葉にかけての土器であり、出土数の多い深鉢形土器に装飾される文様の特徴から仮に口縁部端や頭部に貼瘤縄文帯を主体とする土器群を前半期、縄文帯に代わって刺突文、刻目文が主体に施される土器群を伴うものを後半期とした場合、2・5・7・8・10号住居が前半期、1・3・4・6・9号住居が後半期に属すると考えられる。

(2) 炉

II B 18 g グリッドで1基検出した。縄文時代の遺構では最も西側で標高の低い地点から見つかった。遺構は古代の溝に隣接しており、この影響で遺構を含む周辺一帯が湿地状に変色した状況であった。このため遺構の確認が遅れたが、炉のすぐ北側の調査区境壁面では堅穴状の掘り込みが確認できる（ただし、掘り下げ後に確認したためプラン全体は未確認である）ため、住居跡に伴う可能性が考えられる。

(3) 土坑

3号住居の東側、II B 12 o グリッドで2基検出し、重複関係にある。1号土坑の埋土上位からは土器片が多く出土した。土器以外の遺物は確認されていないが、用途は貯蔵穴と考えられる。

(4) 溝 跡

調査区南西部の段丘線に沿って検出された。埋土上位には十和田a降下火山灰と思われる堆積物が確認された。遺構の南側壁面の立ち上がりは北側と比較して、緩やかな箇所もあり、そこを深掘りによる調査で確認したところ溝地状になっていることが確認された。また、溝周辺の土壤は水性堆積による植物の腐食などで変色した状態であった。遺構の埋土には縄文土器片や大きな礫などが含まれていたが、古代の遺物は見つからなかった。

3 遺 物

(1) 土 器

土器については3号住居7~10、6号住38~42、7号住居49~54などが床面から出土している。7号住居の床面出土土器については鉢・深鉢・注口土器・皿形土器など器種も多様である。住居床面以外の出土では8号住居とその周辺に一括廃棄された土器がある。住居内出土のものについては本来8号住居床面~埋土に含まれていたものを混同している可能性は否定できないが、第21図のような括りで遺物を取り上げたため、図中で同じ括りにある、または隣接するものについては少なくとも同時に一括廃棄されたものと考えられる。73・74・76、92~97は住居外および住居壁面を跨いで出土し、住居とははっきりと区別できる。また、地点の異なる65・66の破片が接合するので隣接して出土した64・70~72・77は一括性が高いと考えられる。

本遺跡の主体となる第II群土器は後期後葉~末葉の十腰内V式、風張式土器、瘤付土器第II段階~第IV段階相当を主体とする。当該期の土器が出土している遺跡では青森県三戸郡階上町滝端遺跡の第4号住居床面出土土器や岩手県九戸郡一戸町小井田IV遺跡の第II群5類土器、南東北では宮城県氣仙沼市田柄貝塚の第V群および第VI群土器などがある。軽米町の遺跡では大日向II遺跡(第2~5次調査)第IV群4類および5類土器、長倉I遺跡第III群5類および6類上器、板子屋敷3遺跡7号住居・8号住居出土土器などで出土している。

(2) 土 製 品

土偶2点、耳飾り10点、垂れ飾り1点、円盤状土製品1点が出土した。いずれも住居埋土かその周辺から出土し、土偶と耳飾りは破片である。また、耳飾りの一部と垂れ飾りには赤色顔料の付着が確認された。

(3) 石 器

出土した石器は石鏃、石錐、石匙などの剥片石器と磨製石斧、磨石類、敲石、砥石、石皿の砾石器である。特に6号住居からは石皿の出土数が多い。使用された石材は剥片石器が頁岩、珪質頁岩で、砾石器では磨製石斧は頁岩、砥石はチャート、磨石類は砂岩、安山岩、石皿類は砂岩、花崗閃綠岩、安山岩、粘板岩などである。

(4) 石 製 品

石棒1点、垂れ飾り1点、用途不明石製品1点が出土した。石棒は先端部が欠けている。垂れ飾りはヒスイ産地分析によると既存の産地データとは化学組成が異なるため、原石産地を断定するには至らなかった(79~84頁参照)。

(5) 自然遺物

炭化した種実が2・5・8号住居内から検出された。分析鑑定結果から植物性食料の採集や食性の一端が明らかになった。遺跡からはこれらの調理に使用した石皿や磨石類が出土しており、植物性食料の採集・加工・調理が日常的に行われていたと考えられる。

4 総 括

今回の調査で駒板3遺跡が縄文時代後期後半を中心とする集落遺跡であることが判明した。また、他にも縄文時代中期中葉の土器片や古代の土師器なども見つかっていることから複数の時期に跨って生活に利用されていた複合的な遺跡であることも明らかになった。ただし、駒板3遺跡の西側に隣接する中位段丘面には、まっこ遺跡・駒板4遺跡などがあり、縄文時代後期以外の時代についてはそちらが集落の主体である可能性も考えられる。

引用・参考文献

- 岩手県埋蔵文化財センター 1983 「遠地Ⅱ・Ⅲ遺跡」 岩手県埋文センター文化財調査報告書第64集
- 岩手県埋蔵文化財センター 1983 「小井田IV遺跡」 岩手県埋文センター文化財調査報告書第69集
- 岩手県埋蔵文化財センター 1984 「謙II遺跡」 岩手県埋文センター文化財調査報告書第78集
- 岩手県埋蔵文化財センター 1986 「駒板遺跡」 岩手県埋文センター文化財調査報告書第98集
- 岩手県埋蔵文化財センター 1994 「大日向II遺跡」 岩手県埋文センター文化財調査報告書第225集
- 岩手県埋蔵文化財センター 2000 「長倉I遺跡」 岩手県埋文センター文化財調査報告書第336集
- 岩手県埋蔵文化財センター 2006 「上野場3遺跡」 岩手県埋文センター文化財調査報告書第477集
- 岩手県埋蔵文化財センター 2008 「板子屋敷3遺跡」 岩手県埋文センター文化財調査報告書第537集
- 階上町教育委員会 2000 『流山遺跡発掘調査報告書』
- 小林圭一 1999 「東北地方 後期（瘤付土器）」『縄文時代』第10号 縄文時代文化研究会
- 小林圭一 2008 「瘤付土器」 小林圭一編「総覧 縄文土器」刊行委員会
- 鈴木克彦 2001 「北日本の縄文後期土器編年の研究」 雄山閣
- 鈴木克彦 2004 「硬玉研究序論」『玉文化』日本玉文化研究会

VI 分析・鑑定

駒板3遺跡における炭化種実同定

株式会社古環境研究所

1 はじめに

植物の種子や果実は、比較的強靭なものが多く堆積物中に残存することが多い。そこで、堆積物から種実を検出し、その群集の構成や組成を調べ、過去の植生や群落の構成要素を明らかにし古環境の推定を行うことが可能である。また、出土した単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。

ここでは、駒板3遺跡の縄文時代後期後半の住居跡より出土した炭化種実について同定を行い、当時の食料および植物利用について検討する。

2 試 料

試料は、5号住居の炉跡上面（No.1からNo.3）、2号住居（No.4）、8号住居（No.5）より出土した炭化種実である。時期は縄文時代後期後半である。

3 方 法

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

4 結 果

(1) 分類群

樹木2分類群が同定された。学名、和名および粒数を表1に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に同定の根拠となる形態的特徴を記載する。

〔樹木〕

オニグルミ *Juglans ailanthifolia* Carr. 核（破片） クルミ科

茶褐色で円形～楕円形を呈し、一端がとがる。側面には縦に走る一本の縫合線がめぐる。表面全体に不規則な隆起がある。

クリ *Castanea crenata* S. et Z. 子葉（破片） ブナ科

子葉は黒褐色で広楕円形を呈し、下端に広い付き部がある。断面は楕円～半円形である。

(2) 種実群集の特徴

- ・ 5号住居の炉跡上面（No.1からNo.3）
オニグルミの破片、クリの破片が同定された。
- ・ 2号住居（No.4）
クリの破片が同定された。
- ・ 8号住居（No.5）
クリの破片が同定された。

5 所見とまとめ

駒板3遺跡において検出された縄文時代後期後半とされる住居跡より出土した炭化種実は、オニグルミ核、クリ子葉であった。いずれも種子が食用となる有用植物であり、堅く残りやすい核と子葉である。他の食用等の有用植物の植物遺存体は分解し、選択的に炭化したもののが保存されたとみられる。

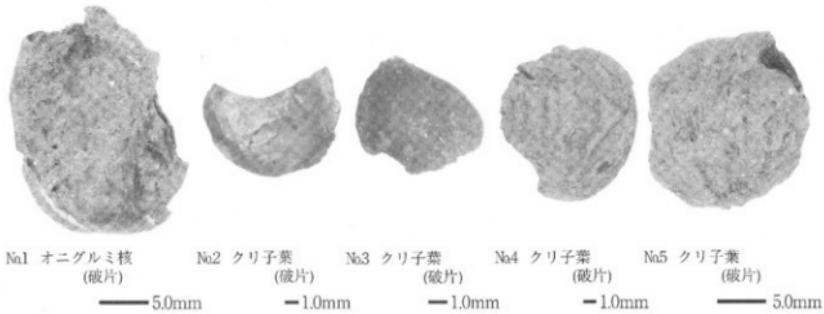
参考文献

- 南木睦亭（1993） 種・果実・種子。日本第四紀学会編、第四紀試料分析法、東京大学出版会、p.276 - 283。
渡辺誠（1975） 縄文時代の植物食。雄山閣、187p.

表1 駒板3遺跡における炭化種実同定結果

学名	和名	部位	No 1			No 2		No 3		No 4		No 5	
			5号住居跡			2号住居跡遺土内							
Arbor	樹木												
<i>Juglans ailanthifolia</i> Carr	オニグルミ	核（破片）		1									
<i>Castanea crenata</i> S. et Z.	クリ	子葉（破片）			1	1			1			1	
Total	合計			1	1	1			1			1	

駒板3遺跡の炭化種実



駒板3遺跡出土のヒスイ石製品の原石产地同定分析

株式会社第四紀地質研究所

1 実験条件

分析はエネルギー分散型蛍光X線分析装置で行なった。

この分析装置は標準試料を必要としないファンダメンタルパラメータ法(FP法)による自動定量計算システムが採用されており、6 C～9.2 Uまでの元素分析ができ、ハイパワーX線源(最大30 kV、4 mA)の採用で微量試料～最大290 mm ϕ × 80 mm Hまでの大型試料の測定が可能である。小形試料では16試料自動交換機構により連続して分析できる。分析はバルクFP法でおこなった。FP法とは試料を構成する全元素の種類と濃度、X線源のスペクトル分布、装置の光学系、各元素の質量吸収係数など装置定数や物性値を用いて、試料から発生する各元素の理論強度を計算する方法である。分析にあたっては標準サンプルを分析し、キャリブレーションを行い、装置の正常さを保つて行った。

実験条件はバルクFP法(スタンダードレス方式)、分析雰囲気=真空、X線管ターゲット素材=Rh、加速電圧=30 kV、管電流=自動制御、分析時間=200秒(有効分析時間)である。

分析対象元素はSi, Ti, Al, Fe, Mn, Mg, Ca, Na, K, P, Rb, Sr, Y, Zrの14元素、分析値は試料の含水量=0と仮定し、酸化物の重量%を100%にノーマライズし、表示した。

地質学的には分析値の重量%は小数点以下2桁で表示することになっているが、微量元素のRb, Sr, Y, Zrは重量%では小数点以下3～4桁の微量となり、小数点以下2桁では0と表示される。ここでは分析装置のソフトにより計算された小数点以下4桁を用いて化学分析結果を表示した。

主要素と微量元素の酸化物濃度(重量%)でSiO₂-Al₂O₃, CaO-Na₂Oの2組の組み合わせで図を作成した。

2 分析試料

分析に供した試料は第1表化学分析表に示すように駒板3遺跡から出土したヒスイ製造物1個で、分析は遺物の表面と裏面を行った。比較対比試料として柏木川13遺跡から出土した石製品と薄片、産地同定用の試料として北海道埋蔵文化財センター所有のベンケユクトラシナイ沢で採取した原石、斜里町立知床博物館より提供していただいた日高ヒスイ、井上が糸魚川翡翠峡の周辺で採取したヒスイの原石である(北海道埋蔵文化財センター、2004)。

3 分析結果

3-1 SiO₂-Al₂O₃ の相関について

第1図 SiO₂-Al₂O₃ 図に示すように柏木川13遺跡の石製品、日高ヒスイ、糸魚川翡翠は SiO₂-Al₂O₃ の相関においておのおの異なる領域に集中する。しかし、ベンケユクトラシナイ沢の原石は全体に分散し、組成に類似性がない。柏木川13遺跡出土の石製品は SiO₂ が 52 ~ 60%、Al₂O₃ が 2 ~ 6% の領域、日高ヒスイは SiO₂ が 48 ~ 55%、Al₂O₃ が 0 ~ 0.1% の領域、糸魚川翡翠は SiO₂ が 98 ~ 100%、Al₂O₃ が 0 ~ 6% の領域におのおの集中する。

駒板3遺跡のヒスイはこれらの各原石と柏木川13遺跡の出土遺物の領域とは異なり、Al₂O₃ が 20% 以上の高い領域にあり、該当する原石はない。

3-2 CaO - Na₂O の相関について

第2図 CaO - Na₂O 図に示すように柏木川13遺跡の石製品、日高ヒスイ、糸魚川翡翠はおのおの異なる領域に集中する。しかし、ベンケユクトラシナイ沢の原石は全体に分散し、組成に類似性がない。柏木川13遺跡出土の石製品は CaO が 7 ~ 22%、日高ヒスイは CaO が 21 ~ 25%、糸魚川翡翠は CaO が 0 ~ 3% の領域におのおの集中する。

駒板3遺跡のヒスイはこれらの各原石と柏木川13遺跡の出土遺物の領域とは異なり、Na₂O が 13% 以上の高い領域にあり、該当する原石はない。

4 まとめ

- 1) 第1図～第2図に示すように、駒板3遺跡出土のヒスイ製遺物は柏木川13遺跡の石製品、日高ヒスイ、糸魚川翡翠などとは化学組成が異なり、現在の対比試料では原産地の判断は難しい。
- 2) 化学組成的に見て、対比試料とは異質であるが肉眼的な観察による岩相では糸魚川の翡翠に似ており、糸魚川の翡翠のうち良質の固いものは石英脈にヒスイ輝石の生成したもので、SiO₂ が 98 ~ 100% と高いが、一部には翡翠色をしたもので幾分材質的に異なる緑色岩があり、糸魚川の翡翠の分析したものの中に SiO₂ が 60% のものがあり、これらの中にも近いのかもしれないが確証はない。



駒板3遺跡 ヒスイ製遺物—表面

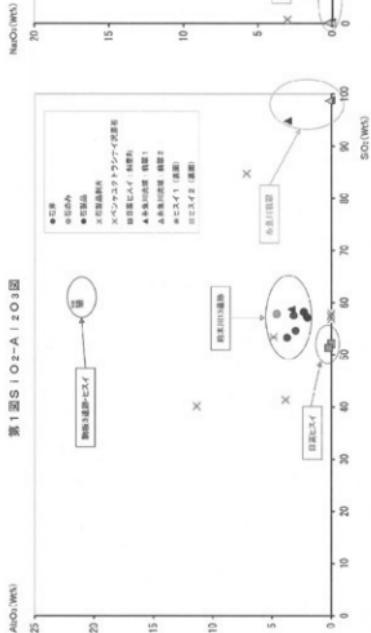


駒板3遺跡 ヒスイ製遺物—裏面

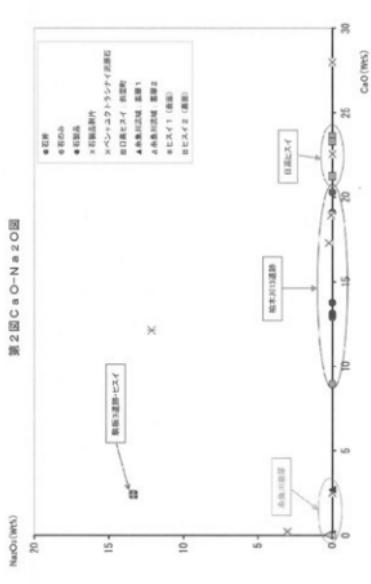
引用文献

- 井上 崑 (2000) 東北・北陸北部における原産地黒曜石の蛍光X線分析 (XRF) 北越考古学、第11号、23-38/
- 井上 崑 (2001) テフラ中の火山ガラスの同定に関する一提言、轍石学報誌、第7号 23-51.
- 上野修一・二宮修二・網下 守・大沢真澄 (1996) 石器時代の本領域における黒曜石の利用について、栃木県立博物館紀要、第3号、91-115.
- 勝井義雄・佐藤博明 (2000) 平凡社地学辞典、地学団体研究会、p 493.
- 周藤賢治・小山内康人 (2002) 共立出版、記載岩石学上、5-20.
- Suzuki,M.(1973)Chronology of Prehistoric Human Activity in Kanto, Japan Journal of the Faculty of Science, the University of Tokyo Sec. V Vol IV, Part 3, pp. 241-318.
- 白泥団体研究会 (1963) 白泥遺跡の研究、白泥団体研究会、9-10.
- 神保小虎 (1886) 黒曜石比較研究諸言、人類学会報告、第二号、24.
- 高橋 肇・西田史郎 (1986) 伊豆半島の縄文遺跡出土黒曜石の原石産地、考古学と自然科学、19、29-41.
- 手島秀一・河内吉平 (1994) 和田岬東方・竜山火山岩類の地質と岩石、信州大学志賀自然教育研究施設研究業績、31、1-8.
- 堺 隆 (1998) 水期の終末と細石刃文化の出現、科学、岩波書店、VOL.68 NO.4 329-336.
- 東村武信・藤科哲男 (1982) 黒曜石製石器の産地推定—蛍光X線による石器産地の推定、古文化財に関する保存科学と人文・自然科学、昭和56年度特定研究、141-163.
- (財)北海道埋蔵文化財センター (2004) 北海道埋蔵文化財センター調査報告書、第203集、柏木川13遺跡
- 翌月明彦・池谷信之・小林克次・武藏由里 (1994) 遺跡内における黒曜石製石器の原産地別分布について一 沼津市土手上遺跡B B V層、北海道立地下資源調査所、40.
- 渡辺 仁 (1948) 北海道の黒曜石、人類学雑誌、第60巻、第1号

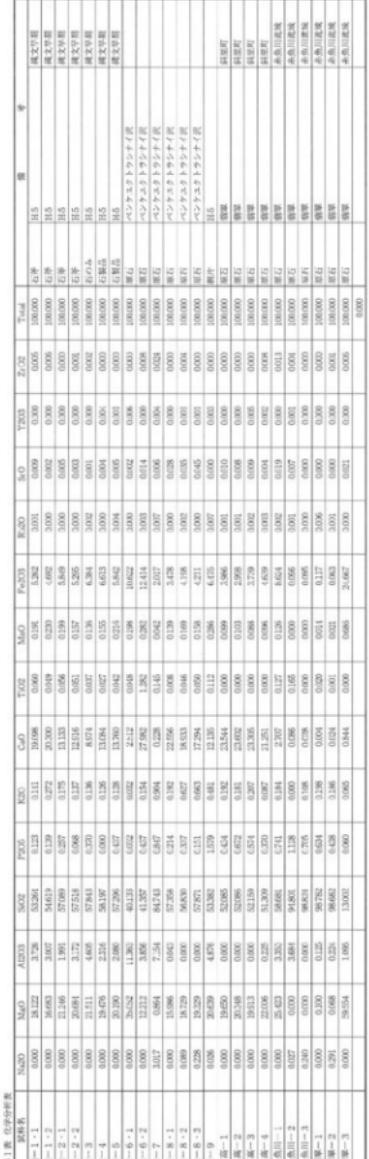
第1回 S1O2-A12O3 図



第2回 CaO-Na2O 図

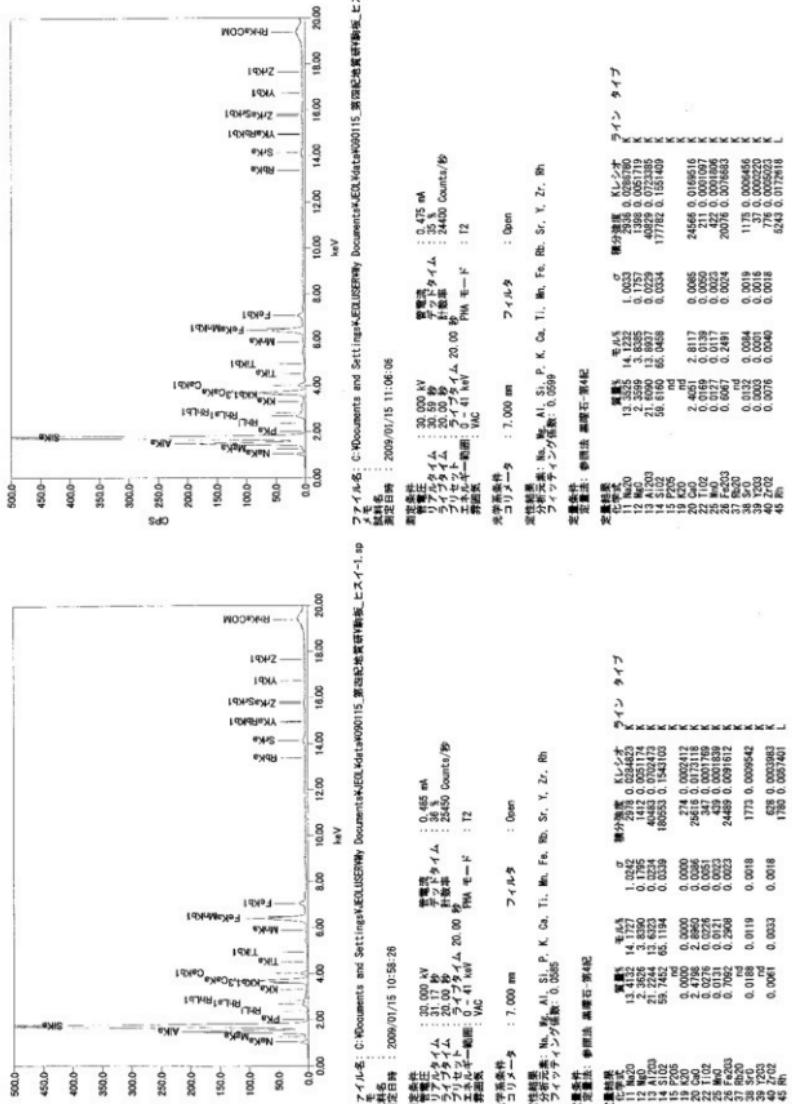


第1回の分子構造



第2回の分子構造





写 真 図 版



調査区遠景（上が北東）



調査区全景（上が北）



調査区近景（南西側・南西から）

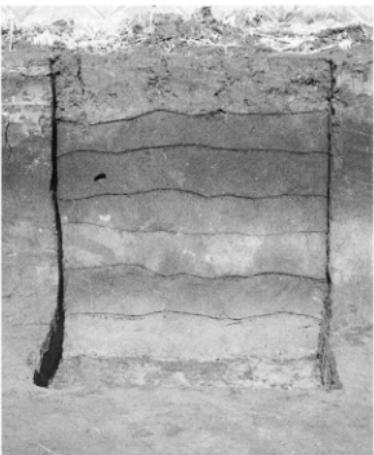


調査区中央部（道路部分・南から）

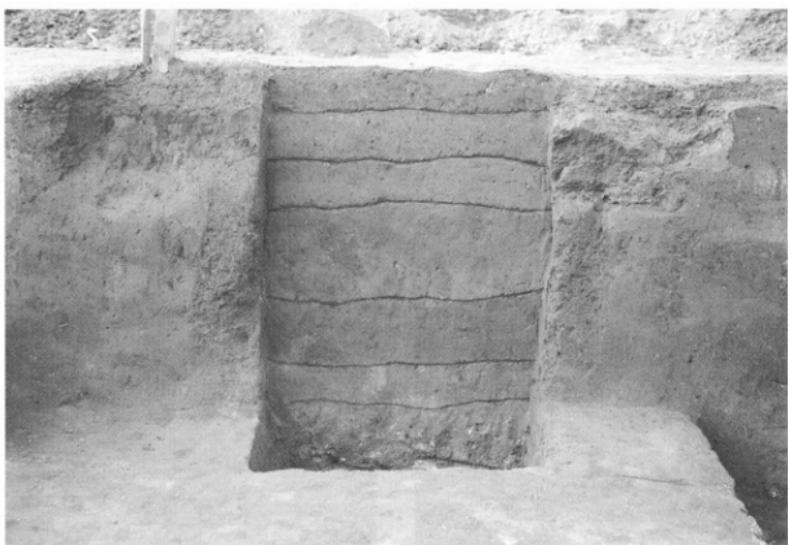
写真図版2 調査区



II B 19 f 基本土層



I C 9 i 基本土層

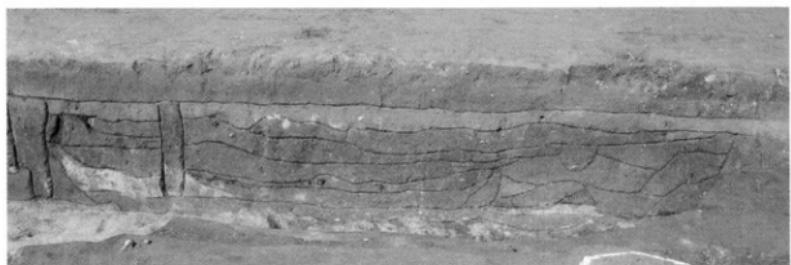


II B 14 j 基本土層（メインセクション）

写真図版3 基本土層



1号住居跡（平面・NE→）



埋土断面



土器 (6)

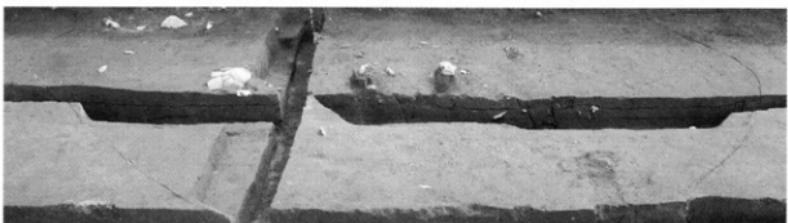


土器 (4)

写真図版 4 1・2号住居跡



2号住居跡（検出・NW →）



埋土断面（NE-SW ベルト・NW →）



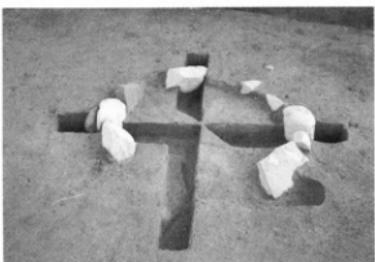
埋土断面（SE-NW ベルト・NE →）



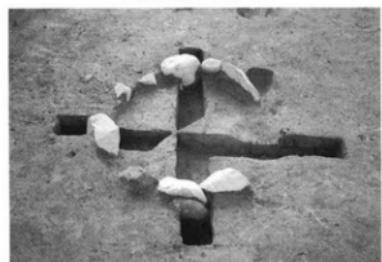
3号住居跡（平面・NW→）



炉跡（平面・NW→）



炉跡（断面・NW→）

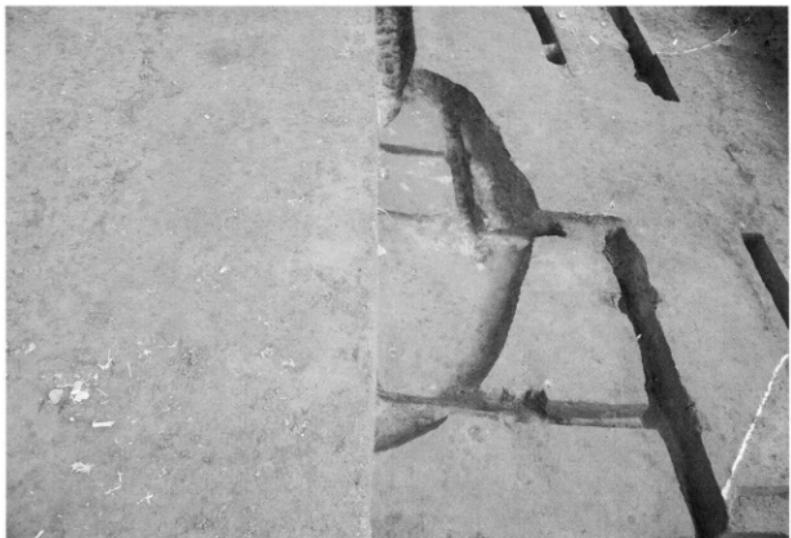


炉跡（断面・SE→）



土器(8)出土状況（NW→）

写真図版 6 3号住居跡



4号住居跡（平面・SW→）



埋土断面（SW-NE ベルト）



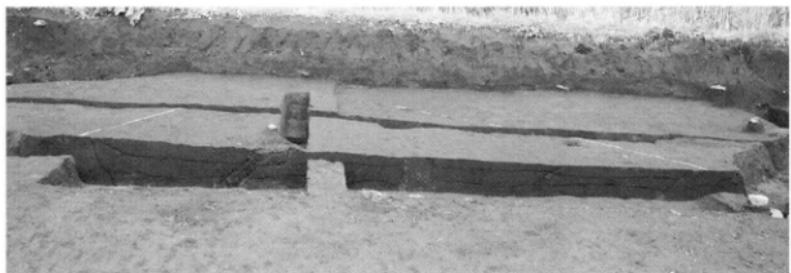
埋土断面（NW-SE ベルト）



5号住居跡（平面・NE→）



埋土断面（SE-NW ベルト）

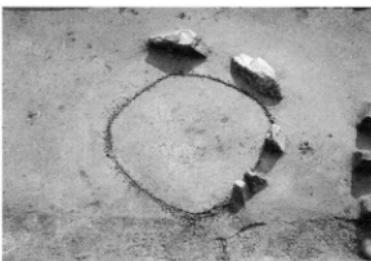


埋土断面（SW-NE ベルト）

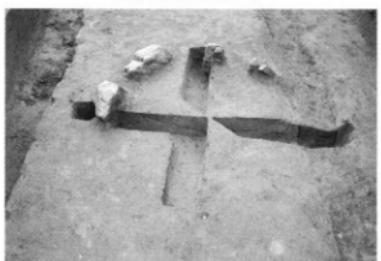
写真図版 8 5号住居跡



炉跡（検出①・NE →）



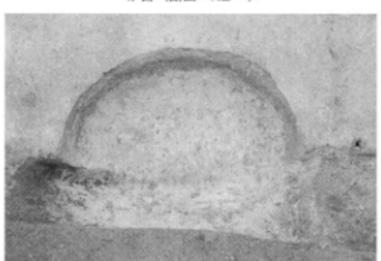
炉跡（検出②・NE →）



炉跡（断面・NE →）



炉跡（断面・SE →）



住居内土坑（断面・SE →）



5号住居跡完掘



住居内土坑（平面・SE →）



土器(32)出土状況

写真図版9 5号住居跡



6号住居跡（平面・NE→）



埋土断面（SW-NE ベルト・SE→）



埋土断面（NW-SE ベルト・SW→）

写真図版 10 6号住居跡



住居に廃棄されていた櫻① (NW →)



住居に廃棄されていた櫻② (W →)



掘り込みをもつ炉跡? (NW →)



断面 (NE →)



出土遺物① (石棒・NE →)



出土遺物② (土器・NE →)



出土遺物③ (土器・NE →)



6号住居跡掘り方完掘 (NE →)

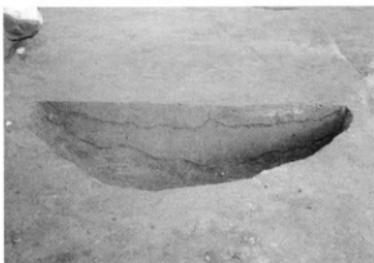
写真図版 11 6号住居跡



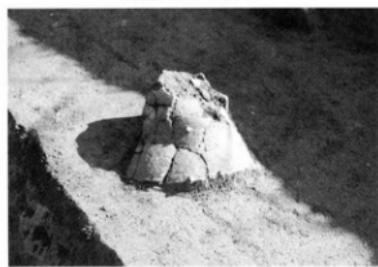
7号住居跡（平面・NW→）



完掘（平面・NW→）



土坑断面（SW→）

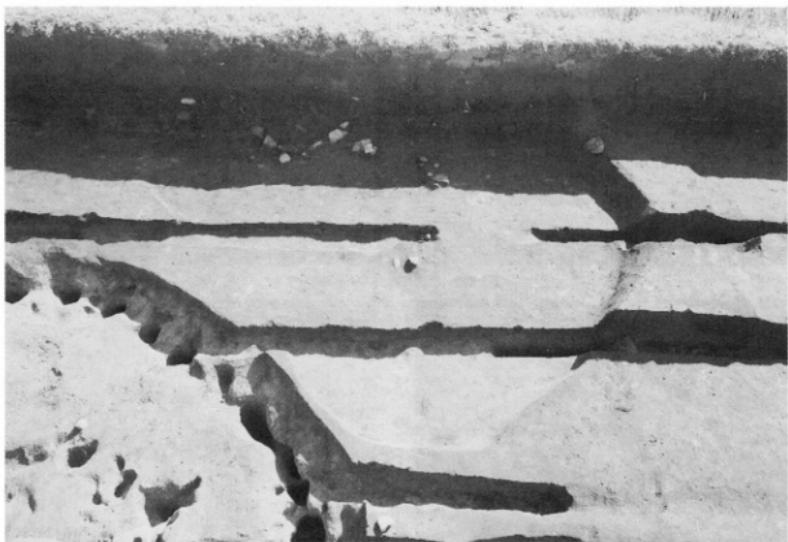


土器(49)出土状況（SW→）

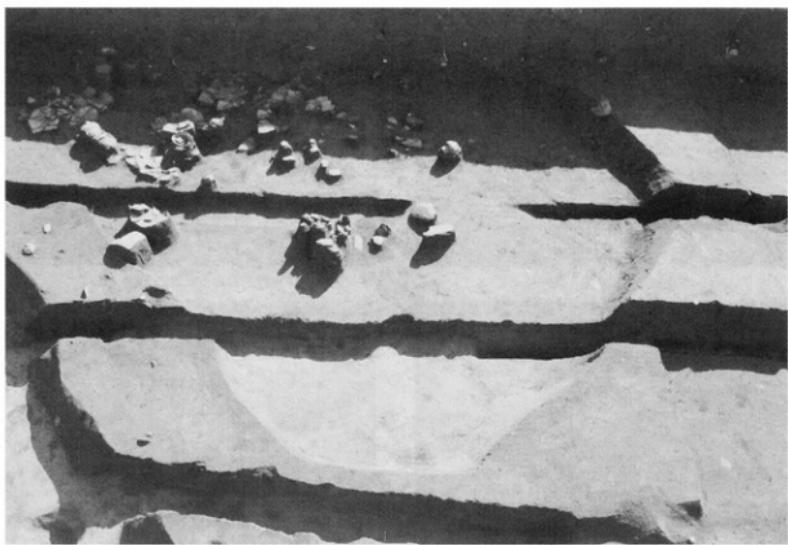


土器(46)出土状況（SW→）

写真図版 12 7号住居跡



8号住居跡（平面・NW→）



確認調査区分遺物出土状況（平面・NW→）



埋土断面 (SE-NW ベルト・NE →)



炉跡 (検出・SE →)



遺物出土状況① (NW →)



遺物出土状況② (SE →)



土器(61)出土状況① (SW →)



土器(69)出土状況② (SW →)



石製品(246)出土状況 (SW →)

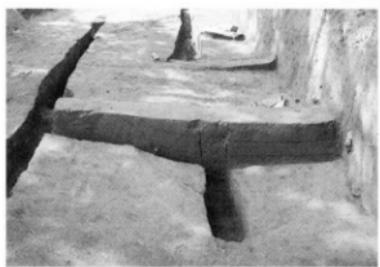
写真図版 14 8号住居跡



9号住居跡（平面・SW→）



埋土断面（SE→）



埋土断面（NE→）



炉跡（平面・NW→）

写真図版 15 9号住居跡



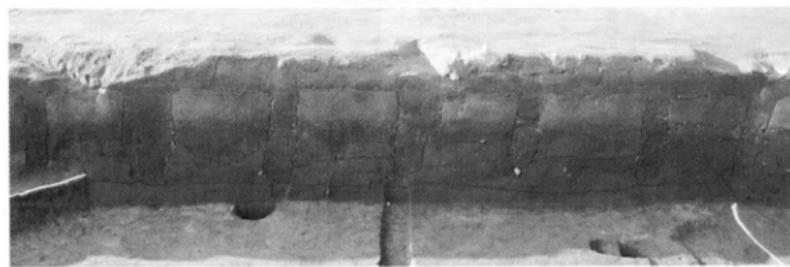
9号住居跡—炉跡（平面・SW→）



9号住居跡—炉跡（断面・SE→）



10号住居跡（平面・SE→）



10号住居跡（断面・SE→）

写真図版 16 9・10号住居跡



1号炉（平面・N→）



覆土断面（S→）



断面（S→）



断面（E→）



1号炉に隣接する調査区壁面（断面・SE→）

写真図版 17 1号炉



1号溝東側（平面・NE→）



1号溝西側（平面・SW→）



1号溝（断面①・SW→）



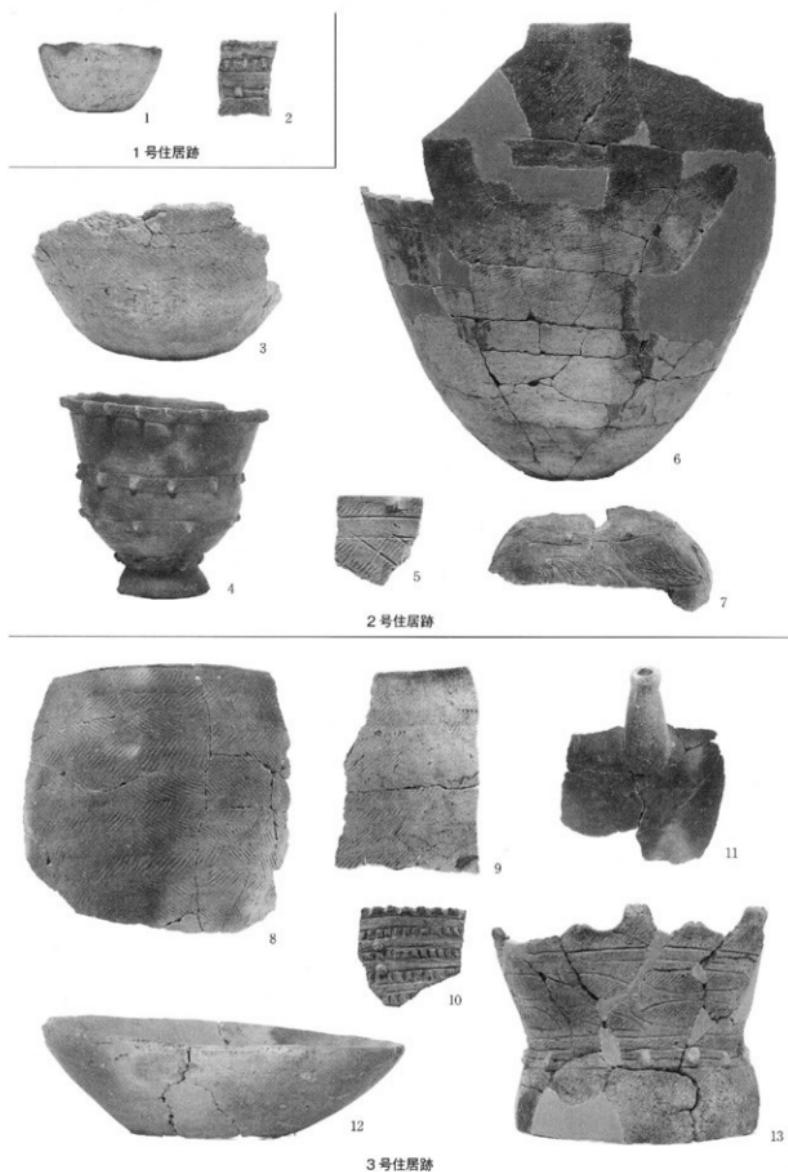
1号溝（断面②・SW→）



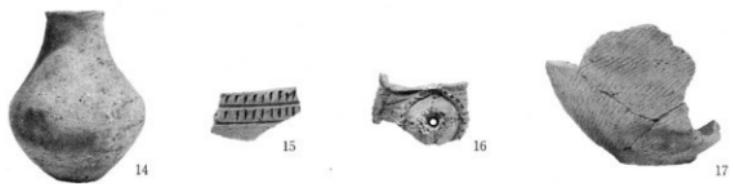
1号土坑（平面・W→）



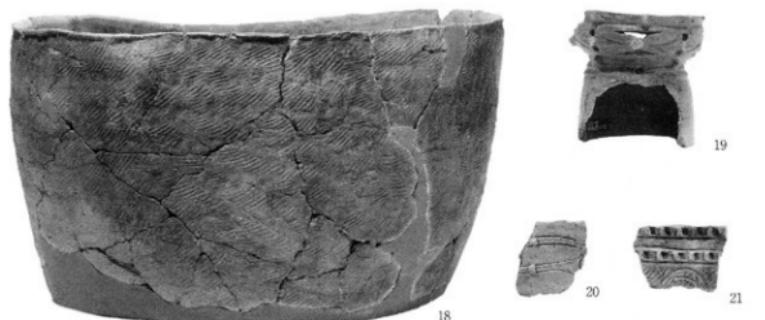
2号土坑（断面・NE→）



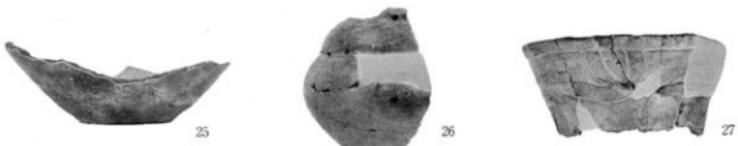
写真図版 19 遺構内出土土器 (1)



3号住居跡



4号住居跡



5号住居跡

写真図版 20 遺構内出土土器 (2)



28



29



30



31



32



33



34

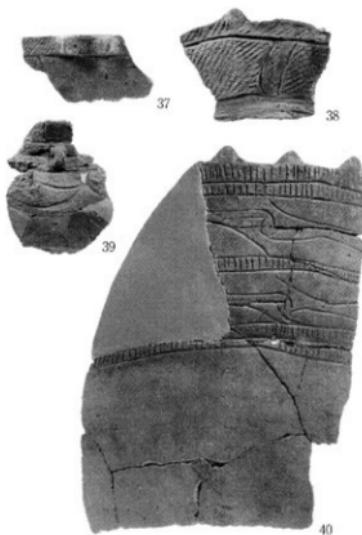


35



36

5号住居跡



6号住居跡



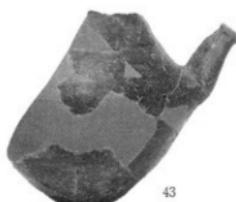
41



42



43



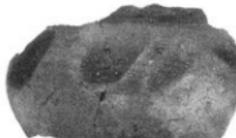
44



45



46



47



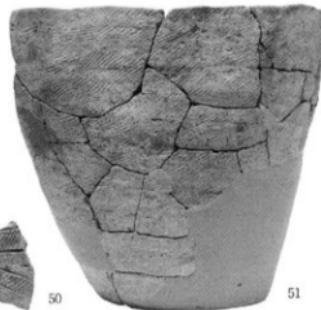
48



49



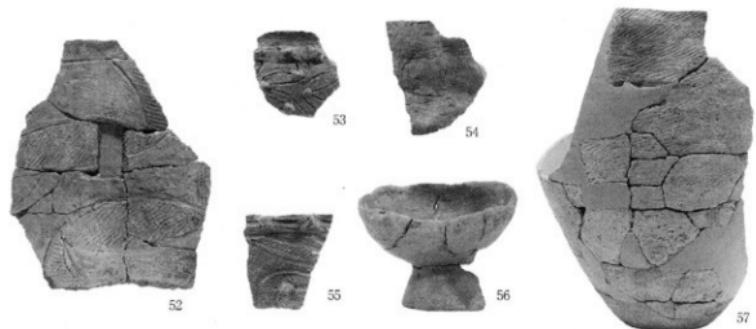
7号住居跡



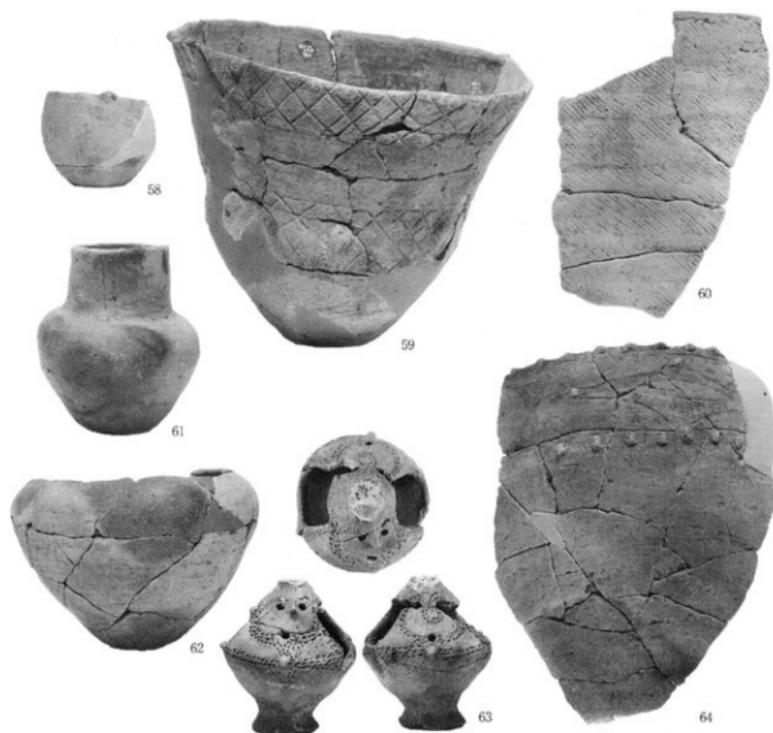
50

51

写真図版 22 遺構内出土土器 (4)



7号住居跡



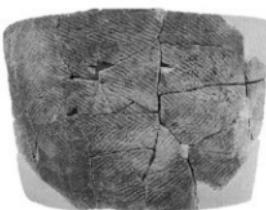
8号住居跡



65



66



67



68



70



71



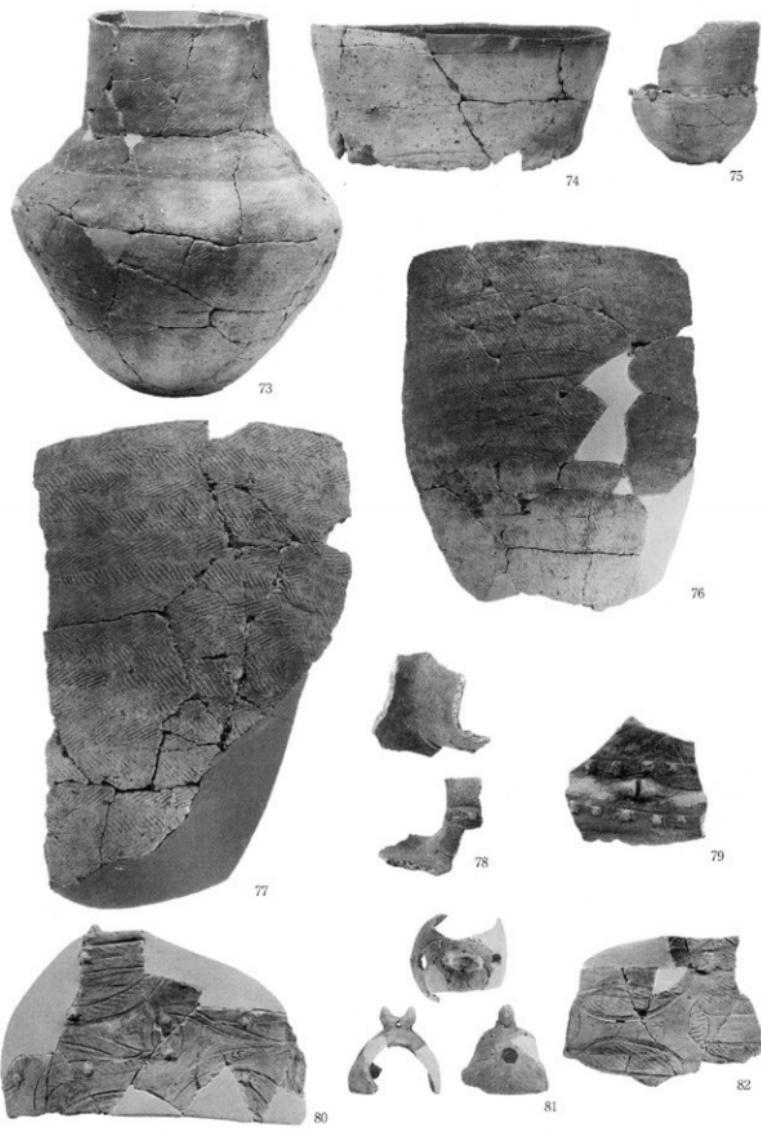
69



72

8号住居跡

写真図版 24 遺構内出土土器（6）



8号住居跡

写真図版 25 遺構内出土土器 (7)



8号住居跡（周辺含む）

写真図版 26 遺構内出土土器（8）



8号住居跡（周辺）



98



101



99



9号住居跡



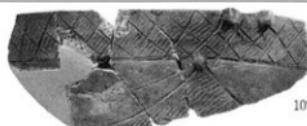
100



103



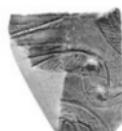
104



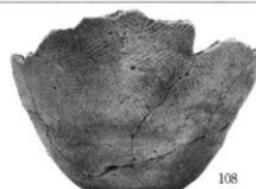
107



10号住居跡

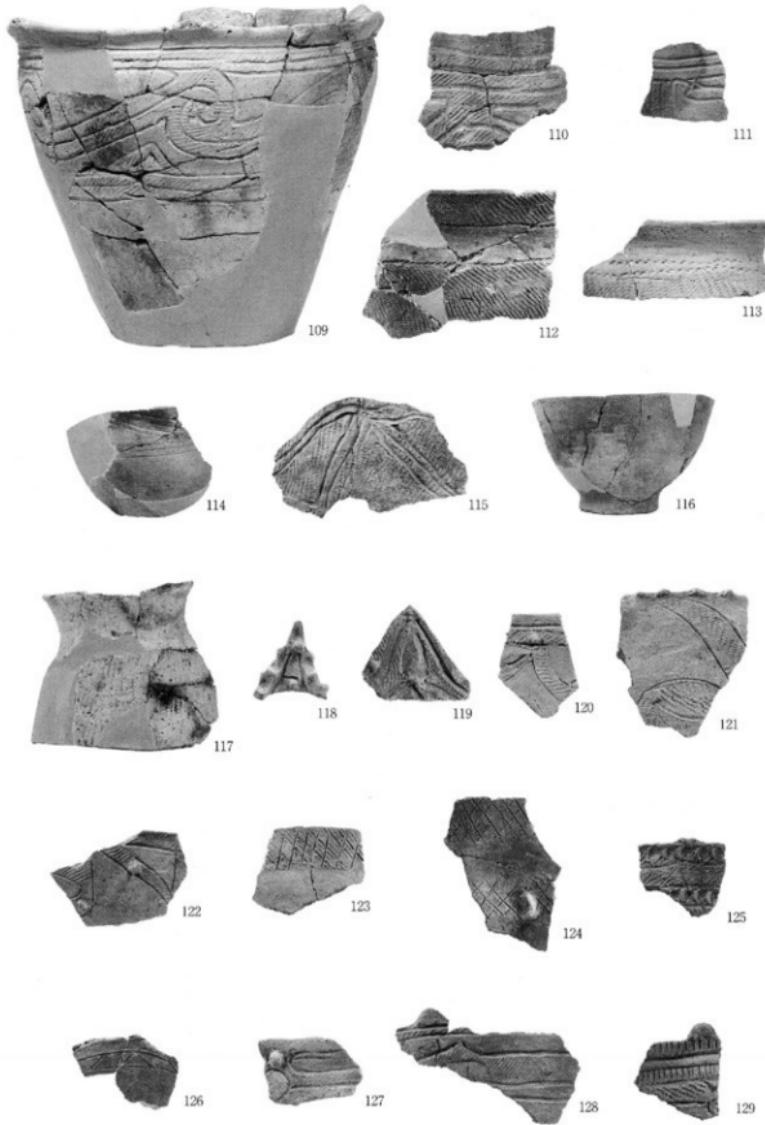


106

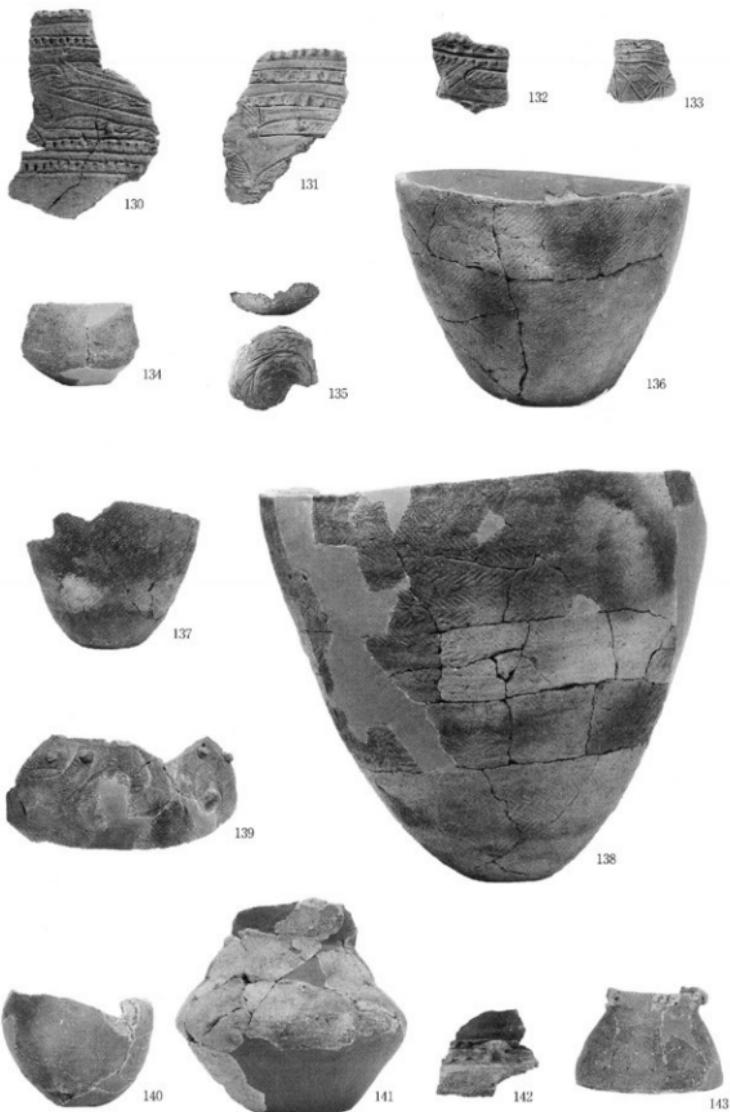


1号土坑

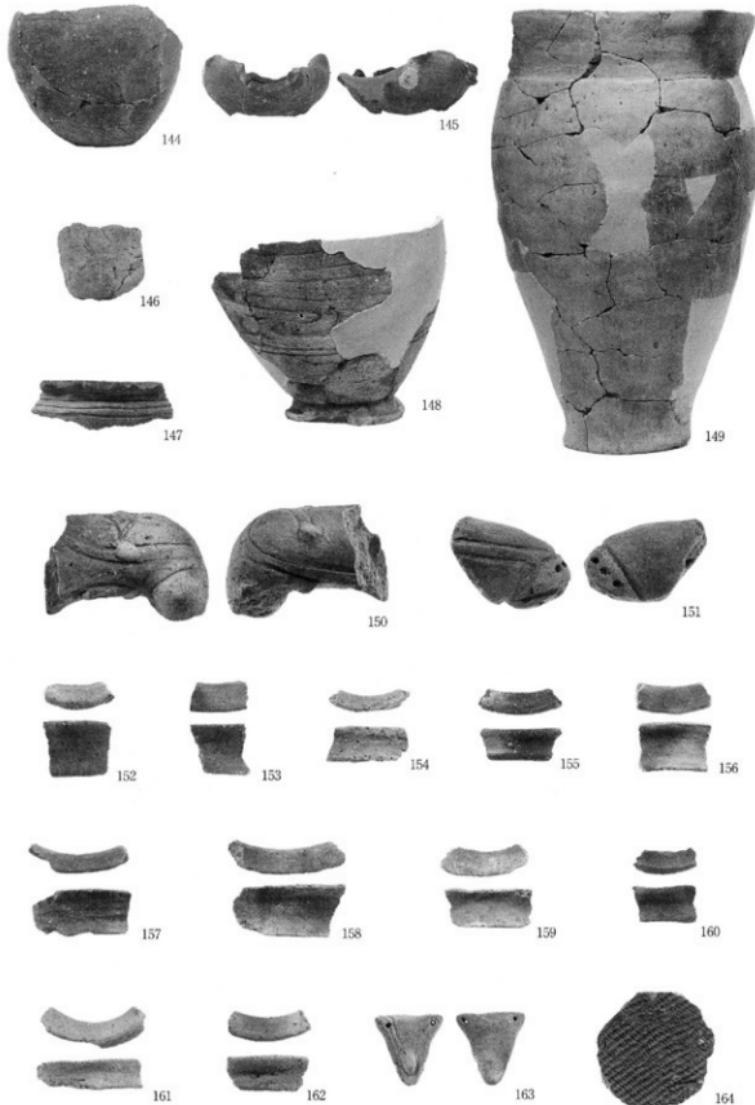
写真図版 27 遺構内出土土器（9）



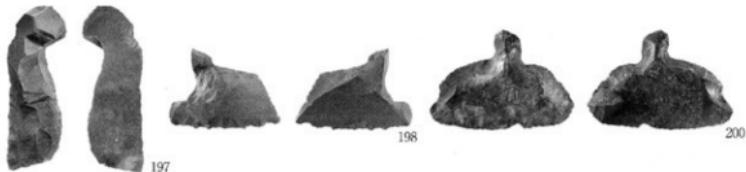
写真図版 28 遺構出土土器（1）



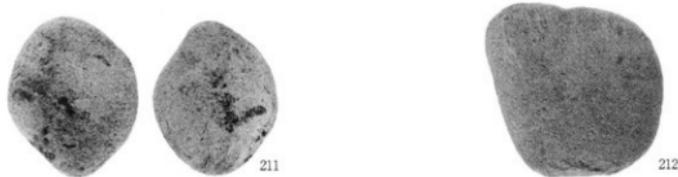
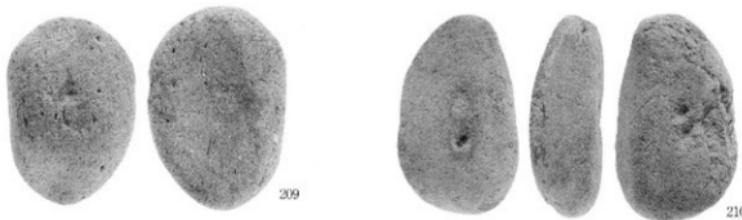
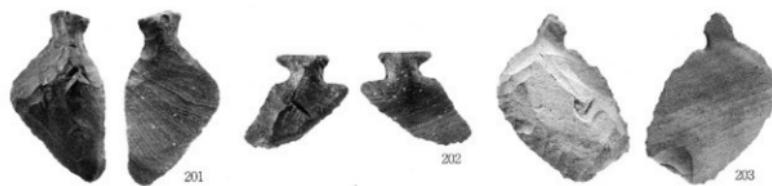
写真図版 29 遺構外出土土器（2）



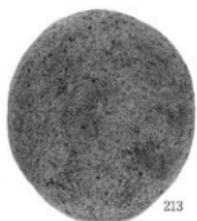
写真図版 30 遺構外出土土器（3）、土製品



写真図版 31 石器 (1)



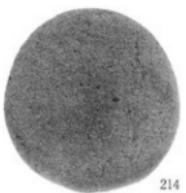
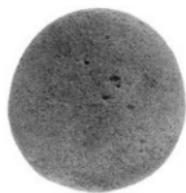
写真図版 32 石器 (2)



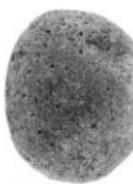
213



215



214



216



217



218



219



220



221

写真図版 33 石器 (3)



222



224



223



225



226

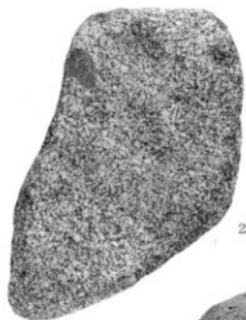
写真図版 34 石器 (4)



227



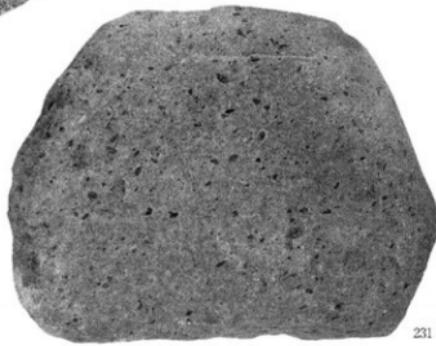
229



228

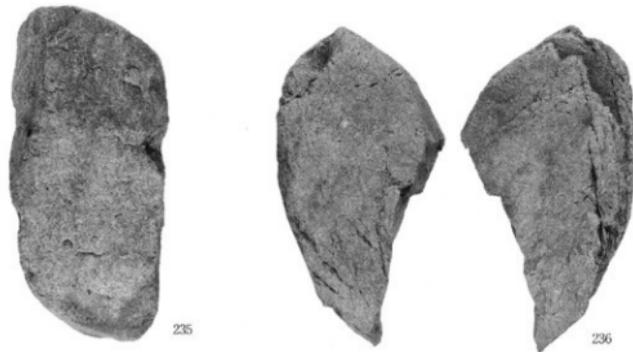
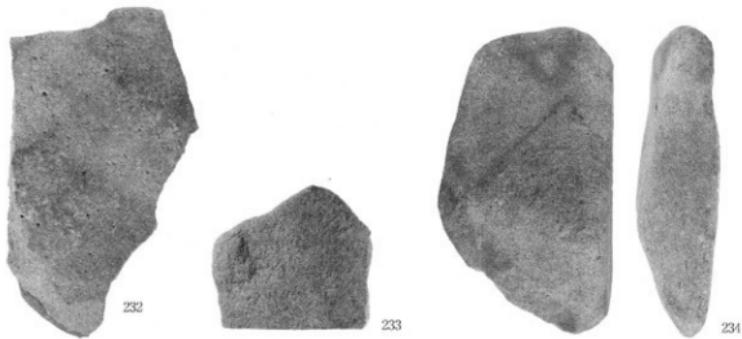


230



231

写真図版 35 石器 (5)



写真図版 36 石器 (6)



240



241



242



243



244



245



246

写真図版 37 石器（7）、石製品

報告書抄録

ふりがな	こまいたさんいせきはくつちょうさほうこくしょ							
書名	胸板3遺跡発掘調査報告書							
副書名	中山間地域総合整備事業(大清水地区)関連遺跡発掘調査							
卷次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第563集							
編著者名	濱 浩二郎							
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL(019) 638-9001							
発行年月日	2009年12月24日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 。。。.	東經 。。。.	調査期間	調査面積	調査原因
こまいたさんいせき 胸板3遺跡	いわてごんぐりょうへくさん 岩手県 九戸郡 かのとすくわん かのとすくわん 新井町字山内 しんいちょうじやまうち 第1地割字胸板 だい1じわりじやほん 34-1ほか	03501	IF92-1057	40度 17分 10秒	141度 24分 16秒	2008.09.01 ～ 2008.11.18	1,587 m ²	中山間地域総合 整備事業大清水 地区事業に伴う 緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
胸板3遺跡	集落跡	縄文時代	堅穴住居跡 かんげきじゅき 10棟	縄文土器・石器（後 期前葉～末葉中 心）、土製品（土偶 など）、石製品（石 棒など）、炭化種実 (オニグルミ・クリ)	縄文後期後葉～末葉の集落跡、住居跡 埋土から人面付香炉形土器・ヒスイ？ 石製品出土。			
			火葬 かいろ 1基	土坑 どこう 2基				
		古代	溝跡 くわせき 1条	土師器甕 どしまきひち 1点				
要約	今回の調査で胸板3遺跡は、縄文時代後期後葉を主体とする集落遺跡であることが明らかとなった。							

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 563 集

駒板 3 遺跡発掘調査報告書

中山間地域総合整備事業(大清水地区)関連遺跡発掘調査

印 刷 平成 21 年 12 月 21 日

發 行 平成 21 年 12 月 24 日

編 集 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地

電話(019)638-9001

發 行 岩手県二戸地方振興局農政部農村整備室

〒028-6103 岩手県二戸市石切所字荷渡 6-3

電話(0195)23-9207

(財)岩手県文化振興事業団

〒020-0023 岩手県盛岡市内丸 13 番 1 号

電話(019)654-2235

印 刷 第一印刷有限会社

〒020-0122 岩手県盛岡市みたけ四丁目 6-40

電話(019)646-6001

